鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 22

一般国道９号（東伯中山道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅡ

鳥取県東伯郡琴浦町・西伯郡大山町

UME DA KAYA UNE

梅田萱峯遺跡Ⅳ

２００８

鳥取県埋蔵文化財センター
国土交通省　倉吉河川国道事務所

1　調査区遠景（調査前・南西から）

2　調査区遠景（調査後・南から）

巻頭図版 2

1　調査区完掘状況

1　墳丘墓調査状況（南から）

巻頭図版 4

1　SK99・100・121・122遺物出土状況（西から）

2　SI16完掘状況（北東から）

序

一般国道９号東伯中山道路の改築に伴う発掘調査は、平成12年度から行われ、平成19年度末時点で遺跡数は25遺跡、調査面積は延べ22万平方メートルに及んでいます。

この発掘調査は、平成17年度から鳥取県直営の事業となり、鳥取県埋蔵文化財センターが担当することとなりました。

そのうち、琴浦町及び大山町に所在する梅田萱峯遺跡では平成17年度から調査を行っており、平成19年度には、弥生時代から古墳時代の集落跡や県内最古級の弥生墳丘墓、奈良時代の鍛冶関連の遺構などを検出するに至り、当地域の歴史を解明するための重要な資料を確認することができました。

また、埋蔵文化財センターでは、発掘調査により明らかとなった遺跡や出土品を活用し、その普及啓発に努めることも重要な業務としております。

梅田萱峯遺跡では現地説明会を開催し、あいにくの天候ながら県内外から多くの方々に御参加いただき、その素晴らしさ、重要性を実感していただきました。

本書はその調査結果を報告書としてまとめたものです。この報告書が、郷土の歴史を解き明かしていく一助となり、埋蔵文化財が郷土の誇りとなることを期待しております。

本書をまとめるにあたり、国土交通省倉吉河川国道事務所、地元関係者の方々には、一方ならぬ御指導、御協力を頂きました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

鳥取県埋蔵文化財センター
所　長　久保　穰二朗

序　　文

一般国道９号は、起点の京都府京都市から山口県下関市にいたる、総延長約691㎞の幹線道路であり、西日本日本海沿岸地域の産業・経済活動の大動脈として、地域住民の生活と密着し大きな役割を果たしています。

このうち、国土交通省倉吉河川国道事務所は、東伯郡湯梨浜町から米子市(鳥取－島根県境)までを管轄しており、時代の要請に沿った各種の道路整備事業を実施しているところです。

東伯中山道路は、西伯郡大山町から米子市淀江町にかけての、国道９号の渋滞緩和、荒天時の交通障害の解消、また、災害時の緊急輸送の代替道路確保、などを目的として計画された一般国道９号のバイパス(自動車専用道路)であり、鋭意事業に着手しているところです。

このルートには、多数の埋蔵文化財包蔵地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第94条の規定に基づき、鳥取県教育委員会教育長に通知した結果、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行うこととなりました。

平成19年度は、「梅田萱峯遺跡」、「梅田六ツ塚遺跡」、「梅田東前谷中峯遺跡」、「南原千軒遺跡」の４遺跡について鳥取県埋蔵文化財センターと発掘調査の委託契約を締結し、発掘調査が行われました。

本書は、上記の「梅田萱峯遺跡」の調査成果をまとめたものです。この貴重な記録が、文化財に対する認識と理解を深めるため、ならびに、教育及び学術研究のために広く活用されることを願うと同時に、国土交通省の道路事業が、文化財保護に深い関心を持ち、記録保存に努力していることを御理解いただければ幸いと存じます。

事前の協議をはじめ、現地での調査から報告書の編集にいたるまで御尽力いただいた鳥取県埋蔵文化財センターの関係者に対して、心から感謝申し上げます。

平成20年３月

国土交通省　倉吉河川国道事務所
所　長　飛 田　　敏 行

例　言

1．本報告書は、国土交通省倉吉河川国道事務所の委託により、鳥取県埋蔵文化財センターが、一般国道９号（東伯中山道路）の改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、平成19年度に行った梅田萱峯（うめだかやうね）遺跡（４、５区）の発掘調査報告書である。

2．本報告書に収載した遺跡の所在地及び調査面積は以下のとおりである。
梅田萱峯遺跡（４、５区）：東伯郡琴浦町大字梅田字後谷395-1ほか　　調査面積：9,550㎡

3．本報告書で示す標高は、３級基準点H10-3-16を基準とする標高値を使用した。方位は公共座標北を示す。なお、Ｘ：、Ｙ：の数値は世界測地系に準拠した公共座標第Ｖ系の座標値である。

4．本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000「伯耆浦安」「赤碕」、赤碕町（現琴浦町）の1/2,500「赤碕町都市計画図１」を使用した。

5．本発掘調査にあたり、墳丘墓の調査について島根大学教授渡邊貞幸氏、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター肥後弘幸氏に、墳丘墓の貼石に用いられた石材について鳥取大学名誉教授赤木三郎氏に、それぞれ御指導・御助言いただいた。明記して深謝いたします。

6．本報告にあたり、調査前・調査後航空写真撮影、調査前・調査後地形測量、出土炭化材の樹種同定を業者委託した。

7．本報告書に掲載した遺物の実測・浄書は、発掘事業室調査担当（琴浦調査事務所）で行った。

8．本報告書で使用した遺構・遺物写真は調査員が撮影した。

9．本報告書の執筆は調査員が分担して行い、各文末に文責を記した。本書の編集は湯村･小山が行った。

10．発掘調査によって作成された図面・写真などの記録類、出土遺物は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

11．現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々、機関に御指導・御協力いただいた。明記して深謝いたします。（敬称略）
　赤木三郎、肥後弘幸、槙林啓介、松本岩雄、渡邊貞幸、琴浦町教育委員会

凡　例

1．遺物の注記における遺跡名には「カヤウネ4」、「カヤウネ5」を略号とし、合わせて「遺構名、遺物番号、日付」を記入した。
2．本報告書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
SI：竪穴住居跡　SS：段状遺構　SB：掘立柱建物跡　SK：土坑　SZ：墳丘墓　SD：溝状遺構
P：柱穴・ピット
3．本調査(4、5区)における遺構番号は基本的には前回調査(1、2区)からの連番としている。
4．発掘調査時における遺構名・番号と報告書記載時の遺構名・番号を、一部について変更したものがある。新旧の遺構名・番号対照表は下表に示した。
5．遺構図・遺物実測図の縮尺については、特に説明がない限り以下のとおりである。
竪穴住居跡・段状遺構・掘立柱建物跡：1/60、土坑：1/40、炭化材出土状況・遺物出土状況：1/20、土器：1/4、石器1/1・2/3・1/2・1/4、土製品・鉄製品・鉄滓：1/4、玉製品・玉作関連遺物：1/1・2/3
6．本書における土層名称・土器色調は、基本的には『新版 標準土色帳』による。
7．遺構図・遺物実測図に用いたトーン及び記号は、特に説明がない限り以下のとおりである。
：地山　：貼床　：焼土面　：炭化物集中層　：鉄滓付着範囲
：赤彩・赤色顔料付着範囲　S：石器　F：鉄製品・鉄滓　J：玉製品・玉作関連遺物
遺物出土ポイント：●(土器・土製品)・□(石器)・▲(鉄製品・鉄滓)・○(玉製品・玉作関連遺物)
8．遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、鉄器をトーンとし、それ以外のものは白抜きで示した。
9．遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は現存値を示す。
10．本報告書における遺構・遺物の時期決定は下記参考文献に基づいており、時期区分及び文章中の表記は下表に従っている。

参考文献

清水真一 1992 「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』木耳社
辻　信広 1999 「弥生中期中～後葉の土器について」『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会
濵田竜彦 2002 「洞ノ原墳墓群に関する一考察－洞ノ原1号墓・洞ノ原2号墓出土土器の再検討を中心に－」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2001』鳥取県教育委員会
松井　潔 1997 「東の土器、南の土器－山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態－」『古代吉備』第19集
牧本哲雄 1999 「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団
足立克己・丹羽野裕編 1984 『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会

遺構名新旧対照表

新	旧
SI39	SI40
SS8	SS1
SS9	SI38
SS10	SI39
SS11	土器集中部7
	SK138
SK138	SK139
SK139	SK140
SK140	SK141

編年対応表

本書での表記				清水1992	辻1999	濵田2002	松井1997	牧本1999
弥生時代	中期	後葉	Ⅳ－1期	Ⅳ－1	Ⅳ－1a	Ⅳ－1期	Ⅲ期	
			Ⅳ－2期	Ⅳ－2	Ⅳ－1b	Ⅳ－2期	Ⅳ期	
			Ⅳ－3期	Ⅳ－3	Ⅳ－2	Ⅳ－3期		
	後期	前葉	Ⅴ－1期	Ⅴ－1		Ⅴ－1期	Ⅴ期	
		中葉	Ⅴ－2期	Ⅴ－2			Ⅵ期	
古墳時代	前期	中葉						天神Ⅲ期
	中期	前葉						天神Ⅴ期
		中葉						天神Ⅵ期

目　次

巻頭図版
序
序文
例言
凡例
目次

第１章　調査の経緯

第1節　調査に至る経緯 …… 1
第2節　調査の経過と方法 …… 2
（1）調査区の名称と調査方法…… 2
（2）調査の経過…… 3
第3節　調査体制 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境 …… 5
第2節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の成果

第1節　遺跡の立地と層序 …… 9
第2節　弥生時代の遺構・遺物 …… 15
（1）概　要 …… 15
（2）竪穴住居跡…… 15
（3）段状遺構…… 55
（4）方形土坑…… 61
（5）土　坑 …… 75
（6）墳丘墓・SK116の概要 …… 86
第3節　古墳時代の遺構・遺物 …… 89
（1）概　要 …… 89
（2）竪穴住居跡…… 89
第4節　奈良時代の遺構・遺物 …… 103
（1）概　要 …… 103
（2）竪穴住居跡…… 103
（3）鍛冶関連遺構…… 106
第5節　時期不明の遺構 …… 111
（1）土　坑…… 111
（2）溝 …… 126
（3）ピット…… 126
（4）耕作痕 …… 127
第6節　遺構外出土遺物 …… 128

第４章　自然科学分析の成果

第1節　梅田萱峯遺跡出土炭化材の樹種同定 …… 144

第５章　総　括

第1節　梅田萱峯遺跡の集落構造と変遷　146
第2節　梅田萱峯遺跡の弥生時代中期後葉の集落像と構造変化…… 149
第3節　方形土坑の性格と位置づけ …… 152

巻末図版
抄録

挿図目次

第1図　東伯中山道路関係遺跡位置図 …… 1
第2図　調査地位置図 …… 2
第3図　遺跡位置図 …… 5
第4図　周辺遺跡分布図 …… 7
第5図　基本土層模式図 ……10
第6図　谷土層図 ……11
第7図　4区調査前地形測量図……12
第8図　4区調査後地形測量図……13
第9図　5区地形測量図……14
第10図　SI14・SS6 ……16
第11図　SI14・SS6出土遺物 ……16
第12図　SI15および出土遺物……17
第13図　SI17……19
第14図　SI17出土遺物(1) ……20
第15図　SI17出土遺物(2) ……21
第16図　SI18……22
第17図　SI18出土遺物……23
第18図　SI20および出土遺物……24
第19図　SI21・27……26
第20図　SI21・27出土遺物……27
第21図　SI22……29
第22図　SI22出土遺物……30
第23図　SI23出土遺物……30
第24図　SI23……31
第25図　SI25……33
第26図　SI25出土遺物……34
第27図　SI26(1) ……35
第28図　SI26(2) ……36
第29図　SI26出土遺物……37
第30図　SI28(1) ……38
第31図　SI28(2) ……39
第32図　SI28出土遺物……40
第33図　SI31……42
第34図　SI31出土遺物……43
第35図　SI33……44
第36図　SI35(1) ……45
第37図　SI35(2) ……46
第38図　SI35出土遺物……47
第39図　SI36……48
第40図　SI36出土遺物(1) ……49
第41図　SI36出土遺物(2) ……49
第42図　SI37……51・52
第43図　SI37出土遺物……53
第44図　SI38および出土遺物……54
第45図　SS5および出土遺物 ……56
第46図　SS7 ……56
第47図　SS7出土遺物 ……57
第48図　SS8および出土遺物 ……57
第49図　SS9 ……58
第50図　SS11 ……58
第51図　SS11出土遺物 ……59
第52図　SS10および出土遺物 ……60
第53図　SK80 ……61
第54図　SK80出土遺物 ……62
第55図　SK82・92 ……63
第56図　SK92出土遺物 ……63
第57図　SK91および出土遺物 ……64
第58図　SK93 ……65
第59図　SK93出土遺物 ……65
第60図　SK99および出土遺物 ……66
第61図　SK100……67
第62図　SK100出土遺物……68
第63図　SK105および出土遺物……70
第64図　SK121……71
第65図　SK121出土遺物……72
第66図　SK122および出土遺物……72
第67図　SK123および出土遺物……73
第68図　SK127および出土遺物……74
第69図　SK74および出土遺物 ……76
第70図　SK76および出土遺物 ……77
第71図　SK77および出土遺物 ……77
第72図　SK94および出土遺物 ……78
第73図　SK95および出土遺物 ……78
第74図　SK101・102および出土遺物 ……79
第75図　SK104および出土遺物……80
第76図　SK115および出土遺物……80
第77図　SK106および出土遺物……81
第78図　SK118および出土遺物……82
第79図　SK119および出土遺物……82
第80図　SK126および出土遺物……83
第81図　SK137……84
第82図　SK137出土遺物……85
第83図　墳丘墓・SK116平面図……87
第84図　墳丘墓・SK116出土遺物……88
第85図　SI16(1) ……90
第86図　SI16(2) ……91・92
第87図　SI16出土遺物(1) ……93
第88図　SI16出土遺物(2) ……94
第89図　SI19出土遺物(1) ……95
第90図　SI19および出土遺物(2) ……96
第91図　SI19出土遺物(3) ……97
第92図　SI24・29……99
第93図　SI24出土遺物…… 100
第94図　SI39および出土遺物…… 101
第95図　SI34および出土遺物…… 102
第96図　SI30および出土遺物…… 103
第97図　SI32および出土遺物…… 104
第98図　SK107出土遺物…… 105
第99図　SB3(1) …… 107
第100図　SB3(2) …… 108
第101図　SB3(3) …… 108
第102図　SB4 …… 109
第103図　SK107 …… 110
第104図　鍛冶関連遺構出土遺物 …… 110
第105図　SK75・141 …… 111
第106図　SK79…… 111
第107図　SK78…… 112
第108図　SK81…… 112

第109図　SK83 …… 113
第110図　SK84 …… 113
第111図　SK85 …… 113
第112図　SK86 …… 114
第113図　SK87 …… 114
第114図　SK89 …… 114
第115図　SK88 …… 114
第116図　SK90 …… 115
第117図　SK96 …… 115
第118図　SK97 …… 116
第119図　SK98 …… 116
第120図　SK103 …… 117
第121図　SK108 …… 117
第122図　SK109 …… 117
第123図　SK110 …… 118
第124図　SK111 …… 118
第125図　SK112 …… 119
第126図　SK113 …… 119
第127図　SK114 …… 119
第128図　SK117 …… 119
第129図　SK120 …… 120
第130図　SK124 …… 120
第131図　SK125 …… 121
第132図　SK128 …… 121
第133図　SK129 …… 121
第134図　SK130 …… 122
第135図　SK131 …… 122
第136図　SK132 …… 122
第137図　SK133 …… 122
第138図　SK135 …… 123
第139図　SK136 …… 123
第140図　SK134 …… 123
第141図　SK138 …… 123
第142図　SK139 …… 124
第143図　SK140 …… 124
第144図　SD1 …… 125
第145図　SD2・3・4 …… 126
第146図　耕作痕 …… 127
第147図　遺構外出土遺物(1) …… 129
第148図　遺構外出土遺物(2) …… 130
第149図　梅田萱峯遺跡遺構変遷図(1) …… 147
第150図　梅田萱峯遺跡遺構変遷図(2) …… 148
第151図　竪穴住居の床面積と主柱穴 …… 150
第152図　竪穴住居の平面形態 …… 151
第153図　方形土坑分類模式図 …… 152
第154図　炭化材が出土した方形土坑 …… 153
第155図　弥生集落における方形土坑の配置(1) …… 155
第156図　弥生集落における方形土坑の配置(2) …… 156

挿表目次

表1　土器観察表(1) …… 131
表2　土器観察表(2) …… 132
表3　土器観察表(3) …… 133
表4　土器観察表(4) …… 134
表5　土器観察表(5) …… 135
表6　土器観察表(6) …… 136
表7　土器観察表(7) …… 137
表8　土器観察表(8) …… 138
表9　土器観察表(9) …… 139
表10　土製品観察表 …… 140
表11　玉関連遺物観察表 …… 140
表12　石器観察表(1) …… 141
表13　石器観察表(2) …… 142
表14　鉄器観察表 …… 142
表15　SI・SB主柱穴一覧表 …… 143
表16　ピット一覧表 …… 143
表17　炭化材試料とその樹種 …… 144
表18　梅田萱峯遺跡の方形土坑一覧表 …… 153

文中写真目次

写真1　現地説明会風景 …… 3
写真2　重機表土剥ぎ作業 …… 4
写真3　作業風景 …… 4
写真4　SK126遺物出土状況(西から) …… 83
写真5　SK137半裁状況(南から) …… 85
写真6　出土炭化材の走査型顕微鏡写真 …… 145

図版目次

巻頭図版1　1　調査区遠景（調査前・南西から）
　　2　調査区遠景（調査後・南から）
巻頭図版2　1　調査区完掘状況
巻頭図版3　1　墳丘墓調査状況（南から）
巻頭図版4　1　SK99・100・121・122遺物出土状況（西から）
　　2　SI16完掘状況（北東から）

巻末図版
PL.1　1　調査後完掘状況（南から）
　　2　調査後完掘状況（北東から）
PL.2　1　SI14・SS6完掘状況（北東から）
　　2　SI14遺物出土状況（北東から）
　　3　SI15遺物出土状況（南から）
　　4　SI15完掘状況（北から）
PL.3　1　SI17完掘状況（東から）
　　2　SI17遺物出土状況（北から）
　　3　SI17土層断面（北東から）
　　4　SI17炭化材出土状況（南東から）
PL.4　1　SI18完掘状況（南西から）
　　2　SI18ガラス勾玉出土状況
　　3　SI20土器29・31出土状況（北西から）
　　4　SI20完掘状況（東から）
PL.5　1　SI21・27完掘状況（南から）
　　2　SI21上層遺物出土状況（南から）
　　3　SI21中央ピット上炭化物出土状況（西から）
　　4　SI27土層断面北側（西から）
PL.6　1　SI22完掘状況（東から）
　　2　SI22上層遺物出土状況（南東から）
　　3　SI22中央ピット炭化物出土状況（東から）
　　4　SI23遺物出土状況（北から）
　　5　SI25遺物出土状況（北西から）
PL.7　1　SI23完掘状況（北から）
　　2　SI25完掘状況（東から）
PL.8　1　SI26・38完掘状況（西から）
　　2　SI26遺物出土状況（西から）
　　3　SI26中央ピット遺物出土状況（西から）
　　4　SI26土器60出土状況（北から）
PL.9　1　SI25・28完掘状況（北から）
　　2　SI28遺物出土状況（北から）
PL.10　1　SI31完掘状況（北から）
　　2　SI31遺物出土状況（南東から）
　　3　SI31-P5土層断面（北から）
　　4　SI35完掘状況（東から）
PL.11　1　SI37完掘状況（東から）
　　2　SI37遺物出土状況（東から）
　　3　SI37-P26遺物出土状況（南西から）
　　4　SI37土層断面（南東から）
　　5　SI37西壁隅遺物出土状況（北東から）
PL.12　1　SI33完掘状況（北東から）
　　2　SI36遺物出土状況（北から）
　　3　SI36土層断面（南西から）
PL.13　1　SS5完掘状況（西から）
　　2　SS7完掘状況（北から）
　　3　SS8遺物出土状況（南から）
PL.14　1　SS9完掘状況（西から）
　　2　SS10完掘状況（東から）
　　3　SS11遺物出土状況（北西から）
PL.15　1　SK80完掘状況（東から）
　　2　SK82・92完掘状況（東から）
　　3　SK91完掘状況（北から）
PL.16　1　SK93完掘状況（北から）
　　2　SK99完掘状況（南東から）
　　3　SK100遺物出土状況（南東から）
　　4　SK100炭化材出土状況（東から）
PL.17　1　SK100完掘状況（南東から）
　　2　SK105遺物出土状況（北から）
　　3　SK105完掘状況（北から）
PL.18　1　SK121遺物出土状況（西から）
　　2　SK121完掘状況（西から）
　　3　SK122完掘状況（西から）
PL.19　1　SK123完掘状況（西から）
　　2　SK127完掘状況（北西から）
　　3　SK74遺物出土状況（西から）
　　4　SK74完掘状況（西から）
PL.20　1　SK76完掘状況（南から）
　　2　SK77完掘状況（南西から）
　　3　SK94完掘状況（南東から）
　　4　SK95完掘状況（南東から）
　　5　SK101・102完掘状況（南東から）
　　6　SK102遺物出土状況（南東から）
PL.21　1　SK104遺物出土状況（東から）
　　2　SK104完掘状況（北から）
　　3　SK106完掘状況（西から）
　　4　SK115完掘状況（南から）
　　5　SK118完掘状況（南から）
　　6　SK119完掘状況（北東から）
PL.22　1　SK126東・南壁土層断面（南東から）

2　SK126完掘状況（北西から）
3　SK137遺物出土状況（南から）
4　SK137完掘状況（東から）
PL.23 1　墳丘墓表土除去状況（北から）
2　墳丘墓貼石検出状況（南から）
PL.24 1　墳丘墓主体部調査状況（西から）
2　墳丘墓墳頂部西壁南半土層断面（東から）
3　墳丘墓P2土層断面（西から）
PL.25 1　墳丘墓西辺張り出し部検出状況（西から）
2　SK116遺物出土状況（北から）
3　SK116調査状況（北から）
PL.26 1　SI16検出状況（北東から）
2　SI16南北土層断面（東から）
PL.27 1　SI16遺物出土状況（北東から）
2　SI16南壁際遺物出土状況（北から）
3　SI16勾玉出土状況
4　SI16-P5土層断面（南西から）
5　SI16周堤土層断面（北東から）
PL.28 1　SI19完掘状況（東から）
2　SI19遺物出土状況（東から）
3　SI19土器198出土状況（南から）
4　SI19焼土検出状況（北から）
PL.29 1　SI24・29完掘状況（北から）
2　SI24・29西側土層断面（北から）
3　SI24遺物出土状況（南東から）
PL.30 1　SI34完掘状況（東から）
2　SI34土層断面（南西から）
3　SI34遺物出土状況（東から）
4　SI34-P4遺物出土状況（西から）
PL.31 1　SI39完掘状況（北から）
2　SI39焼土検出状況（北西から）
3　SI30完掘状況（北から）
PL.32 1　SI32完掘状況（貼床除去前）（北から）
2　SK107完掘状況（北東から）
3　SK107遺物出土状況（東から）
4　SK107炭化材出土状況（東から）
PL.33 1　SB3完掘状況（北から）
2　SK75炭化物出土状況（東から）
3　鍛冶炉1　2層検出状況（西から）
4　鍛冶炉1炉底部断面（西から）
5　鍛冶炉2　5層検出状況（東から）
6　鍛冶炉2炉底部断面（北東から）
PL.34 1　SK78完掘状況（東から）
2　SK79完掘状況（東から）
3　SK81完掘状況（北から）
4　SK83完掘状況（南西から）
5　SK84完掘状況（南から）
6　SK85完掘状況（南西から）
PL.35 1　SK86完掘状況（南東から）
2　SK87完掘状況（西から）
3　SK88完掘状況（南から）
4　SK89完掘状況（北から）
5　SK90完掘状況（東から）
6　SK96完掘状況（南から）
PL.36 1　SK97完掘状況（南から）
2　SK98完掘状況（東から）
3　SK103完掘状況（北から）
4　SK108完掘状況（南西から）
5　SK109完掘状況（北から）
6　SK110完掘状況（西から）
PL.37 1　SK111完掘状況（南から）
2　SK112完掘状況（西から）
3　SK113完掘状況（南東から）
4　SK114完掘状況（南から）
5　SK117完掘状況（北東から）
6　SK120完掘状況（西から）
PL.38 1　SK124完掘状況（東から）
2　SK125完掘状況（北から）
3　SK128完掘状況（北東から）
4　SK129完掘状況（北から）
5　SK130完掘状況（南から）
6　SK131完掘状況（北から）
PL.39 1　SK132完掘状況（北西から）
2　SK133完掘状況（北西から）
3　SK134完掘状況（北東から）
4　SK135完掘状況（北西から）
5　SK136完掘状況（南東から）
6　SK138完掘状況（西から）
PL.40 1　SK139完掘状況（東から）
2　SK140完掘状況（北から）
3　谷部土層断面（南から）
4　谷部土層断面（南から）
PL.41 1　SI14・15・17・SS6出土土器
PL.42 1　SI18・20・21・27出土土器
PL.43 1　SI18出土土器
2　SI20出土土器
3　SI20出土土器
4　SI20出土土器
5　SI25出土土器
6　SI25出土土器
PL.44 1　SI26・28・31出土土器
PL.45 1　SI35・36・37出土土器
PL.46 1　SI22・23・25出土土器
PL.47 1　SI26出土土器
2　SI26出土土器
3　SI37出土土器

4　SI37出土土器
5　SS11出土土器
6　SS11出土土器
PL.48 1　SK80・95・99・100出土土器
PL.49 1　SK121・122・123・126出土土器
PL.50 1　SK74出土土器
2　SK93出土土器
3　SK100出土土器
4　SK100出土土器
5　SK100出土土器
6　SK100出土土器
PL.51 1　SK101・104・105・106・115・118出土土器
PL.52 1　SK105出土土器
2　SK121出土絵画土器
3　SK105出土土器
4　同上絵画土器拡大
5　SK127出土土器
PL.53 1　SS5・7・8・10・11、SK74・76・77・92・93・94出土土器
PL.54 1　SK127出土土器
2　SK137出土土器
3　SK137出土土器
4　SK119出土土器
5　SK137出土土器
6　SK137出土土器
PL.55 1　墳丘墓出土絵画土器
2　同上左下部拡大
PL.56 1　SI16出土土器
2　SI16出土土器
3　SI16出土土器
4　SI16出土土器
5　SI16出土土器
6　SI16出土土器
PL.57 1　SI16出土土器
2　SI16出土土器
3　SI16出土土器
4　SI16出土土器
5　SI16出土土器
6　SI19出土土器
PL.58 1　SI16・19出土土器
PL.59 1　SI19出土土器
2　SI19出土土器
3　SI24出土土器
4　SI24出土土器
5　SI24出土土器
6　SI24出土土器
PL.60 1　SI24出土土器
2　SI24出土土器
3　SI24出土土器
4　SI34出土土器
5　SI34出土土器
6　SI39出土土器
PL.61 1　SI24・34・39出土土器
2　SI30・32、SB3、SK107出土土器
PL.62 1　SK107出土土器
2　遺構外出土土器
3　遺構外出土土器
4　遺構外出土土器
5　遺構外出土土器
PL.63 1　分銅形土製品(表)
2　分銅形土製品(裏)
PL.64 1　土製勾玉・紡錘車・土玉・土錘
2　敲石
PL.65 1　石錘
2　台石
3　台石
4　台石
PL.66 1　砥石
2　玉関連遺物
PL.67 1　石剣
2　石庖丁
3　不明石製品
4　赤色顔料素材
5　磨製石斧
PL.68 1　玉製品
2　ガラス小玉
3　砥石
4　剥片
5　ナイフ形石器
6　ナイフ形石器
PL.69 1　羽口・鉄滓
2　鉄滓付着礫
PL.70 1　鉄器
2　鉄器X線写真

第1章　調査の経緯

第1節　調査に至る経緯

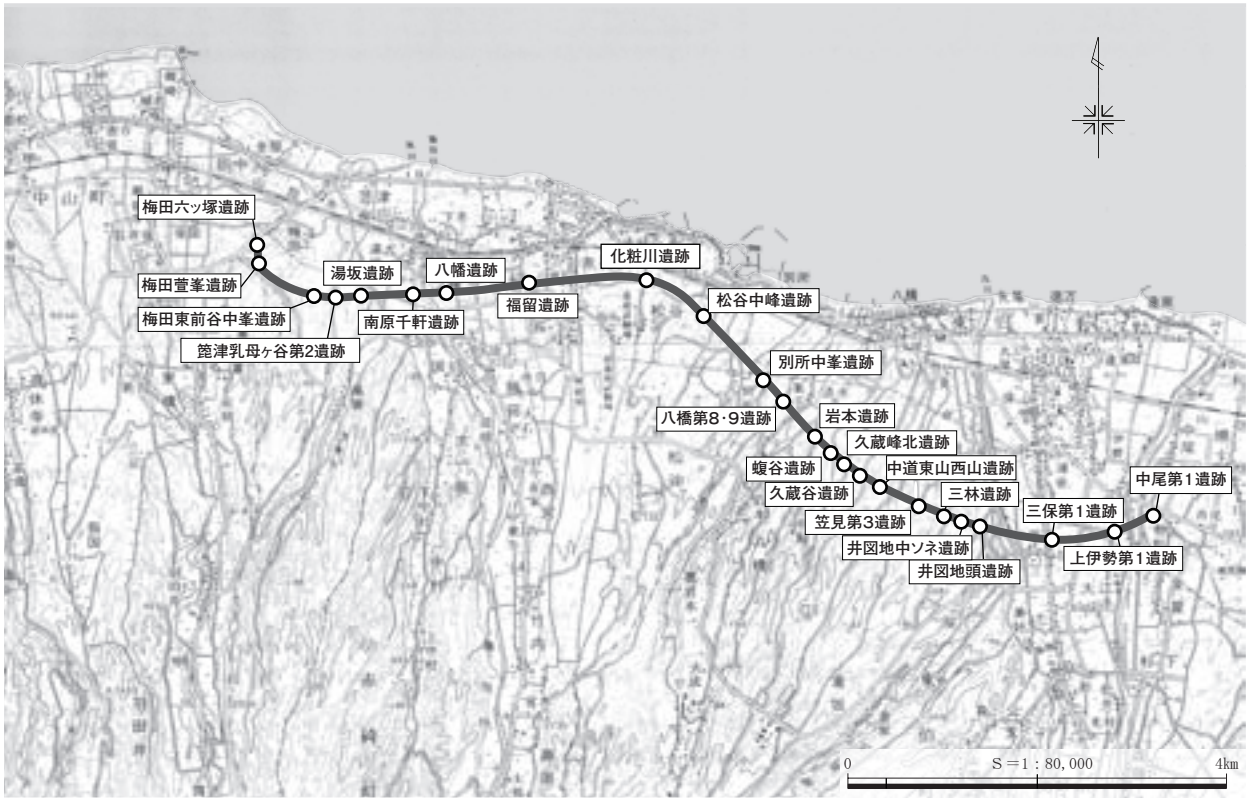
本調査は、平成19年度に一般国道９号東伯中山道路の改築に伴い行った、東伯郡琴浦町梅田地内の工事予定地に所在する、周知の埋蔵文化財包蔵地である梅田萱峯遺跡（４区、５区）の発掘調査である。

山陰地方では、国道９号線の交通混雑緩和、荒天時の交通障害解消、災害時の緊急輸送の代替道路確保及び将来の国土幹線道路整備として、山陰自動車道の整備事業が進められている。鳥取県中部地域では、青谷羽合道路、北条道路、東伯中山道路が自動車専用道路として計画、施工され、一部共用開始されている。

このうち琴浦町を通る東伯中山道路の計画地内及び隣接地には、周知の遺跡が多数あり、建設に先立って計画地内の遺跡並びに遺跡の範囲を確認する必要性が生じた。このため、平成２年度から東伯町、赤碕町各教育委員会（いずれも当時）及び琴浦町教育委員会によって、国庫補助事業として逐次試掘・確認調査が行われた。

その結果を受け、文化財保護法に基づく手続きを踏まえ、平成14年度から平成16年度にかけて、財団法人鳥取県教育文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり、中尾第1遺跡など20遺跡の発掘調査を行い、各報告書を刊行した。平成17年度からは、鳥取県埋蔵文化財センターが国土交通省倉吉河川国道事務所の委託を受けて調査主体となり、梅田萱峯遺跡など４ヶ所の発掘調査を行い、それぞれ報告書を刊行した。

梅田萱峯遺跡は、旧赤碕町教育委員会が平成13・15年度に国庫補助事業として試掘調査を行い、遺



第１図　東伯中山道路関係遺跡位置図

構及び遺物を確認した遺跡である。その結果を受け、平成17年度では１区、３区、平成18年度では１区の残りと２区の調査を行い、平成18年度に２冊、平成19年12月に１冊の報告書を刊行した。

平成19年度調査は、本線及びインターチェンジ接続部分が対象となり、国土交通省倉吉河川国道事務所は、文化財保護法第94条に基づく埋蔵文化財発掘の通知を行った。それを受け、鳥取県教育委員会事務局教育長の指示により、鳥取県埋蔵文化財センターが発掘調査を担当着手し、文化財保護法第99条に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を行った。（牧本）

参考文献

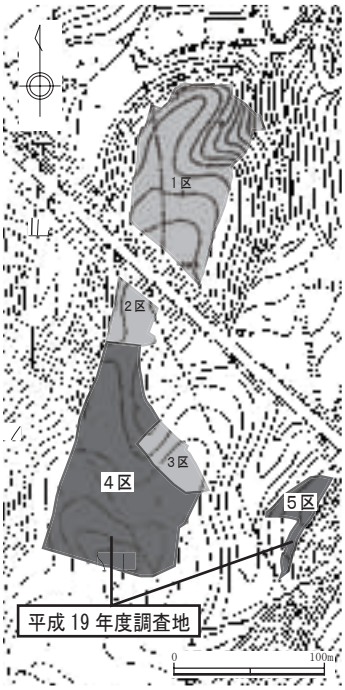
小泉傑・石賀太編 2002『赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅷ』赤碕町教育委員会
小泉傑・石賀太編 2004『赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅸ』赤碕町教育委員会
高尾浩司・淺田康行編 2007『梅田萱峯遺跡１』鳥取県埋蔵文化財センター
湯村功・小口英一郎他編 2007『梅田萱峯遺跡Ⅱ』鳥取県埋蔵文化財センター
小口英一郎・濵本利幸編 2007『梅田萱峯遺跡Ⅲ』鳥取県埋蔵文化財センター

第2節　調査の経過と方法

(1)調査区の名称と調査方法

梅田萱峯遺跡は、琴浦町と大山町にまたがり、大山山系から手指状に伸びた標高約65mの丘陵上に立地する。平成19年度梅田萱峯遺跡の調査地は、平成17・18年度の調査区の南側に当たり、標高約65mの丘陵及び谷部の本線及びインターチェンジ部分を４区、谷を挟んで標高約60mの東側尾根上の本線部分を５区として調査に取り掛かった(第２図参照)。

この地区の基準点及び方眼測量については、世界測地系公共座標第Ⅴ系に載るように前年度までの調査に習い、調査区内に10m方眼の基準杭を設定し、グリッドを設けた。グリッド名は、東西南北軸交点の北東側杭名の名称である。座標は、４区は、H20杭(X:－54150、Y:－66490)、F34杭(X:－54290、Y:－66470)、５区は、AE28杭(X:－54230、Y:－66370)、AC33杭(X:－54280、Y:－66390)などとなった。標高値は、３級基準点H10－3－16の53.578mを使用した。表土は、４区は重機によって除去し、５区は人力によって除去した。遺構及び遺物包含層などの掘り下げは人力で行い、排土はベルトコンベアーを用いて、４区と５区の間の谷部に集積した。いずれの地区も、検出した遺構・遺物の記録には、光波トランシット及び自動レベルを用い、簡易遣り方測量及び光波トランシットによる座標測量を行った。現地での写真撮影は35㎜判、ブローニー(6×7)判カメラにより地上又は写真用足場上から行った。また、調査前状況及び遺跡完掘状況写真については、ラジコンヘリコプターからの空中写真撮影(ブローニー判カメラ使用)も併せて行った。遺物写真撮影は、35㎜判、ブローニー(6×7)判及び4×5判カメラを用いた。いずれも白黒ネガフィルム並びにカラーポジフィルムを使用するとともに、デジタルカメラも適宜使用した。（牧本）



第２図　調査地位置図

(2)調査の経過

梅田萱峯遺跡の調査は、４月５日に調査前航空写真撮影、４月６日から調査前地形測量を業者委託し、４区では４月13日から24日にかけて重機による表土剥ぎ作業を行い、終了後方眼杭の打設を行った。発掘作業員の稼動は、４月20日にオリエンテーション及び検出作業を行い、10月17日まで人力による遺構検出・掘り下げ作業を行った。10月１日からは４区、５区併せての調査後地形測量、10月５日には調査後空撮を業者委託した。その後、遺構実測を行い、10月19日に現地でのすべての作業を終了した。その結果、落とし穴21、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡19、段状遺構7、土坑26、墳丘墓(梅田萱峯墳丘墓)1、古墳時代前期から中期の竪穴住居跡5、奈良時代の竪穴住居跡2、鍛冶関連遺構等、多数の遺構を検出した。

５区の調査は、方眼杭の打設後、４区と併行して４月20日から人力による表土剥ぎを行いながら検出作業を行い、５月16日にすべての調査を終了した。その結果、遺構密度は低く、弥生時代と考えられる段状遺構1、土坑1のみを検出したに留まった。

調査面積は、各地区遺構面１面の４区8,350㎡、５区1,200㎡、計9,550㎡となった。

このうち、４区東側尾根上で墳丘墓１基を検出するに至った。この墳丘墓は、弥生時代中期後葉の築造と考えられ、県内では最古級の墳丘墓であることが判明した他、墓壙を取り囲むように４基の柱穴を検出することができ、墓上祭祀施設の可能性が高まり、国土交通省、県教育委員会文化課との間で保存協議が進められた。９月12・25日には、島根大学教授渡邊貞幸氏に墳丘墓にかかる現地指導を受けたほか、９月20日には、墳丘墓貼石石材同定を現地において鳥取大学名誉教授赤木三郎氏に御指導いただいた。９月26日には鳥取県文化財保護審議会史跡・埋蔵文化財部会の現地調査が行われた。

このような重要な遺構が検出されたことから、調査終盤の10月８日に、一般の方々を対象に現地説明会を開催した。小雨が降るあいにくの天候ながらも178名の方々に参加いただいた。

現地調査終了後、直ちに報告書作成作業に移り、平成20年３月に報告書を刊行した。　　(牧本)

写真1　現地説明会風景

第3節　調査体制

下記の体制で発掘調査、報告書作成を行った。

鳥取県埋蔵文化財センター

所　　長　　久保　穣二朗

（庶務担当）

次　　長　　田村　隆志（兼総務係長）
総　務　係
副　主　幹　　福田　高之

（調査担当）

発掘事業室

室　　長　　加藤　隆昭（兼調整係長）
調　整　係
文化財主事　　濵　　隆造

琴浦調査事務所

副　主　幹　　牧本　哲雄、湯村　功
文化財主事　　恩田　智則、小山　浩和、大川　泰広、長尾　かおり
発掘調査員　　岩垣　命

調査日誌（抄）

４月５日　調査前空撮
４月６日　調査前地形測量開始
４月13日　重機による表土剥ぎ作業開始
４月20日　発掘作業員オリエンテーション
　　検出作業開始
５月16日　５区完掘写真・図面作成
５月22日　４区東尾根で墳丘墓検出
６月４日　竪穴住居、土坑掘り下げ
７月27日　SI18掘り下げ。ガラス勾玉出土
８月３日　台風接近のため作業中止
９月３日　谷部のトレンチ掘り下げ
９月５日　墳丘墓頂部にトレンチ設定・掘り下げ
９月12日　島根大学教授渡邊氏による、墳丘墓現地指導
９月20日　鳥取大学名誉教授赤木氏による、墳丘墓使用
　　石材現地鑑定
９月25日　島根大学教授渡邊氏による、墳丘墓現地指導
９月26日　鳥取県文化財保護審議会委員による現地調査
10月２日　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター肥後
　　氏による墳丘墓現地指導
10月５日　調査後空撮。現地説明会記者発表
10月８日　現地説明会開催。178名の参加
10月17日　現地での掘り下げ作業終了。
　　墳丘墓保護終了
10月19日　遺構実測終了。現地作業終了

写真2　重機表土剥ぎ作業

写真3　作業風景

第2章　遺跡の位置と環境

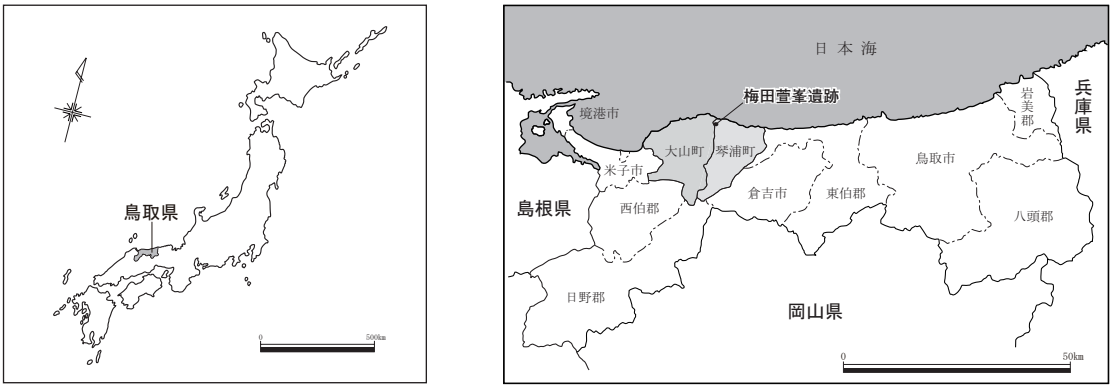
第1節　地理的環境

梅田萱峯遺跡が所在する琴浦町は、鳥取県中部地域の西端に位置し、平成16年９月１日に旧東伯町と旧赤碕町が合併して誕生した。県庁所在地の鳥取市からは西に約60㎞、県西部の商都米子市からは東に約35㎞離れている。町域は大山山麓から北に向かって広がる三角形状で、東は北栄町、倉吉市と、西は大山町、南は江府町と接し、北は日本海に面する。東西15.2㎞、南北18.5㎞、総面積は139.88㎢を測る。平成19年11月末時点の人口は、19,926人である。

地勢は、大山山麓から派生する急峻な丘陵地が北に向かうほど緩やかとなり、町内を南北に流れる加勢蛇川、洗川、勝田川などの流域に平野部が広がる。海岸線は単調であるが、良好な漁場となっている。

町の産業は日本海沿岸部と山間部、その中間部にそれぞれ特徴がある。日本海沿岸部は国道９号線沿いを中心に、地酒、地ビール、和牛といった酒造や食品製造などの商工業が盛んである。また海岸部は赤碕港を中心とした沿岸漁業が有名である。中間部は県下有数の生産、販売高を誇る農業が盛んで、二十世紀梨は海外へも輸出されている。山間部は大山滝や南北朝期の動乱を描いた『太平記』の舞台となった船上山、国指定天然記念物の伯耆の大シイなどの風光明媚な自然に囲まれ、多くの観光客が訪れている。

梅田萱峯遺跡は町の北西部、旧赤碕町域に位置する。大山北麓から派生する、標高50～60ｍの丘陵先端付近に立地する。日本海までは直線距離で約1㎞である。　（牧本）



第３図　遺跡位置図

第2節　歴史的環境

ここでは琴浦町内を中心とした遺跡の概要を述べる。

旧石器・縄文時代　鳥取県下の旧石器資料は15遺跡で確認されており、位置づけがはっきりしない尖頭器類を含めても40遺跡を数えるに過ぎない。町内では三林遺跡(6)と梅田萱峯遺跡(22)でナイフ形石器の可能性がある資料が、笠見第3遺跡(7)で細石核の可能性がある資料が、共に本来の位置を遊離した状態で出土している。また水溜、松谷の両地点で槍先形尖頭器が採集されており、住吉第2遺跡(99)では有舌尖頭器が出土している。

縄文時代については、集落像を明らかにしうる調査例は少ない。早期のものとしては、赤坂後ロ山遺跡(93)、退休寺飛渡り遺跡(101)、上伊勢第1遺跡(2)で押型文土器が検出されている。前・中期では、松ヶ丘遺跡(66)、森藤第1・2遺跡(37)、井図地中ソネ遺跡(5)、井図地頭遺跡(4)などで土器が出土している。後期段階では森藤第2遺跡と南原千軒遺跡(19)で竪穴住居跡が検出されている。森藤第2遺跡では、住居内から土器のほか土器片錘、打ち欠き石錘、土偶が出土している。南原千軒遺跡では遺構外から土偶が出土しており、今朝平タイプの可能性が考えられ、同タイプの日本海側における分布の西限例となりうる。このほか後期から晩期の遺跡として、田中川上遺跡(79)、御崎第2遺跡(80)、住吉第2遺跡(99)がある。

弥生時代　当地域の弥生開始期の様相は明らかではない。前期から中期前半については、近年の低地部の調査でこの時期の集落の一端が見え始めている。上伊勢第1遺跡では前期の竪穴住居跡が３棟確認され、中尾第1遺跡(1)と三保第1遺跡(3)では同時期の配石墓や土壙墓などの墓域が調査されている。これらの遺跡は加勢蛇川を挟んだ沖積平野の微高地上に近接して存在する。南原千軒遺跡は勝田川沿いの扇状地上に位置し、中期初頭の土器が大量に出土している。また中尾第1遺跡は中期中葉の集落でもある。

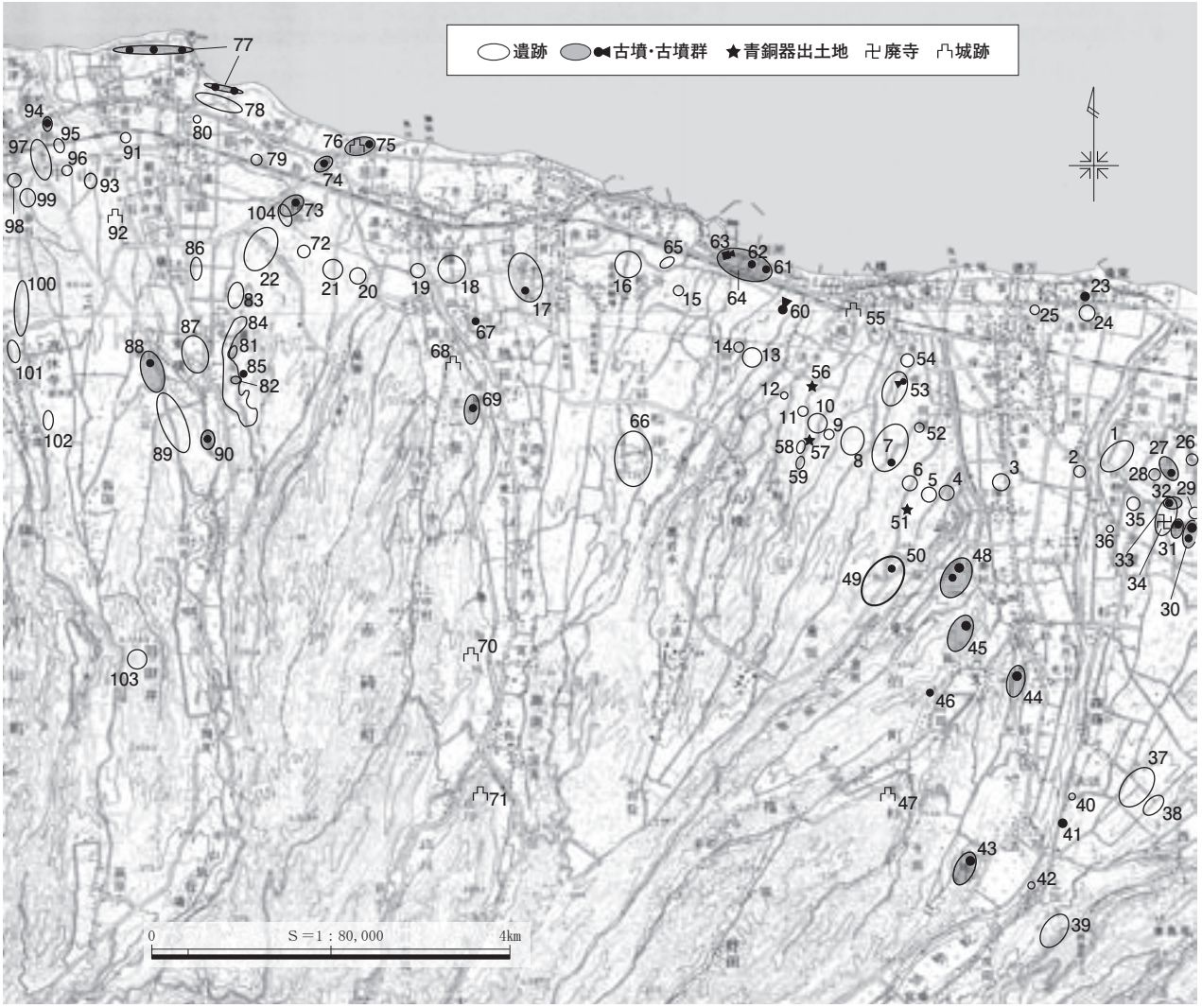
中期後半から古墳時代初頭にかけては、丘陵上を舞台として集落が大きく展開する。森藤第1遺跡、水溜り・駕籠据場遺跡、大峰遺跡(38)、井図地中ソネ遺跡、三保遺跡(49)、笠見第3遺跡、三林遺跡、中道東山西山遺跡(8)、久蔵峰北遺跡(10)、福留遺跡(17)、箆津乳母ヶ谷第2遺跡(21)、梅田萱峯遺跡、梅田東前谷中峯遺跡(72)などがあげられる。多数の住居跡が調査された例から見ると、後期半ばから後半にかけて住居等が激増する様子が窺える。

各種生産に関しては、玉作遺跡の調査例が増えている。南原千軒遺跡では中期初頭から後期までの土器を含む溝から施溝分割技法による管玉素材が多数出土している。また軟質な石材を用いて板状素材から施溝分割する「西川津技法」と同様なものがある点も注目される。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡では後期の玉作工房が検出されている。笠見第3遺跡では後期前半に属する管玉素材のなかに島根県花仙山産の緑色凝灰岩が使用されていることが判明したほか、管玉の穿孔に鉄針が用いられていた例もあった。笠見第3遺跡、久蔵峰北遺跡ともに後期段階では施溝分割は行わず、打撃分割によっている。笠見第3遺跡では赤色顔料が付着した石杵、石皿が多数出土している。

墳墓では墓ノ上遺跡(65)、別所女夫岩峯遺跡(61)で中期の木棺墓が見つかっている。湯坂遺跡(20)では後期の小型の墳丘墓を増築した例があり、山陰地方では珍しい鉄石英製の管玉が副葬されていた。井図地中ソネ遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭の区画溝を伴う土壙墓群が検出されている。また、特筆されるものに梅田萱峯遺跡で、弥生時代中期後葉の貼石を施した長方形の墳丘墓(梅田萱峯墳丘墓)が検出された。現在のところ県内では最古級の弥生墳丘墓で、墳頂部には主体部を取り囲む墓上祭祀施設が認められた。

町内では銅鐸、銅矛、銅剣が出土している。八橋(56)では扁平鈕Ⅰ式銅鐸のほか、同一丘陵の久蔵峰(57)で銅矛も見つかっている。田越(51)では円墳の箱式石棺下30㎝の位置から中細形銅剣が4本出土した。

古墳時代　町内には4基の前方後円・後方墳がある。別所1号墳(笠取塚古墳、53m)(63)、八橋狐塚古墳(町史跡、62m)(60)、大塚古墳(34m)、竜ヶ崎3号墳(21m)(48)である。このうち前期に属すると思われるのは、前方後方墳の別所1号墳である。



1. 中尾第１遺跡　2. 上伊勢第１遺跡　3. 三保第１遺跡　4. 井図地頭遺跡　5. 井図地中ソネ遺跡　6. 三林遺跡　7. 笠見第３遺跡　8. 中道東山西山遺跡　9. 久蔵谷遺跡　10. 久蔵峰北遺跡　11. 蝮谷遺跡　12. 岩本遺跡　13. 八橋第８・９遺跡　14. 別所中峯遺跡　15. 松谷中峰遺跡　16. 化粧川遺跡　17. 福留遺跡　18. 八幡遺跡　19. 南原千軒遺跡　20. 湯坂遺跡　21. 箆津乳母ヶ谷第２遺跡　**22. 梅田萱峯遺跡**　23. 逢東双子塚古墳　24. 逢東遺跡　25. 逢東第２遺跡　26. 槻下豪族館跡　27. 槻下古墳群　28. 下斎尾２号遺跡　29. 大高野遺跡　30. 大高野古墳群　31. 塚本古墳群　32. 斎尾古墳群　33. 下斎尾１号遺跡　34. 斎尾廃寺　35. 伊勢野遺跡　36. 金屋経塚　37. 森藤第１・２遺跡　38. 大峰遺跡　39. 西高尾谷奥遺跡　40. 大法古瓦出土地　41. 大法３号墳　42. 上法万経塚　43. 杉地古墳群　44. 下光好古墳群　45. 公文古墳群　46. 山田１号墳　47. 妙見山城跡　48. 竜ヶ崎古墳群　49. 三保遺跡　50. 三保６号墳　51. 田越銅剣出土地　52. 田越第４遺跡　53. 笠見第２遺跡・笠見１号墳　54. 笠見第１遺跡　55. 八橋城跡　56. 八橋銅鐸出土地　57. 久蔵峰銅矛出土地　58. 八橋第２遺跡　59. 八橋第４遺跡　60. 八橋狐塚古墳　61. 別所女夫岩峯遺跡　62. 別所２号墳　63. 別所１号墳(笠取塚古墳)　64. 別所古墳群　65. 墓ノ上遺跡　66. 松ヶ丘遺跡　67. 出上岩屋古墳　68. 條山城跡　69. 太一垣古墳群　70. 大仏山城跡　71. 山川城跡　72. 梅田東前谷中峯遺跡　73. 梅田（栄田）古墳群　74. 坂ノ上古墳群　75. 箆津古墳群　76. 箆津城跡　77. 御崎古墳群　78. 御崎第１遺跡　79. 田中川上遺跡　80. 御崎第２遺跡　81. 八重第１遺跡　82. 八重第２遺跡　83. 八重第３遺跡　84. 八重第４遺跡　85. 岩屋平ル古墳　86. 樋口第１遺跡　87. 樋口第２遺跡　88. 三谷古墳群　89. 三谷遺跡　90. 束積古墳群　91. 赤坂大五輪塔　92. 岩井垣城跡　93 赤坂後ロ山遺跡　94. 曲松古墳群　95. 林之峯遺跡　96. 下甲抜堤遺跡　97. 小松谷遺跡　98. 住吉第１遺跡　99. 住吉第２遺跡　100. 退休寺遺跡　101. 退休寺飛渡り遺跡　102. 退休寺第１遺跡　103. 羽田井遺跡　104. 梅田六ツ塚遺跡

第４図　周辺遺跡分布図

中期から後期にかけては群集墳が築かれる。大高野古墳群(30)、塚本古墳群(31)、斎尾古墳群(32)、公文古墳群(45)、竜ヶ崎古墳群(48)、別所古墳群(64)、箆津古墳群(75)、坂ノ上古墳群(74)、梅田(栄田)古墳群(73)などである。大高野3号墳では金銅製耳環、青銅製鈴、鉄刀などが副葬されていた。

中期後半の高塚古墳は現在は消滅しているが、朝顔形埴輪、形象埴輪などが出土している。横穴式石室が採用される直前の時期の古墳には、この地域独特の河原石を用いた箱式石棺を主体部にもつ御崎古墳群(77)、別所古墳群、梅田(栄田)古墳群がある。後期以降採用される横穴式石室には、大法3号墳(41)、三保6号墳などのように竪穴系横口式石室と呼ばれる構造をもつものがある。槻下古墳群(27)、大高野古墳群、塚本古墳群、斎尾古墳群など後続する石室形態もその系譜に連なるものであることから、加勢蛇川流域に石室形態を同じくする集団が存在したことを示している。終末期に属すると考えられる切石積石室は、山田1号墳(町史跡)(46)、出上岩屋古墳(県史跡)(67)などに認められる。

集落の様相は不明な部分が多い。三保遺跡、上伊勢第1遺跡、笠見第3遺跡、蝮谷遺跡(11)、三林遺跡、久蔵峰北遺跡、中尾第1遺跡、三保第1遺跡、松谷中峰遺跡(15)、井図地中ソネ遺跡、別所中峯遺跡(14)、八重第3遺跡、住吉第2遺跡など集落遺跡の調査例は多いが、実態は必ずしも明らかではない。そのような中で注目されるのは笠見第3遺跡と八橋第8・9遺跡(13)である。笠見第3遺跡では今のところ県内最古例となる中期末の鍛冶炉が検出された。鉄床石や羽口など鍛冶関連遺物も出土している。八橋第8・9遺跡では6世紀から7世紀代の竪穴住居跡23棟などが調査されたほか、椀形鍛冶滓なども出土しており、報告では出土した土器に基づき、集落動態の解明に取り組んでいる。箆津乳母ヶ谷第2遺跡では丘陵斜面を造成した段状遺構が、古墳時代後期から奈良時代にかけて多数築かれている。そのうち1棟は鍛冶炉を伴っていた。

古代　町内には山陰地方唯一の国特別史跡である斎尾廃寺(34)がある。金堂や塔、講堂跡が残り、これらを取り囲む土塁状の高まりも存在する。伽藍配置は法隆寺式である。斎尾廃寺が位置する加勢蛇川右岸は伯耆国八橋郡の中心地であったと推定され、近くには出土した炭化米を根拠に正倉または郷倉と考えられる総柱礎石建物群がある大高野遺跡(29)や伊勢野遺跡(35)、水溜り・駕籠据場遺跡といった掘立柱建物群や墨書土器を伴う遺跡がある。やや南には墨書土器や金属器写しの須恵器が出土した森藤第1・第2遺跡、大法古瓦出土地(40)がある。このほか、箆津郷に位置する八幡遺跡(18)では掘立柱建物群や赤色塗彩土師器が多数出土している。田中川上遺跡(79)では埋没河川が確認され、その川辺の一部から須恵器や赤色塗彩の土師器が集中して投棄された状態が検出されており、川辺での祭祀行為が想定されている。

墳墓の関係では、笠見第3遺跡と三林遺跡で火葬墓が見つかっている。笠見第3遺跡では土坑を掘り蔵骨器と考えられる土師器坏と火葬骨を木櫃に納めていた。三林遺跡では土坑を掘った中に石槨を設け、その中に土師器を組み合わせた蔵骨器に火葬骨を納めていた。金屋(36)と上法万(42)では経塚が見つかっており、金屋では銅経筒が納められていた。

生産関係では、上伊勢第1遺跡で9世紀から13世紀と考えられる畠跡が見つかり、中道東山西山遺跡では9世紀代に位置づけられる鍛冶炉などの鉄関連遺構や遺物が検出されている。

中世　南原千軒遺跡では平安時代末から鎌倉時代の鍛冶関連遺構や遺物が大量に出土した。鍛冶炉や廃棄土坑のほか鉄滓や鍛造剥片などの微細遺物も豊富で、鉄素材から製品まで生産していたと考えられる。

井図地頭遺跡では平安時代末頃の方形区画溝が検出されている。内部には道路状の硬化面や礎石とおぼしき礫があり、居館跡の可能性がある。槻下豪族館跡(町史跡)(26)は40m四方の主郭のほか、周囲に土塁や壕を巡らせた郭をもつ複郭式と考えられる。鎌倉時代に岩野弾正の居城であったと伝えられるが詳細は不明である。

町南部には標高615mの船上山がそびえる。ここには南北朝期に後醍醐天皇が隠岐から逃れた行宮跡(国史跡)がある。赤碕港から船上山にかけては、鎌倉末期と推定される、宝塔と宝篋印塔の二様式を合わせもつ独特の形態の赤碕塔(県保護文化財)があることでも知られている。

中世城館は町内各地に見られる。南北朝期に西伯耆で勢力をもっていた行松氏が築城し、後に毛利氏が支配し伯耆の経営拠点となった八橋城跡(町史跡)(55)、天正年間の築城と考えられる妙見山城跡(47)、土塁と堀が残る町史跡の箆津城(槇城)跡(76)のほか、條山城跡(68)、大仏山城跡(70)、山川城跡(71)がある。　(牧本)

第3章　調査の成果

第1節　遺跡の立地と層序

梅田萱峯遺跡は大山北麓から派生する丘陵上に立地する。このあたりの丘陵は大山を噴出源とする火山堆積物により形成された台地で、浸食作用によって大小の谷が開析されている。

今回の調査地は４区と５区に分かれている。４区は標高60～65mの２本の尾根と、その間にある谷で、５区は４区の東側にある標高62mを最高位とする丘陵尾根と谷に向かう斜面である。

既調査地である２区と３区は、４区西尾根と東尾根のそれぞれ北側隣接地で、１区は広域農道に分断されているが、２区からさらに北へ続く尾根部である。

調査前の現況は植林地であった。今回検出した弥生時代の墳丘墓は、貼石がわずかに露出していたことで、表土剥ぎ前からその存在を把握しており、古墳時代の大型住居SI16も窪地として地表面に痕跡を残していた。１区の調査においても木棺墓等の標石が原位置を保っていたことが報告されている(註)。遺跡の所在する丘陵は、遺構面に及ぶ耕作など、後世の改変をあまり受けていないようだ。

調査地の基本層序は、谷を除き、これまで調査された地点のものと大きく変わることはない。以下に基本層序の概要を記す。土色は谷の堆積土のものを記しており、尾根とは若干異なる場合がある。

１層　表　　土：樹木の腐葉土を中心とし、調査地全体に10～15cmの厚さで堆積する。

２層　褐　色　土：10cm程度の厚さで堆積。弥生時代から奈良時代までの遺物を含む。尾根では色調が異なったり、細分が可能であったりするため、柱状図では２層相当と記載。

３層　黒 褐 色 土：谷部に堆積する。斜面下方に向かうにつれ厚く堆積し、最大で50cmを測る。弥生時代から古墳時代の遺物を含む。奈良時代の遺構が尾根南側にのみ存在するためか、３層には奈良時代の遺物は確認できていない。

４層　黄 褐 色 土：標高59ｍあたりで谷の傾斜が変換するが、比較的傾斜が緩やかな谷の南部分を中心に堆積する。厚さは10～30cmを測る。弥生時代の遺物を包含する。

５層　褐 灰 色 土：４層と入れ替わるように谷の北側に認められる。30cm程度の厚さで堆積し、弥生時代の遺物を含む。

６層　黄 褐 色 土：谷の北側を中心に堆積する弥生時代の遺物包含層。SS7等はこの上面で検出した。厚さは最大30cmだが、斜面下方に向け層厚を減じ、調査地外へ続かない。

７層　褐　色　土：谷の北側に堆積する。炭化物を密に含んでいる。最大で20cmの厚さを測り、弥生時代の遺物を含む。

８層　褐 灰 色 土：遺物包含層直下の無遺物層。谷ではSK119の掘り込み面となっている。尾根では色調が異なったり、細分が可能であるため、柱状図では８層相当と記載。

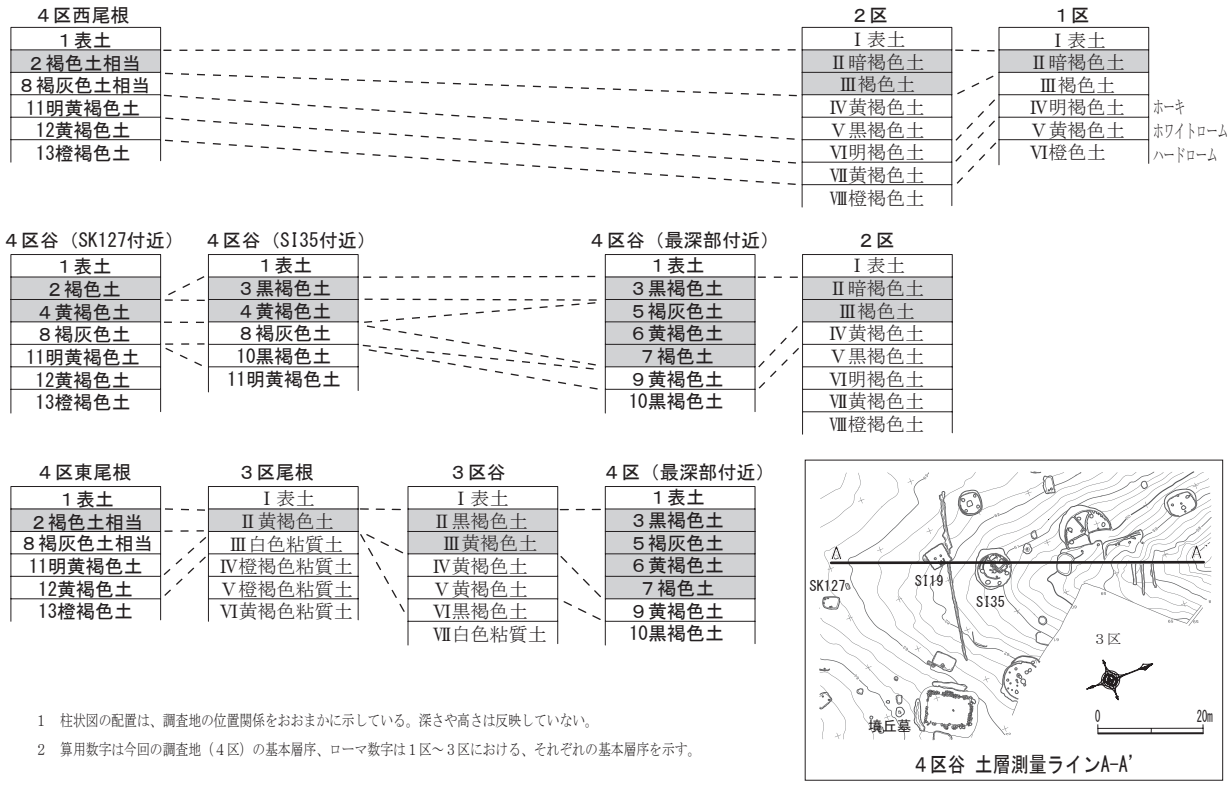
９層　黄 褐 色 土：８層と入れ替わるように谷の北側に認められる無遺物層である。

10層　黒 褐 色 土：谷に堆積する無遺物層で、SI35は一部この層を床面としている。

11層　明黄褐色土：大山の火山噴出物であるホーキ層の二次堆積土と思われる。

12層　黄 褐 色 土：ホワイトローム

13層　橙 褐 色 土：ハードローム



1　柱状図の配置は、調査地の位置関係をおおまかに示している。深さや高さは反映していない。

2　算用数字は今回の調査地（４区）の基本層序、ローマ数字は１区～３区における、それぞれの基本層序を示す。

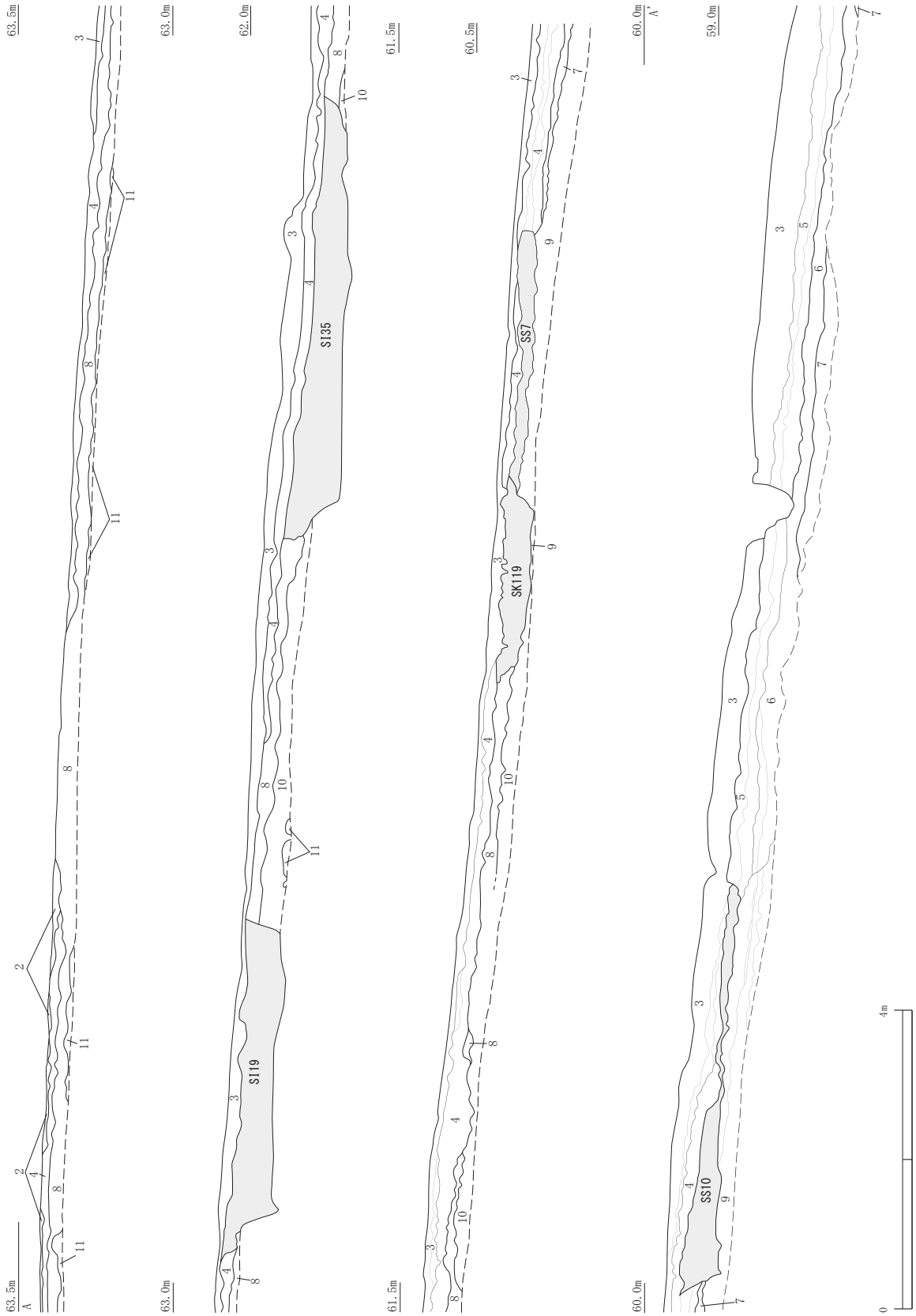
第５図　基本土層模式図

梅田萱峯遺跡全体で見ると、尾根部は表土、遺物包含層の下にソフトローム起源と思われる無遺物層（８層）があり、この上面が遺構面である。以下、ホーキ層（11層）、ホワイトローム（12層）、ハードローム（13層）と続き、住居跡等の掘り込みはハードロームまで及んでいる。弥生時代とそれ以降の遺構では、本来掘り込み面が異なっていたであろうが、尾根ではその違いは確認できていない。今回、谷底付近で検出された遺構の掘り込み面を検討してみると、弥生時代の遺構（SI35、SS7、SS10、SK119）は６層、８層上面から掘り込まれ、４層に覆われているのに対し、古墳時代の遺構（SI19）は４層上面から掘り込まれていることが分かった。これは谷の厚い堆積土の、しかも土層断面を検討して認識できたもので、堆積の薄い尾根部でこの違いを認識するのは、極めて困難である。

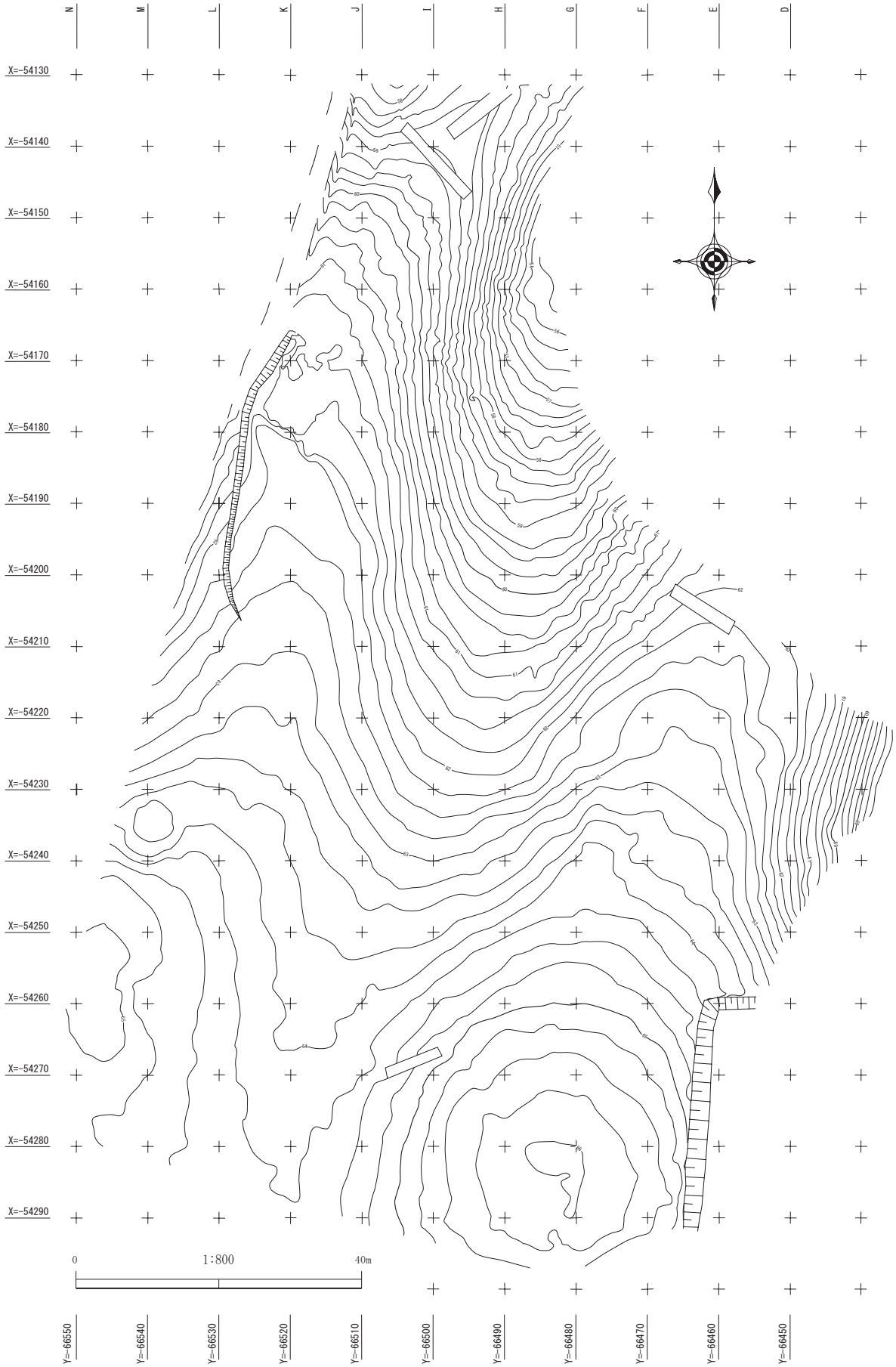
谷の堆積は地点によって細かな様相は異なろう。大まかに言えば遺物包含層の下位にソフトローム起源と思われる８、９層があり、その下に谷にのみ認められる10層が堆積し、11層以下へと続いている。これより下は掘削深度の関係で確認していない。

今回の調査地と既調査地の基本層序の対比は、第５図に模式的に示した。　（湯村）

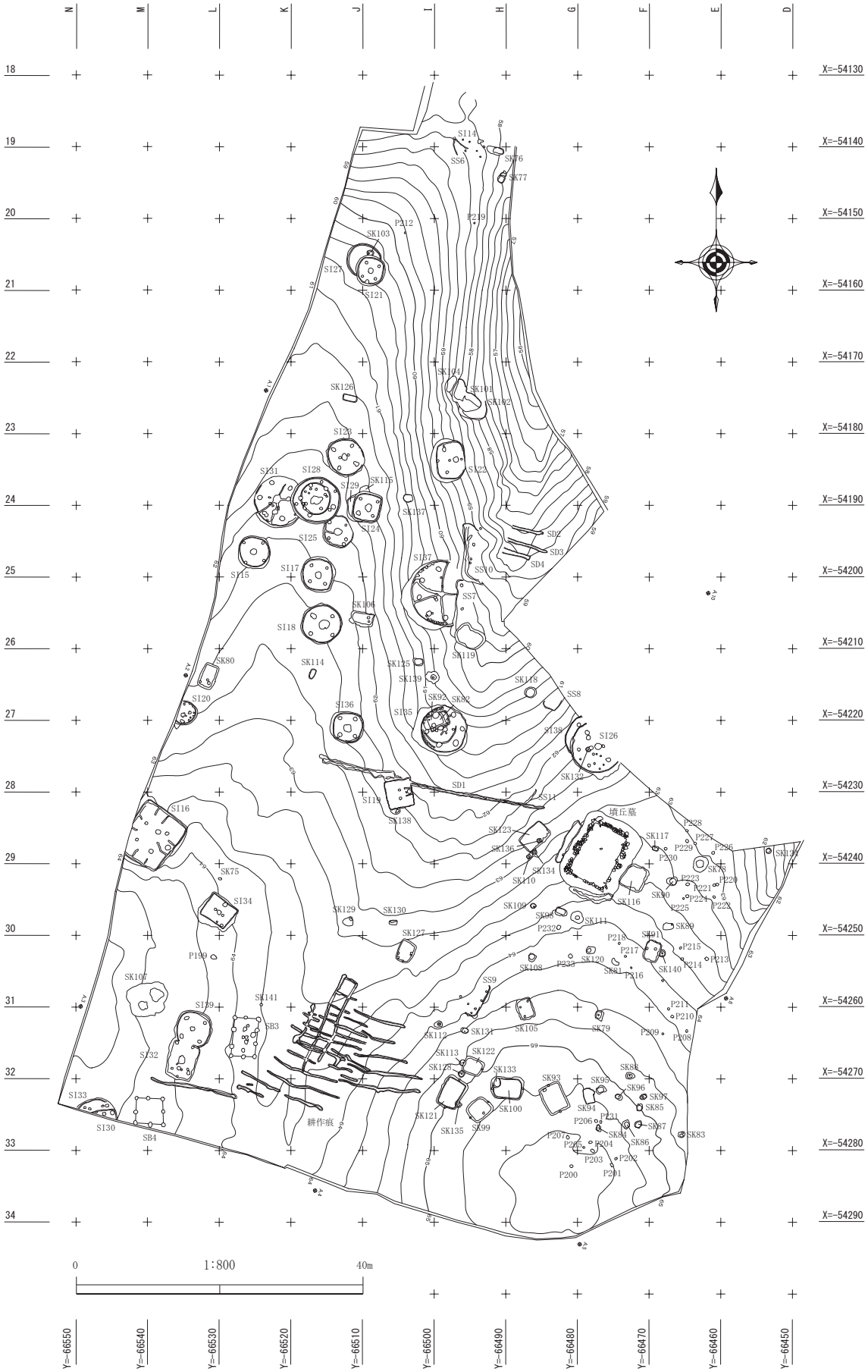
（註）　高尾浩司・淺田康行編 2007『梅田萱峯遺跡１』鳥取県埋蔵文化財センター


63.5m
A
63.0m
62.0m
61.5m
60.5m
60.0m
A'
59.0m
S119
S135
SK119
SS7
SS10
0
4m

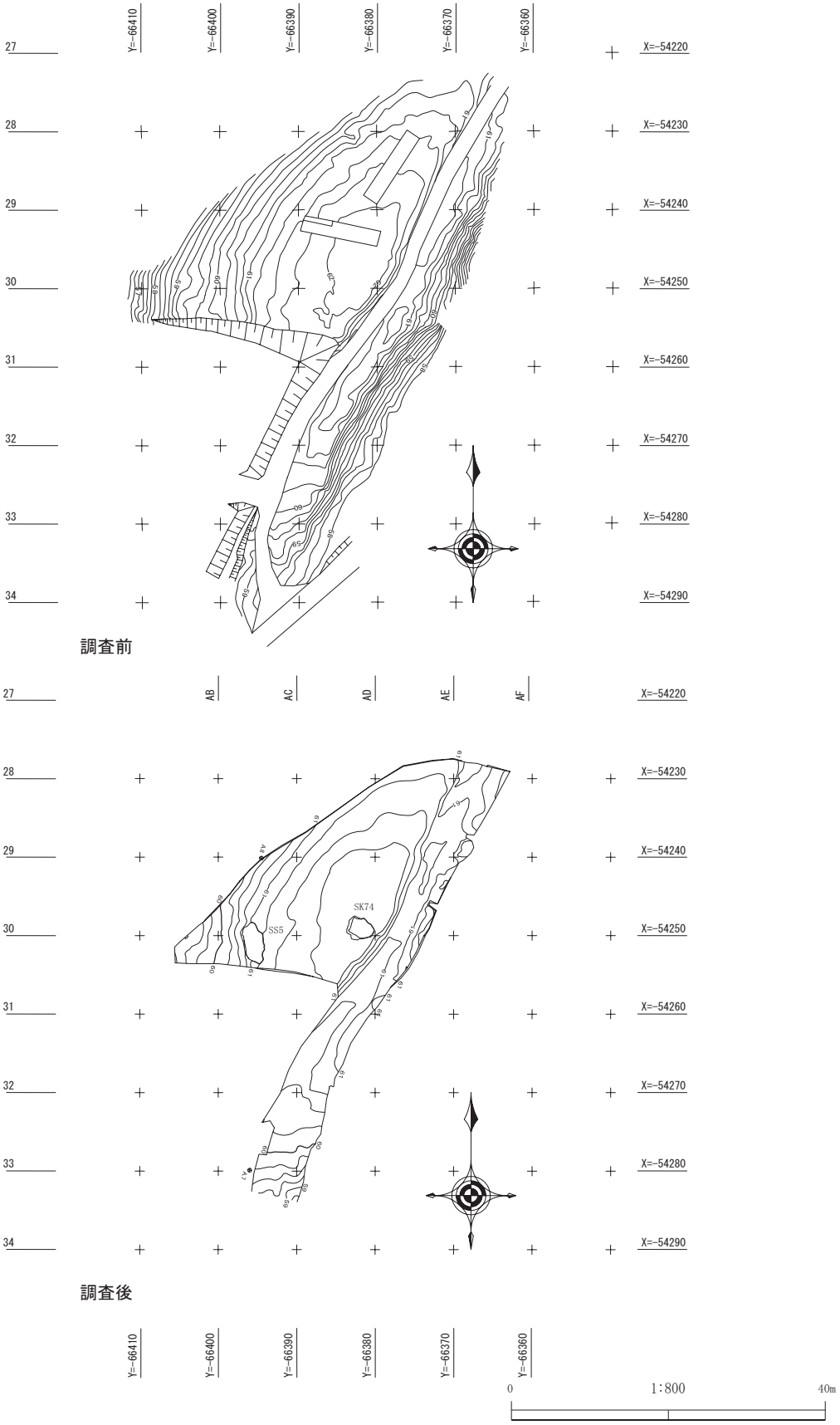
第６図　谷土層図



第７図　4区調査前地形測量図



第８図　4区調査後地形測量図


Y=-66410
Y=-66400
Y=-66390
Y=-66380
Y=-66370
Y=-66360
27
28
29
30
31
32
33
34
X=-54220
X=-54230
X=-54240
X=-54250
X=-54260
X=-54270
X=-54280
X=-54290
調査前
AB
AC
AD
AE
AF
SK74
SS5
調査後
0
1:800
40m

第９図　5区地形測量図

第2節　弥生時代の遺構・遺物

(1)概　要

竪穴住居19棟、段状遺構７基、方形土坑12基、その他の土坑14基、墳丘墓１基を検出した。方形土坑とは長軸3～4m、短軸2～3m程度の、平面形態が整った方形の土坑で、大型であることや、壁溝、ピットをもつものがあり、その他の土坑とは区別した。

遺構は弥生時代中期後葉から後期前葉までのものが中心で、それ以外は後期中葉の竪穴住居跡が１棟あるに過ぎない。

遺構の分布を見ると、墳丘墓を境に北側には竪穴住居が密集するが、南側にはこの時期の可能性のあるSI33を除き、基本的に竪穴住居は見られない。その代わりに東尾根南側平坦部には大型の方形土坑がまとまって築かれており、遺構の配置空間を厳然と区別する意識があったようだ。竪穴住居跡の多くは尾根の平坦部から緩斜面にかけて築かれているが、谷を臨む斜面地や谷底といっていいところにも認められる。（湯村）

(2)竪穴住居跡

SI14・SS6（第10・11図、PL.2・41・64）

SI14ならびにSS6はＨ18から19グリッドの尾根筋上の緩斜面に位置する。北半部は、平成18年度に調査済みである(註)。また東半部は、床面まで既に流失していた。南辺はSS6と重複する。SI14がSS6の埋土を掘り込んで造られていることから、前者が新しい。SI14の平面形は楕円形ないしは小判形を呈する。規模は長軸4.3m以上、短軸3.6m、床面積は残存部で13.1㎡を測る。壁高は最も残りのよい西隅で27㎝である。床面は若干の傾斜をもつが、平坦である。ピットはいずれも床面で検出した。主柱穴は、P4・8・9とみられる。東隅のピットは未検出であるが、地山のレベルがピットの下端とほぼ同じことから、流失したものと見られる。また検出したピットは、いずれも浅く、柱痕跡も認められない。このことから、段状遺構である可能性もある。

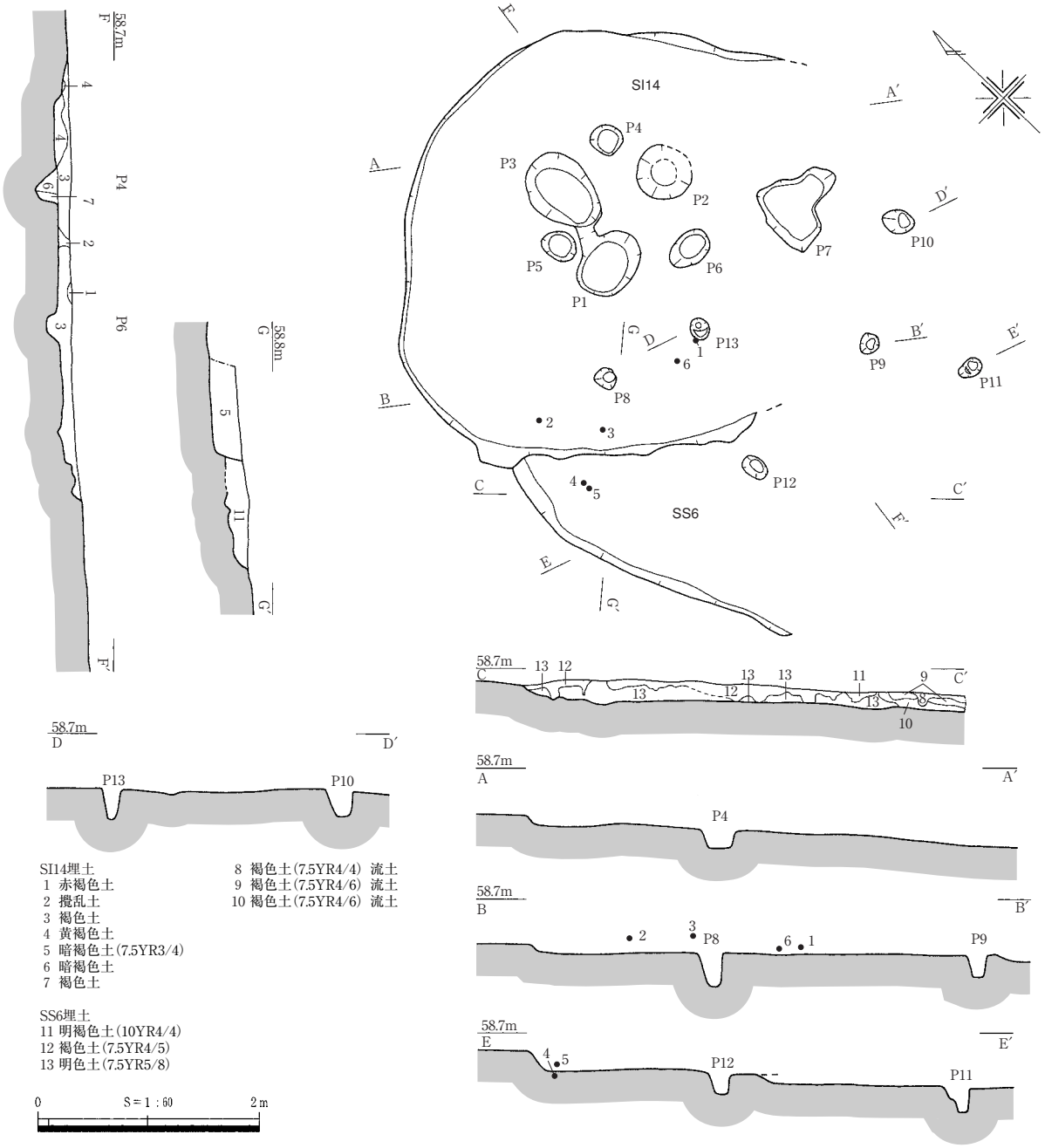
遺物は西側コーナー付近にて、高所側である南側から流れ込んだ状態で、土器が若干出土した。出土した土器はⅣ－1期のものであることから、中期後葉の遺構とみられる。

SS6は前述のとおり、北半部がSI14に切られ、東半部の床面も流失しており、遺存状況が悪い。このため規模、平面形ともに不明である。P10～13を主柱穴とする竪穴住居の可能性もあるが、SI14と同様いずれも浅く、柱痕跡も認められない。このためここでは段状遺構としておく。壁高は11㎝を測る。遺物は埋土中の床面からやや浮いた高さから土器が２点出土した。出土した土器はⅣ－1期のものであることから、中期後葉の遺構とみられる。（小山）

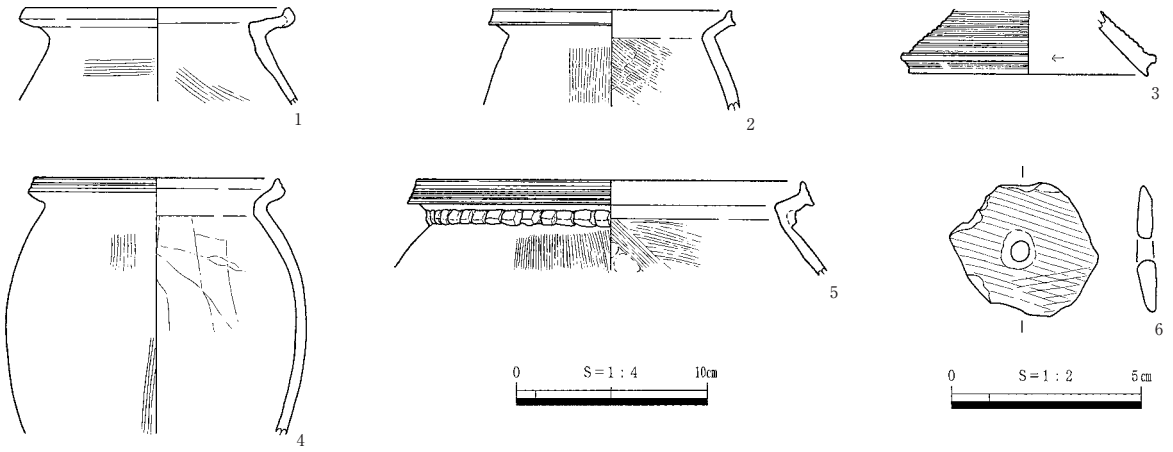
（註）　小口英一郎・濵本利幸編2007『梅田萱峯遺跡Ⅲ』鳥取県埋蔵文化財センター

SI15（第12図、PL.2・41・68）

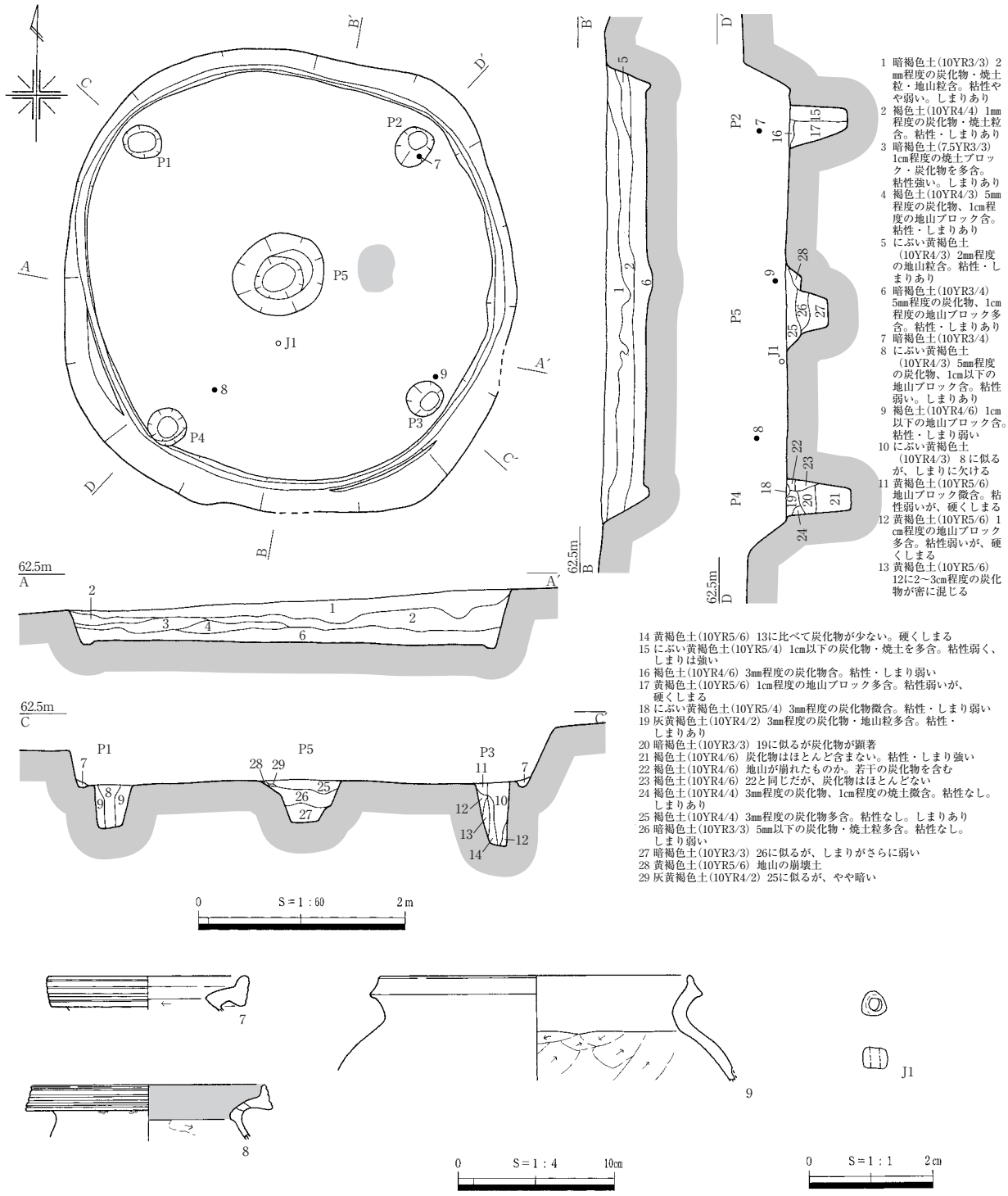
K24グリッド、西尾根北側の西に向かって下がる標高62m付近の緩斜面地に位置する。北東にSI28、東にはSI17が近接する。平面形は長軸4.4m、短軸4.3mの円形で、床面積は13.8㎡、深さは最大54㎝である。



第10図　SI14・SS6



第11図　SI14・SS6出土遺物



第12図　SI15および出土遺物

床面では、壁溝１条、ピット５基、被熱面１ヶ所を検出した。貼床は認められない。

壁溝は住居壁際を全周する。幅8～12cm、断面は逆台形、床面からの深さ約4cmである。主柱穴はP1～P4で、柱配置から中央ピットP5を囲む４本柱が並ぶ建物であったと考える。柱の位置は壁際に寄っており、P4の掘り方は壁溝に接している。主柱間距離は、P1－P2間から時計回りに2.7m、2.5m、2.6m、2.8mである。柱痕跡から推定される柱の直径は10～14cmである。中央ピットP5の規模は長軸90cm、短軸80cm、深さ40cm、平面楕円形で、断面は逆台形状である。P5の26、27層は焼土と炭化物を顕著に含んでいる。被熱面はP5東側にある。

本住居では、西壁付近において、最下層の暗褐色土（６層）上に1㎝大の焼土ブロックや炭化物を多量に含む締まった土（３層）を確認した。遺物を含まず堆積時期は不明だが、埋没途中で人為的に廃棄された可能性がある。その上層の埋土は水平に堆積しており、自然に埋没したと考える。

図化した遺物は、土器7～9、ガラス小玉J1である。埋土中出土の7～9はいずれも甕で、内面調整は頸部までヘラケズリが達し、弥生時代後期前葉（Ⅴ－1）に位置づけられる。このうち8は、頸部に２ヶ所の穿孔が認められ、口縁内面を赤彩している。J1は床面からの出土で、直径4㎜、厚さ4㎜、孔径約2㎜、色調は淡い青色である。

遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代後期前葉（Ⅴ－1）と考える。（長尾）

SI17（第13～15図、PL.3・41・64・66～68）

J24からJ25グリッド、西尾根から北東に向かって下がる標高62m付近の緩斜面地に位置する。南にSI18、西にはSI15が近接する。トレンチを設定した際、埋土中から炭化材片や多量の焼土粒を確認したことから、焼失住居跡と判断し調査を進めた。

平面形は長軸4.9m、短軸4.6mの隅丸方形を呈すが、北壁面では平面の形状がわずかに北側へ突出している。床面積は15.2㎡、深さは最大88㎝である。

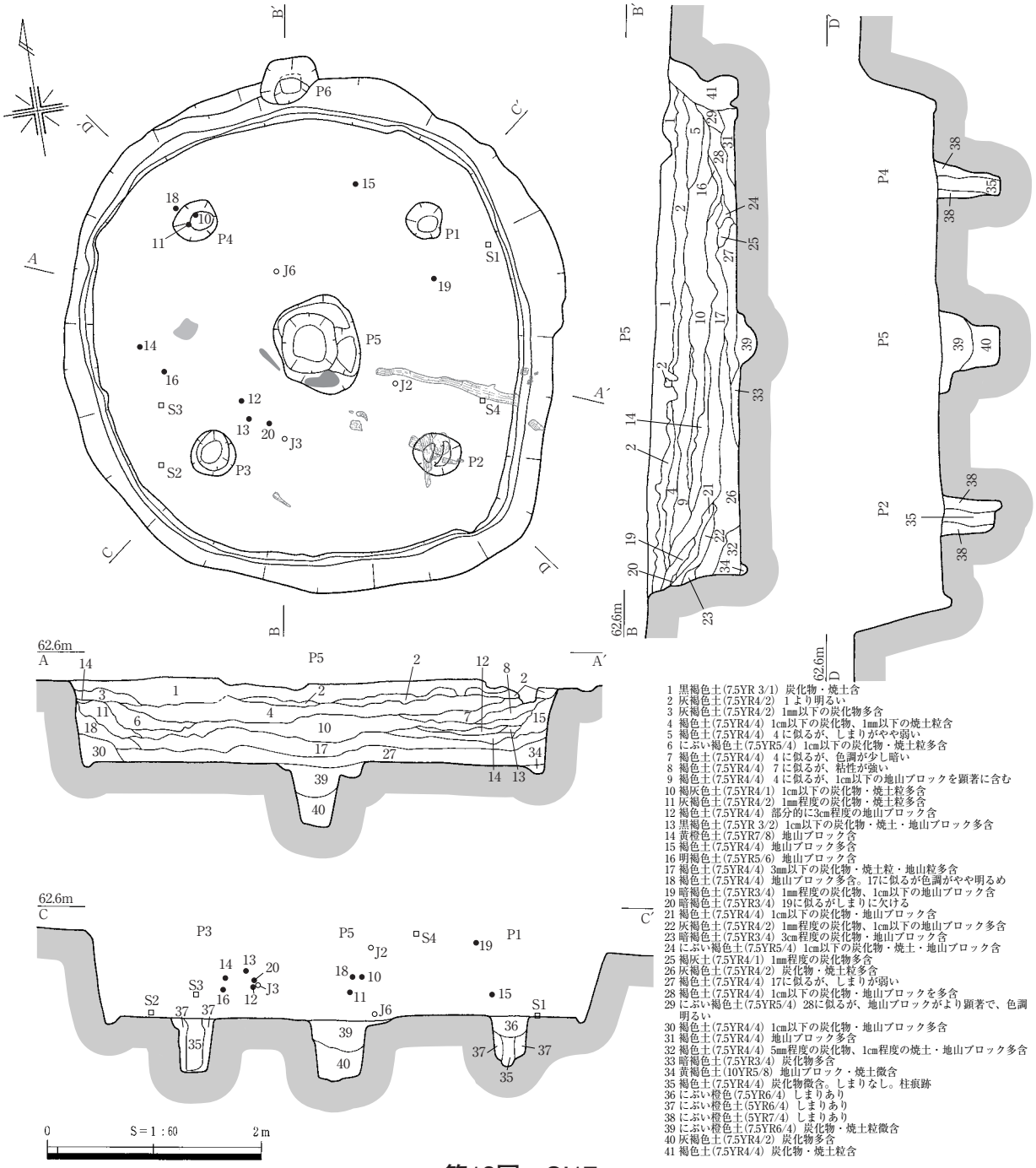
床面で壁溝１条、ピット５基、被熱面１ヶ所、北側の壁面上部ではピット１基を検出した。貼床は認められない。

壁溝は、途切れることなく壁際を巡る。幅6～10㎝、断面はＵ字形で、床面からの深さ最大6㎝である。床面のピットのうち、主柱穴はP1～P4の４本で、壁から約70～80㎝内側に位置する。主柱間距離は、P1－P2間から時計回りに2.15m、2.1m、2.15m、2.15mを測り、中央ピットP5を囲むように方形状に並ぶ。全て柱痕跡が認められ、推定される柱の径は10～15㎝である。P5の規模は長軸90㎝、短軸85㎝、深さ55㎝、平面形は歪な楕円形で、内部は２段掘りになっている。P6は、壁面を斜めに掘り込んでおり、検出面からの深さは最大約30㎝、床面からの深さは3㎝を測る。柱痕跡は認められないが、主柱穴の中間を結ぶライン上に位置することから、補助的な柱穴であった可能性もある。

埋土にはほとんどの層に焼土が含まれている。焼土粒の含有量が比較的少ない上層と、多く含む下層から中層に大きく分かれるが、粒の大きさは1㎝以下のものが主体であり、強く火を受けたような塊が集中する範囲は認められない。住居の壁際には、壁の崩落に由来すると考えられるブロックや地山ブロックを含む層が認められ、焼土粒を含む層と重なるように堆積する。焼土粒は、26・32層など住居南側の埋土中には顕著である。これら焼土の由来については明確にできていない。

全体的に炭化材の出土量は少ないが、燃焼して残らなかったのか、腐植したためか判断することはできなかった。住居南から南東部において形状を残す材が確認され、それらは、焼土粒を多く含む26・32層に覆われていた。これらの出土状況から、南側の材は比較的早い段階に土を被り、酸欠状態になって炭化が進み遺存した可能性がある。

南東部で検出した炭化材のうち、丸太材と見られる炭化材は、壁際から住居床面中央に向かって倒れ込んでいた。遺存状態は悪いが、出土状況から建物の構造材と推測され、垂木の可能性がある。その他、丸太材か板材か判断することは困難であったが、住居中央に繊維方向が向く材と、その上に直交するように重なった状態で検出した材もある。これらの炭化材の樹種は確認することができなかった。他の多くの部材は失われていたが、P5南側に検出した薄い炭化物層33層は、炭化した木材が炭



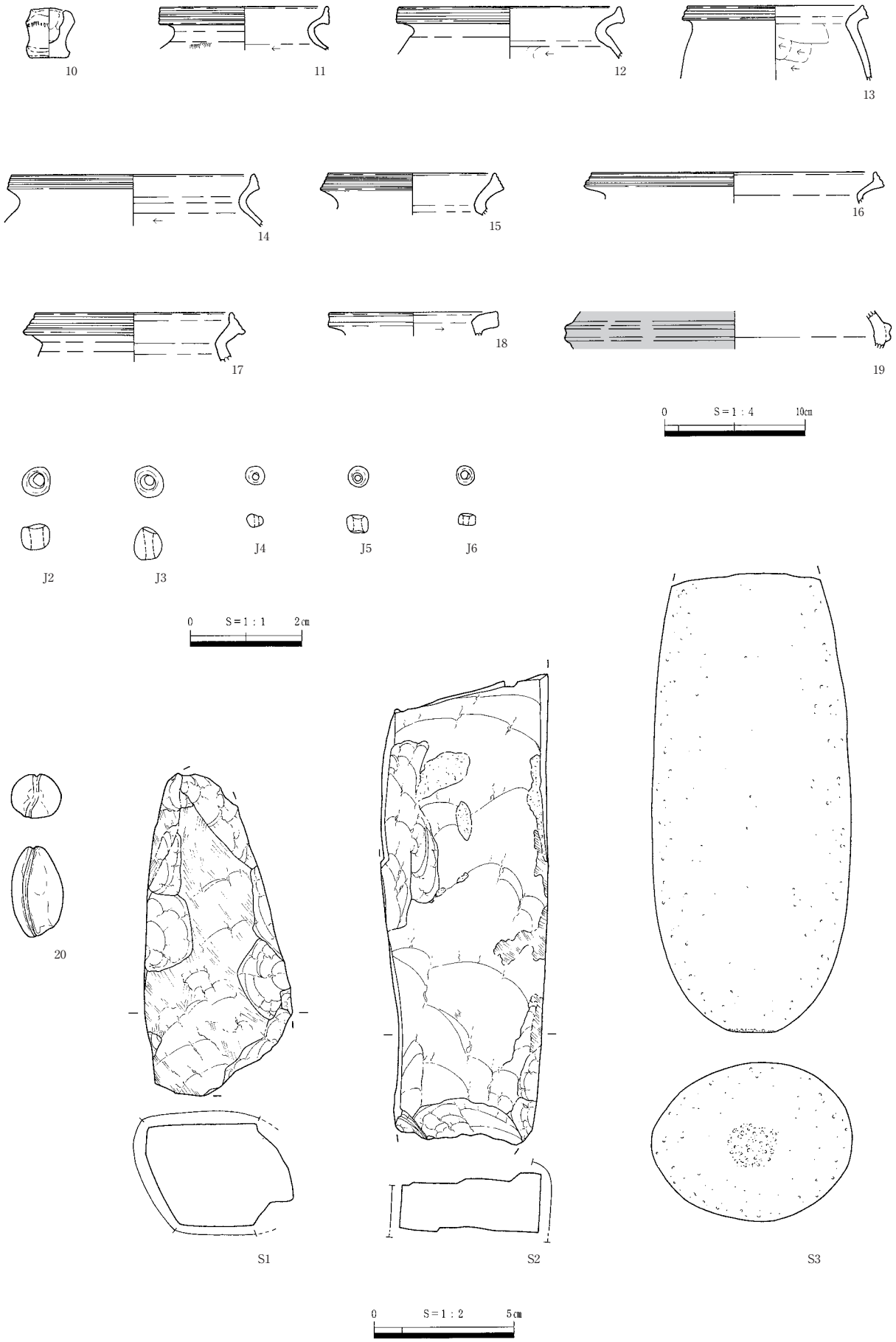
1 黒褐色土(7.5YR 3/1) 炭化物・焼土含
2 灰褐色土(7.5YR4/2) 1より明るい
3 灰褐色土(7.5YR4/2) 1mm以下の炭化物多含
4 褐色土(7.5YR4/4) 1cm以下の炭化物、1mm以下の焼土粒含
5 褐色土(7.5YR4/4) 4に似るが、しまりがやや弱い
6 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 1cm以下の炭化物・焼土粒多含
7 褐色土(7.5YR4/4) 4に似るが、色調が少し暗い
8 褐色土(7.5YR4/4) 7に似るが、粘性が強い
9 褐色土(7.5YR4/4) 4に似るが、1cm以下の地山ブロックを顕著に含む
10 褐灰色土(7.5YR4/1) 1cm以下の炭化物・焼土粒多含
11 灰褐色土(7.5YR4/2) 1mm程度の炭化物・焼土粒多含
12 褐色土(7.5YR4/4) 部分的に3cm程度の地山ブロック含
13 黒褐色土(7.5YR 3/2) 1cm以下の炭化物・焼土・地山ブロック多含
14 黄橙色土(7.5YR7/8) 地山ブロック含
15 褐色土(7.5YR4/4) 地山ブロック多含
16 明褐色土(7.5YR5/6) 地山ブロック含
17 褐色土(7.5YR4/4) 3mm以下の炭化物・焼土粒・地山粒多含
18 褐色土(7.5YR4/4) 地山ブロック多含。17に似るが色調がやや明るめ
19 暗褐色土(7.5YR3/4) 1mm程度の炭化物、1cm以下の地山ブロック含
20 暗褐色土(7.5YR3/4) 19に似るがしまりに欠ける
21 褐色土(7.5YR4/4) 1cm以下の炭化物・地山ブロック含
22 灰褐色土(7.5YR4/2) 1mm程度の炭化物、1cm以下の地山ブロック多含
23 暗褐色土(7.5YR3/4) 3cm程度の炭化物・地山ブロック含
24 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 1cm以下の炭化物・焼土・地山ブロック含
25 褐灰土(7.5YR4/1) 1mm程度の炭化物多含
26 灰褐色土(7.5YR4/2) 炭化物・焼土粒多含
27 褐色土(7.5YR4/4) 17に似るが、しまりが弱い
28 褐色土(7.5YR4/4) 1cm以下の炭化物・地山ブロックを多含
29 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 28に似るが、地山ブロックがより顕著で、色調明るい
30 褐色土(7.5YR4/4) 1cm以下の炭化物・地山ブロック多含
31 褐色土(7.5YR4/4) 地山ブロック多含
32 褐色土(7.5YR4/4) 5mm程度の炭化物、1cm程度の焼土・地山ブロック多含
33 暗褐色土(7.5YR3/4) 炭化物多含
34 黄褐色土(10YR5/8) 地山ブロック・焼土微含
35 褐色土(7.5YR4/4) 炭化物微含。しまりなし。柱痕跡
36 にぶい橙色(7.5YR6/4) しまりあり
37 にぶい橙色土(5YR6/4) しまりあり
38 にぶい橙色土(5YR7/4) しまりあり
39 にぶい橙色土(7.5YR6/4) 炭化物・焼土粒微含
40 灰褐色土(7.5YR4/2) 炭化物多含
41 褐色土(7.5YR4/4) 炭化物・焼土粒含

第13図　SI17

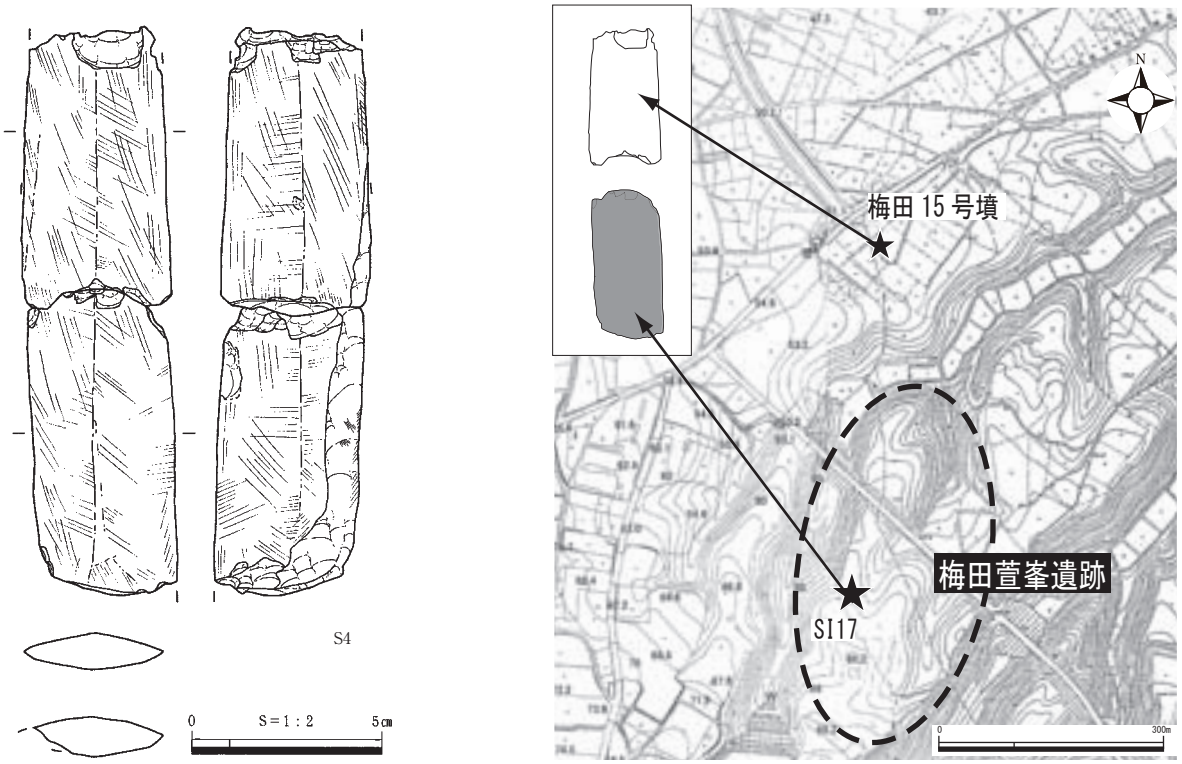
化物層として残ったものかもしれない。

中央ピットP5の40層も炭化物を多量に含むが、色調が他の埋土と異なっており、住居機能時には既に堆積していたものと考える。

遺物のうち、注目されるのは１層出土の磨製石剣S4である。基部側の破片で、残存長8.1cmを測る。石材鑑定はしていないが、板状に割れる黒色の石材を使用している。本遺跡の北側丘陵上では、今年度、梅田六ツ塚遺跡の調査がおこなわれたが、そのうちの梅田15号墳盛土から出土した磨製石剣破片と、本遺構出土の破片が接合した。接合状態でも完形とはならないが、残存長17.1cm、最大幅4.0cm、最大厚1.1cmと大型品であったことがわかる。梅田15号墳出土品は鎬や縁辺もシャープであるが、本



第14図　SI17出土遺物(1)



第15図　SI17出土遺物(2)

遺構出土品は全体的にやや摩滅しており、色調もオリーブがかっている。埋没環境の違いを示すものだろうか。梅田15号墳と梅田萱峯遺跡SI17の間は約460m離れている。それぞれの位置に石剣の破片が残された経緯は不明といわざるをえない。

また、ガラス小玉５点が床面直上から中層にかけて出土している点も特徴的である。本住居出土のガラス小玉は、大きさから２種類に分けられ、直径5.5㎜、厚さ4.5～5.5㎜、孔径約2.5㎜で、色調がやや濃い青色のもの(J2･3)と、直径約3.5～4.0㎜、厚さ2～3㎜、孔径1～2㎜で、色調が濃い青色のもの(J4)と、淡い青色のもの(J5・6)がある。

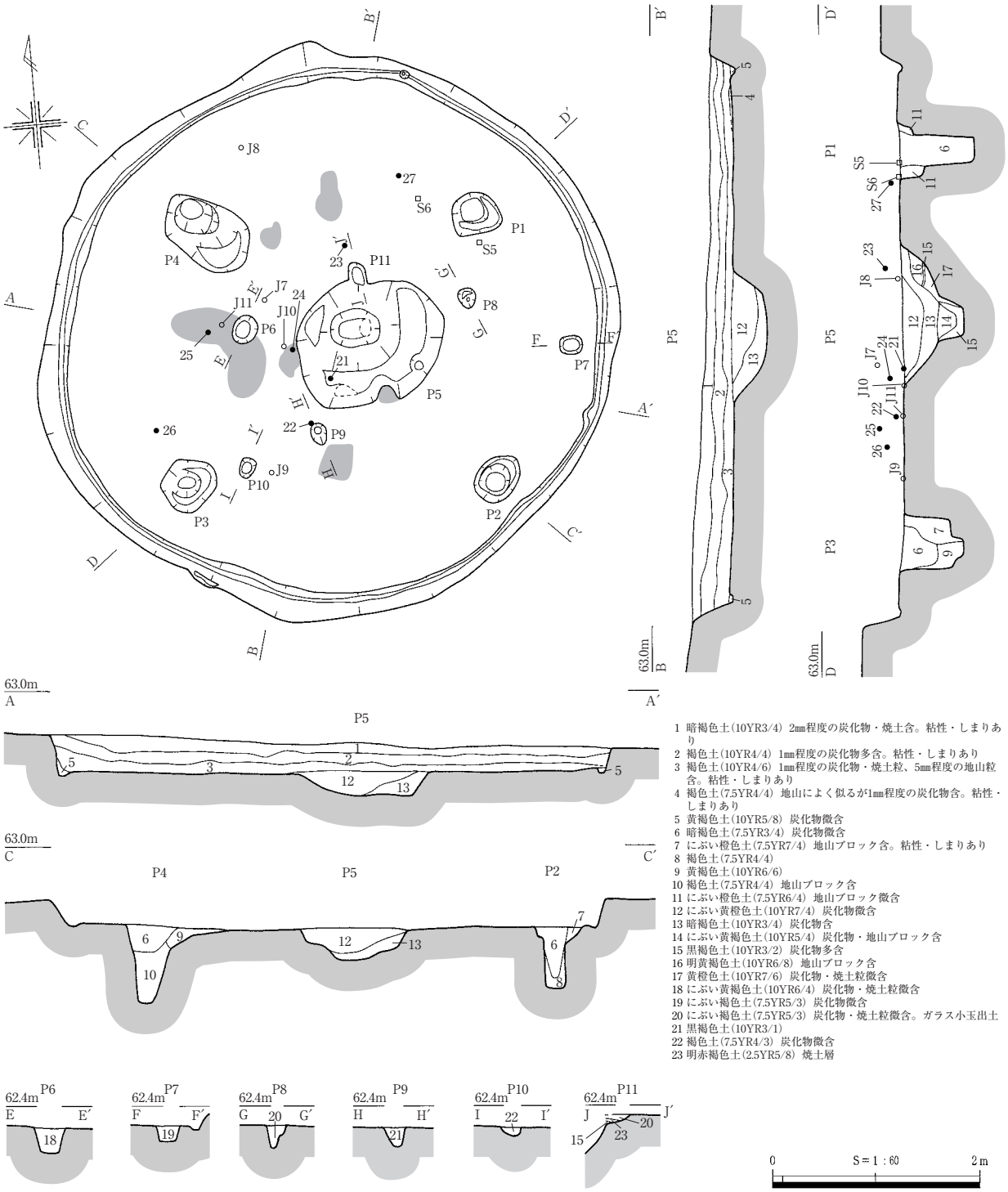
土器の多くは埋土中層から上層の出土で、いずれも小片である。被熱の痕跡は認められず、出土状況から焼失時に住居内に残されたものではないと考える。その多くは甕で、口縁端部はやや内傾し、外面に２～４条の凹線を施している。内面は頸部までヘラケズリ調整が達しており、弥生時代後期前葉(Ⅴ－1)の特徴をもつ土器と考える。18の胎土は在地の土器とは異なる特徴をもち、後述するSI18出土24～26のものと類似している。その他に、ミニチュア土器10、貼付突帯をもち赤彩する壺の体部19がある。さらに、土錘20、砥石S1・2、敲石S3が出土している。

以上の遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代後期前葉(Ⅴ－1)と考える。　　(長尾)

SI18（第16・17図、PL.4・42・43・66・68）

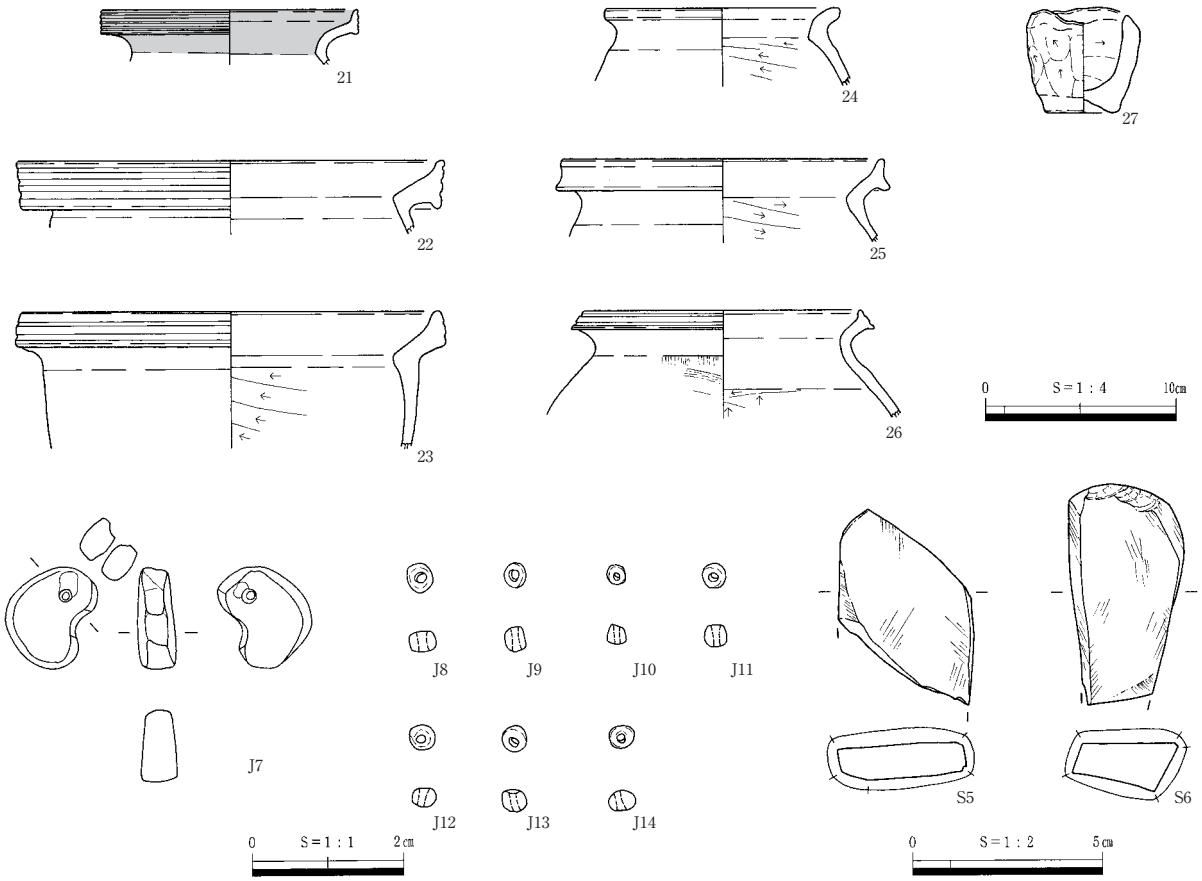
J25グリッド、西側尾根から北東に向かって下がる標高62m付近の緩斜面地に位置する。北にSI17が近接する。平面形は直径約5.6mのやや歪な円形で、床面積は22.2㎡、深さは最大35㎝である。

床面からは壁溝１条、ピット11基、被熱面６ヶ所を検出した。貼床は認められない。壁溝は床を全周する。幅は5～12㎝、断面はＵ字形で、床面からの深さ約3㎝である。主柱穴と考えられるのはP1



第16図　SI18

～P4の４本で、P1、P3、P4は壁から約70cm内側、P2は40cm内側に位置する。P2がやや壁寄りにあるためにP2－P3間の距離が長く、若干台形状に並んでいる。主柱間距離は、P1－P2間から時計回りに2.7m、3.0m、2.7m、2.8mである。P1の柱痕跡から推定される柱の直径は約25cmである。中央ピットP5の規模は長軸1.45m、短軸1.1m、深さ60cm、平面形は楕円形で内部が２段掘りになっている。最下層(15層)は色調が黒褐色で炭化物が多量に含まれており、同様の土が他の埋土に見られないことから、15層は住居機能時に既に堆積していたものと推測する。P6～P11は、深さ8～22cmの浅く小さなピットである。これらのピットの性格を明らかにすることはできなかったが、P6～P8は埋土の特徴



第17図　SI18出土遺物

が類似しており、何らかの関連性があるものかもしれない。後述するが、P8及びP11からはガラス小玉が出土している。また、被熱面は住居西側にのみ認められる。

本住居ではまず褐色土層が堆積し、最終段階で暗褐色土層が全体を覆っている。埋土の水平な堆積状況から自然堆積による埋没と考える。

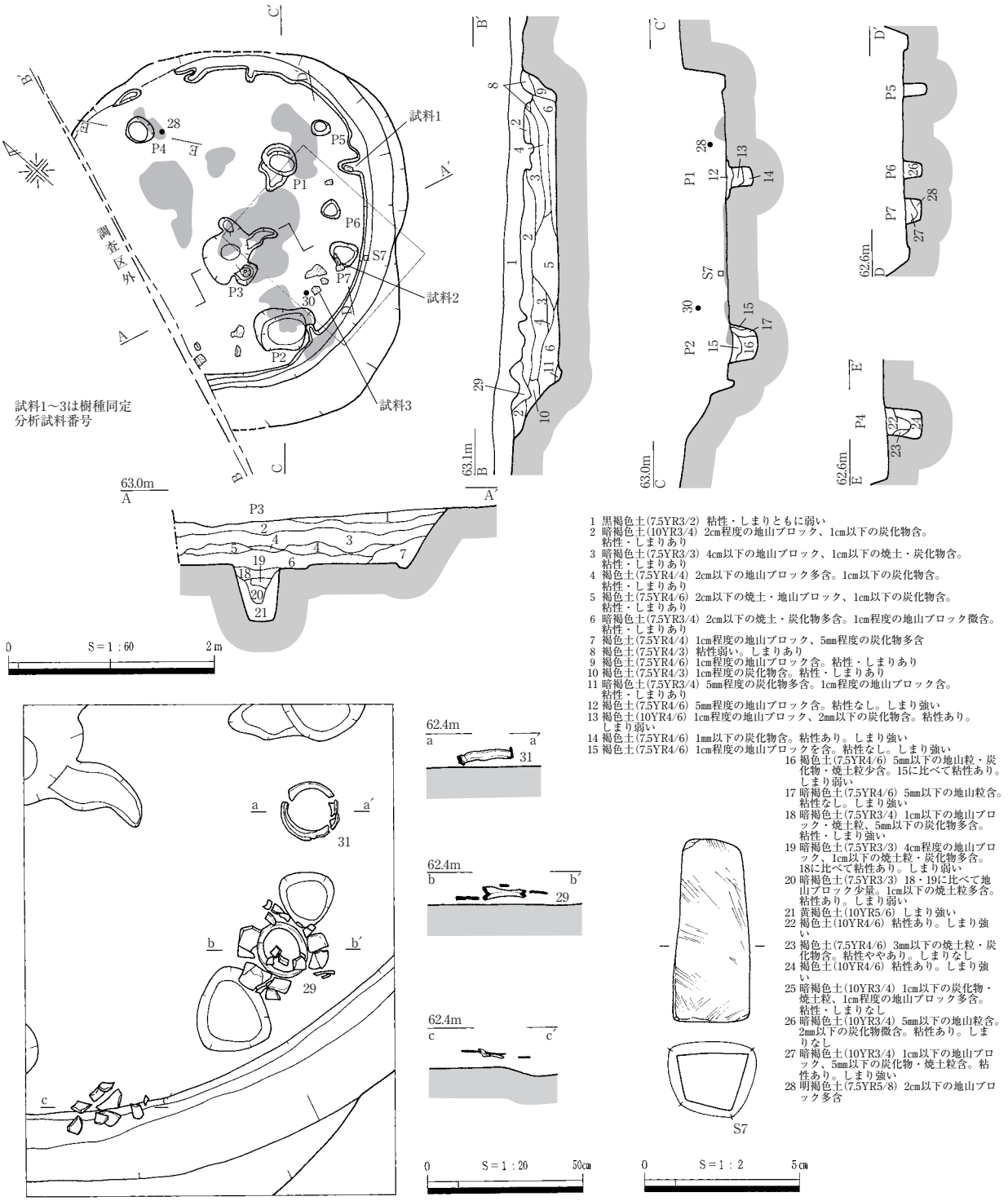
遺物は土器片のほか、砥石S5・6やガラス製勾玉J7、ガラス小玉J8～14が出土した。

ガラス製勾玉は１層出土である。板状のガラスを加工したもので、平面形はやや歪な曲線を描く。長さ1.4cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmである。穿孔は表裏両面からおこなわれ、貫通させている。穿孔に伴って穴の一部が欠けている。色調は淡い青色である。

ガラス小玉は床面から５点(J8～12)、P8とP11から各１点(P8:J13、P11:J14)、計７点が出土している。直径は2.5～4mm、厚さ2.5～3.5mmで、孔径は約1mm前後のものと、2mmのものがある。色調はJ11が暗い青色で、他は淡い青色である。

土器は、床面から埋土中にかけて壺21、甕22～26、コップ形土器27が出土した。甕は、いずれも内面のヘラケズリ調整が頸部まで達し、弥生時代後期前葉(Ⅴ－1)に比定されるものである。また、24～26の胎土は在地の土器と異なり、SI17出土18と類似している。その他、22や23も形態や口縁部の調整の特徴から、他の地域との関連性が窺える資料である。21は内外面に赤彩が認められる。

遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代後期前葉(Ⅴ－1)と考える。　(長尾)



1 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性・しまりともに弱い
2 暗褐色土(10YR3/4) 2cm程度の地山ブロック、1cm以下の炭化物含。粘性・しまりあり
3 暗褐色土(7.5YR3/3) 4cm以下の地山ブロック、1cm以下の焼土・炭化物含。粘性・しまりあり
4 褐色土(7.5YR4/4) 2cm以下の地山ブロック多含。1cm以下の炭化物含。粘性・しまりあり
5 褐色土(7.5YR4/6) 2cm以下の焼土・地山ブロック、1cm以下の炭化物含。粘性・しまりあり
6 暗褐色土(7.5YR3/4) 2cm以下の焼土・炭化物多含。1cm程度の地山ブロック微含。粘性・しまりあり
7 褐色土(7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック、5mm程度の炭化物多含
8 褐色土(7.5YR4/3) 粘性弱い。しまりあり
9 褐色土(7.5YR4/6) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
10 褐色土(7.5YR4/3) 1cm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
11 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の炭化物多含。1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
12 褐色土(7.5YR4/6) 5mm程度の地山ブロック含。粘性なし。しまり強い
13 褐色土(10YR4/6) 1cm程度の地山ブロック、2mm以下の炭化物含。粘性あり。しまり弱い
14 褐色土(7.5YR4/6) 1mm以下の炭化物含。粘性あり。しまり強い
15 褐色土(7.5YR4/6) 1cm程度の地山ブロックを含。粘性なし。しまり強い
16 褐色土(7.5YR4/6) 5mm以下の地山粒・炭化物・焼土粒少含。15に比べて粘性あり。しまり弱い
17 暗褐色土(7.5YR4/6) 5mm以下の地山粒含。粘性なし。しまり強い
18 暗褐色土(7.5YR3/4) 1cm以下の地山ブロック・焼土粒、5mm以下の炭化物多含。粘性・しまり強い
19 暗褐色土(7.5YR3/3) 4cm程度の地山ブロック、1cm以下の焼土粒・炭化物多含。18に比べて粘性あり。しまり弱い
20 暗褐色土(7.5YR3/3) 18・19に比べて地山ブロック少量。1cm以下の焼土粒多含。粘性あり。しまり弱い
21 黄褐色土(10YR5/6) しまり強い
22 褐色土(10YR4/6) 粘性あり。しまり強い
23 褐色土(7.5YR4/6) 3mm以下の焼土粒・炭化物含。粘性ややあり。しまりなし
24 褐色土(10YR4/6) 粘性あり。しまり強い
25 暗褐色土(10YR3/4) 1cm以下の炭化物・焼土粒、1cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりなし
26 暗褐色土(10YR3/4) 5mm以下の地山粒含。2mm以下の炭化物微含。粘性あり。しまりなし
27 暗褐色土(10YR3/4) 1cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物・焼土粒含。粘性あり。しまり強い
28 明褐色土(7.5YR5/8) 2cm以下の地山ブロック多含

第18図　SI20および出土遺物

SI20（第18図、PL.4・42・43・66）

Ｌ26グリッド、西尾根平坦部から西に向かい緩やかに傾斜する標高62.8m付近に位置する。住居の西側約1/3は調査区外に広がる。

表土除去後に精査を行い、ほぼ円形を呈する褐色土と暗褐色土の広がりを確認した。このためサブトレンチ（Ａ－Ａ′ライン）を設定し遺構の有無を確認したところ、壁溝を検出したため、竪穴住居であると判断して調査を行った。

平面形は径3.3mのやや不整な円形を呈すると考えられ、調査した範囲の床面積は6.4㎡である。検出面から床面までの深さは東側で最大43㎝を測る。床面で検出されたピットは７基で、P1・P2・P4が主柱穴と考えられる。調査できなかった部分と併せて４本柱の竪穴住居跡と推測している。主柱間距離はP1－P2間が1.7m、P4－P1間が1.4mを測る。P3は中央ピットである。P5～P7は補助的な柱穴の可能性もある。断面Ｕ字形の壁溝は幅6～15㎝、深さは最大で4.6㎝を測る。北側で途切れてＣ字状となっている。中央ピットの北から東側の床面には被熱面が３ヶ所形成されており、北側から時計回りに88×48㎝、34×24㎝、98×74㎝の範囲で床面が被熱し赤変していた。被熱面の色調は全体的に明るいものであったが、にぶく発色し、硬化した部分も認められた。また、床面直上の４ヶ所において、7～19㎝の厚みを持った焼土塊を検出した。これらの焼土塊に接した床面は、被熱により赤変した様子は見られない。本住居南側床面付近からは大小16点の炭化材が出土した。大部分は遺存状態が悪く、３点について樹種同定を行った結果、１点はシイノキ属、２点はアカガシ亜属であった（第4章）。アカガシ亜属とされる炭化材は、弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）のSK100からも検出されている。焼土塊と炭化材の状況から本住居は焼失住居と思われる。

埋土の堆積状況を見ると、各ピットが埋まった後、床面全体に焼土塊を多く含む６・７層が堆積し、その後２～４層、さらにその上に１層が被さるようにして遺構全体が埋まっている。

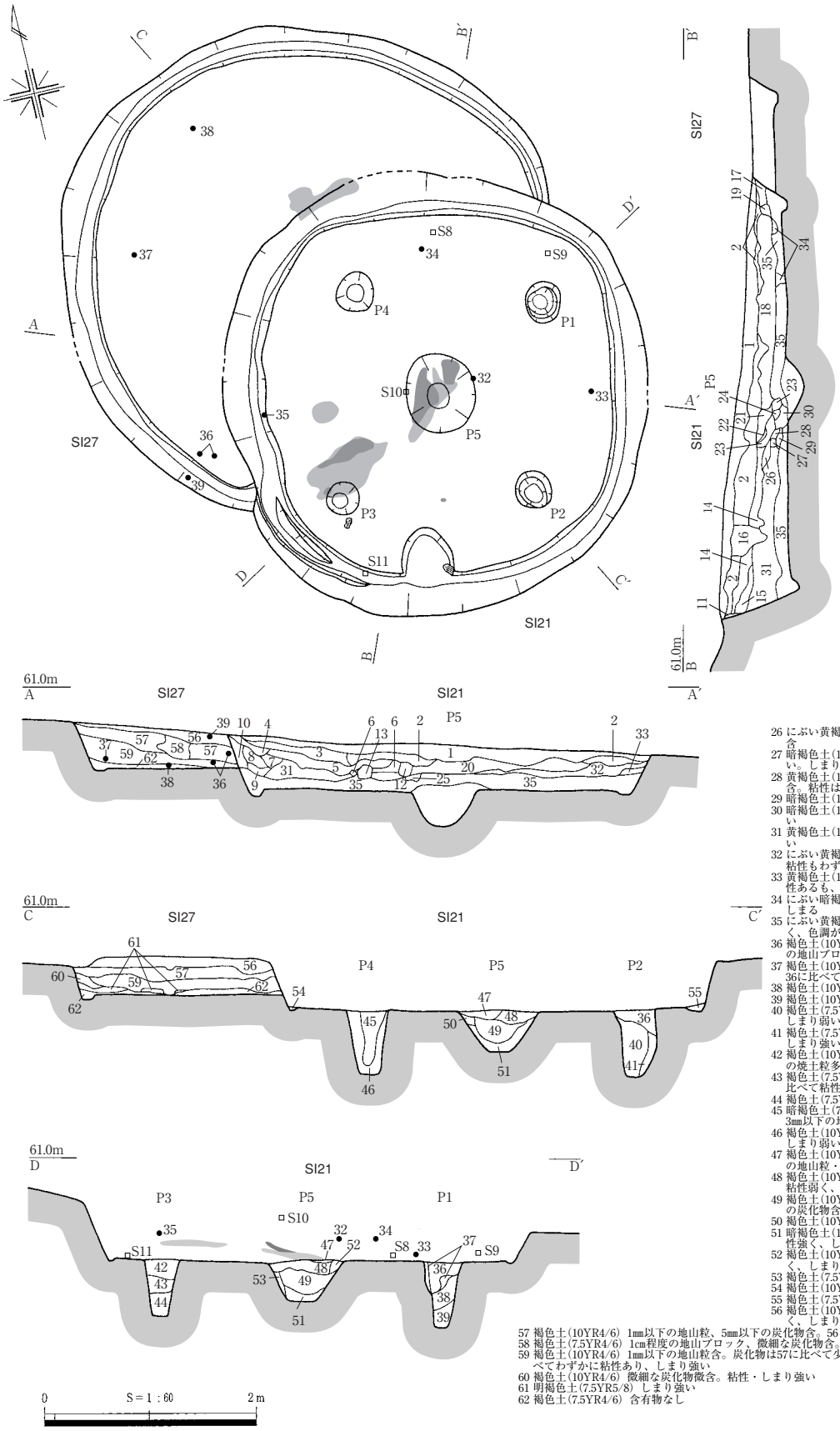
遺物の多くは埋土上層から中層にかけて出土している。いずれも複合口縁をもち、30・31は口縁部外面には平行沈線を施している。このことから、SI20の廃絶時期は弥生時代後期中葉（Ⅴ－2）と推定される。（恩田）

SI21・SI27（第19・20図、PL.5・42・64～66）

Ｉ20からＪ20グリッド、西尾根部の標高60m付近に位置する。

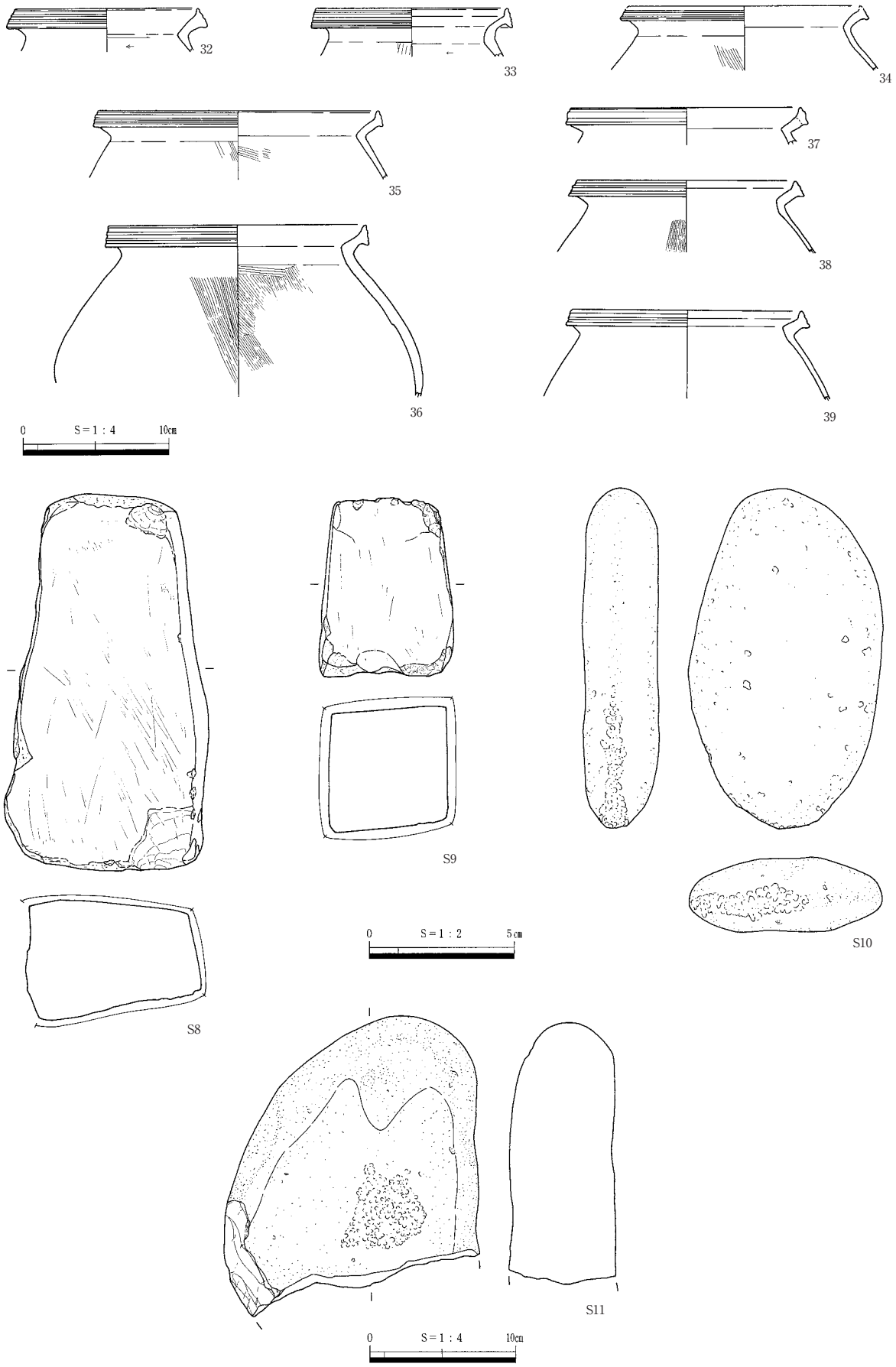
表土除去後に精査を行い、ほぼ円形の黒褐色土の広がりを確認した。このためサブトレンチ（Ａ－Ａ′及びＢ－Ｂ′ライン）を設定し遺構の有無を確認したところ、壁溝、中央ピットを検出したため、竪穴住居であると判断して調査を行った。また、別の遺構の埋土と思われる土層の堆積を確認し、上面の再精査を行ったところ、黒褐色土の広がりに切られるほぼ円形の褐色土の広がりも確認できたため、２棟の住居が切り合う遺構であると判断し、調査を行った。以下、新しいものから順にSI21、SI27の順に報告する。

SI21　平面形は隅丸方形を呈し、長軸4.3m、短軸4.1m、床面積は10.5㎡である。検出面から床面までの深さは南側で最大44㎝を測る。壁溝は断面Ｕ字形で全周しており、幅は6～18㎝、深さは最大で11㎝を測る。床面で検出されたピットは５基で、P1～P4が主柱穴と考えられる。主柱間距離はP1－P2間から時計回りに1.8m、1.9m、2.0m、1.8mを測る。柱穴はいずれも60㎝程度の深さを持ち、P4



1 黒褐色土(10YR2/2) 1mm程度の炭化物、3mm以下の焼土粒微含。粘性・しまり強い
2 暗褐色土(10YR3/3) 3mm程度の炭化物・焼土粒を多含。3cm程度の炭化物・焼土粒少含。粘性・しまり弱い
3 褐色土(10YR4/6) 3mm以下の炭化物・焼土粒多含。粘性強いが、しまりにやや欠ける
4 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 1mm以下の炭化物少含。粘性・しまり強い
5 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 4に似るが、炭化物多含。粘性・しまり4より弱い
6 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 1mm以下の炭化物少含。粘性・しまり強い
7 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 5に似るが、粘性が強い
8 明褐色土(7.5YR5/6) 10に似るが炭化物が多い
9 明褐色土(7.5YR5/6) 10に似るが、若干しまりに欠ける
10 明褐色土(7.5YR5/6) 1mm以下の炭化物微含。4より粘性・しまり強い
11 黄褐色土(10YR5/6) 地山がブロック状に混入したもの
12 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物少含
13 黒褐色土(10YR3/2) 全体的にまばらに黒い。粘性・しまりなし
14 にぶい黄褐色土(10YR4/5) 6に似るが焼土粒を多く含み、炭化物も大きめ
15 黄褐色土(10YR5/6) 1mm以下の炭化物を微含。粘性は強いが、しまりにやや欠ける
16 黒褐色土(10YR3/1) 2mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりなし
17 黄褐色土(10YR5/6) 炭化物微含。粘性・しまり強い
18 暗褐色土(10YR3/4) 3mm程度を中心に、最大3cm程度の炭化物含。5mm程度の焼土粒微含。粘性・しまり強い。2よりやや明るい
19 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 1mm程度の炭化物少含。粘性・しまり強い
20 褐色土(7.5YR4/4) 16より炭化物は少ない。住居中央付近は焼土粒が目立つ。粘性・しまり強い
21 暗褐色土(10YR3/3) 5mm程度の炭化物・焼土粒多含。粘性あり。しまり弱い
22 暗褐色土(10YR3/3) 19より若干色調が明るい
23 暗褐色土(10YR3/3) 1cm以下の炭化物・焼土粒多含。粘性・しまり強い
24 焼土ブロック
25 黒褐色土(10YR3/1) 21に細かな炭化物粒が多く加わり、色調が黒くなる
26 にぶい黄褐色土(7.5YR5/4) 1cm程度の炭化物多含
27 暗褐色土(10YR3/3) 21に似るが色調がやや暗い。しまり強い
28 黄褐色土(10YR5/6) 5mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性は弱いが、しまる
29 暗褐色土(10YR3/3) 25に似るが粘性が強い
30 暗褐色土(10YR3/3) 27に似るが、焼土粒が多い
31 黄褐色土(10YR5/6) 15に似るが、しまりが弱い
32 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 35より若干暗い。粘性もわずかに弱い
33 黄褐色土(10YR5/6) 1mm程度の炭化物少含。粘性あるも、しまりに欠ける
34 にぶい暗褐色土(10YR5/4) 35の一部か。固くしまる
35 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 31よりしまりが強く、色調が暗い
36 褐色土(10YR4/6) 5mm程度の炭化物、1cm以下の地山ブロック含。粘性弱い。しまり強い
37 褐色土(10YR4/6) 1cm以下の焼土ブロック微含。36に比べて粘性強く、しまりは弱い
38 褐色土(10YR4/6) 粘性・しまり強い
39 褐色土(10YR4/6) 粘性強い。非常にもろい
40 褐色土(7.5YR4/6) 微細な炭化物含。粘性強い。しまり弱い
41 褐色土(7.5YR4/6) 5mm以下の地山粒含。粘性・しまり強い
42 褐色土(10YR4/6) 1mm以下の炭化物、3mm程度の焼土粒多含。粘性弱い。しまり強い
43 褐色土(7.5YR4/6) 5mm程度の炭化物微含。42に比べて粘性強く、しまり弱い
44 褐色土(7.5YR4/6) 微細な炭化物含。粘性強い
45 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の焼土粒・炭化物、3mm以下の地山粒含。しまり強い
46 褐色土(10YR4/6) 微細な炭化物含。粘性強い。しまり弱い
47 褐色土(10YR4/6) 2mm程度の焼土粒、5mm程度の地山粒・炭化物多含。粘性弱く、しまり強い
48 褐色土(10YR4/6) 3mm以下の炭化物・焼土粒含。粘性弱く、しまり強い
49 褐色土(10YR4/6) 2mm以下の地山粒、1mm程度の炭化物含。粘性弱く。しまり強い
50 褐色土(10YR4/6) 48に類似。
51 暗褐色土(10YR3/4) 3mm以下の炭化物多含。粘性強く、しまり弱い
52 褐色土(10YR4/6) 1mm程度の炭化物含。粘性弱く、しまり強い
53 褐色土(7.5YR4/6) 粘性・しまり強い
54 褐色土(10YR4/6) 粘性やや強く、しまり強い
55 褐色土(7.5YR4/6) 粘性弱く、しまり強い
56 褐色土(10YR4/6) 2mm以下の砂礫多含。粘性弱く、しまり強い
57 褐色土(10YR4/6) 1mm以下の地山粒、5mm以下の炭化物含。56よりわずかに粘性あり、しまり強い
58 褐色土(7.5YR4/6) 1cm程度の地山ブロック、微細な炭化物含。しまり強い
59 褐色土(10YR4/6) 1mm以下の地山粒含。炭化物は57に比べて少ない。2mm程度の焼土微含。57に比べてわずかに粘性あり、しまり強い
60 褐色土(10YR4/6) 微細な炭化物微含。粘性・しまり強い
61 明褐色土(7.5YR5/8) しまり強い
62 褐色土(7.5YR4/6) 含有物なし

第19図　SI21・27



第20図　SI21・27出土遺物

には柱痕跡が認められる。また、P2は柱痕跡と思われる40層が内部で腐植したためか、空洞化していた。中央ピットはP5である。

埋土は55層に分けられる。その大部分に大小の炭化物が含まれ、特にP5の下層にはまとまって見られた。また、本住居埋土の南西部から中心部にかけての２・３・20・21・23・26層には焼土粒が多く含まれるのが特徴的で、P3の上位からP5直上にかけては塊のようになっていた。床面には被熱した面が見られないことから、本住居廃絶後に流れ込んだものと考えられるが、周辺には火を使用したと見られる痕跡がないことから、自然に流入したとは考えにくい。

遺物は埋土中層から最も多く出土しているが、そのうち、32～35の甕口縁部とS10の敲石、S11の台石、S8・9の砥石を図示した。

出土した32は口縁部に３条の凹線を巡らせ、内面のケズリが頸部直下まで及んでいる。この土器からSI21の廃絶時期は弥生時代後期前葉（Ⅴ－1）と推定される。

SI27　平面形は径4.7mのやや不整な円形で、南東部をSI21に切られる。床面積は推定で14.4㎡である。検出面から床面までの深さは西側で最大44cmを測る。SI21の調査後Ｃ－Ｃ′ラインを延長して埋土の状況と床面の高さを確認し、精査してみたが、残存している床面からはピットは検出できなかった。しかし、幅10～20cm、深さ最大4.4cmの壁溝が床面を全周していること、掘り込みの深さと遺構の形状から竪穴住居跡と判断している。

埋土は７層に分けられる。中層のごく一部に焼土粒が見られるが、本住居廃絶後に褐色系の土が自然堆積したものと考えられる。

遺物は中層から多く出土した。床面付近から出土した38をはじめ、36・37・39のいずれも甕口縁部を図示した。

出土した遺物の特徴やSI21との切り合い関係から、SI27の廃絶時期は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）と推定される。（恩田）

SI22（第21・22図、PL.6・46・65）

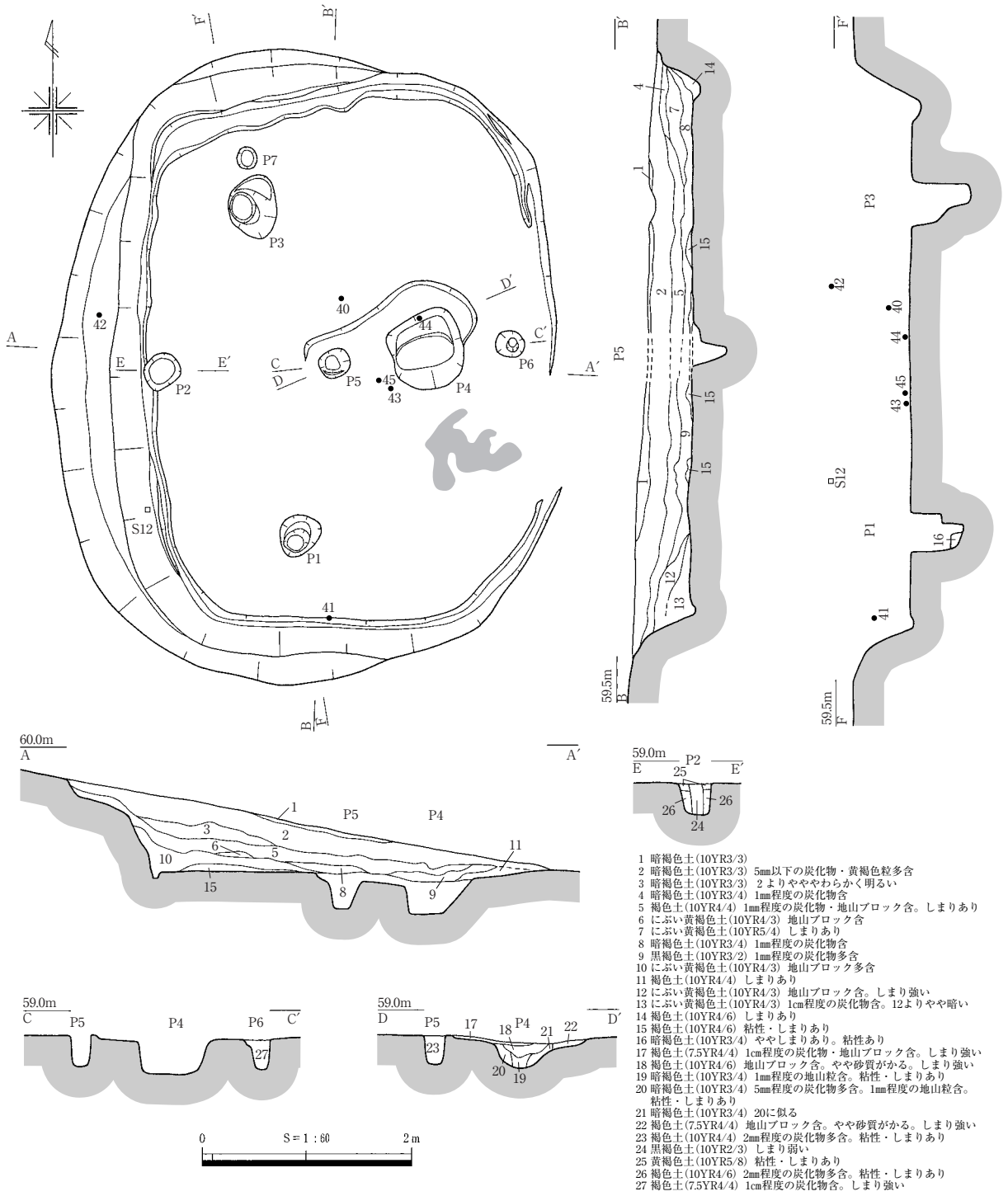
H23グリッド、標高59.7～58.7mの谷に向かう斜面に位置する。

長軸6.1m、短軸4.9mの南北に長い隅丸方形を呈し、西壁で深さ75cmを測る。西壁に接して幅30cmほどのテラス状の平坦面がある。谷側は壁と床面の一部が流失している。床面積は18.6㎡である。

壁溝は幅が15～30cmと一定しないが、深さ6cmの断面Ｕ字形で、流失している部分があるが本来は床面を全周していたものと思われる。

主柱穴はP1～P3を検出した。主柱間距離はP1－P2間が2.1m、P2－P3間が1.8mである。P2はそれ以外の主柱穴に比べ径が小さく、壁際に寄っている。中央ピットP4の位置からすると、本来は６本柱であった可能性が考えられるが、谷側に対応する柱穴が確認されなかったこともあり、異なる構造も考えられる。中央ピットの埋土は、中心部を除き5mm程度の炭化物を密に含んでいた。この東西両脇には径と深さが30cmほどのP5、P6があり、中央ピットに関連する補助的な機能が考えられる。中央ピットの南には、最大1mの不整形な範囲で被熱面が存在する。

埋土はピットを除き15層に細分できた。壁際から埋没しており、谷の傾斜に沿って堆積していることから、住居廃絶後、自然に埋もれたものと思われる。

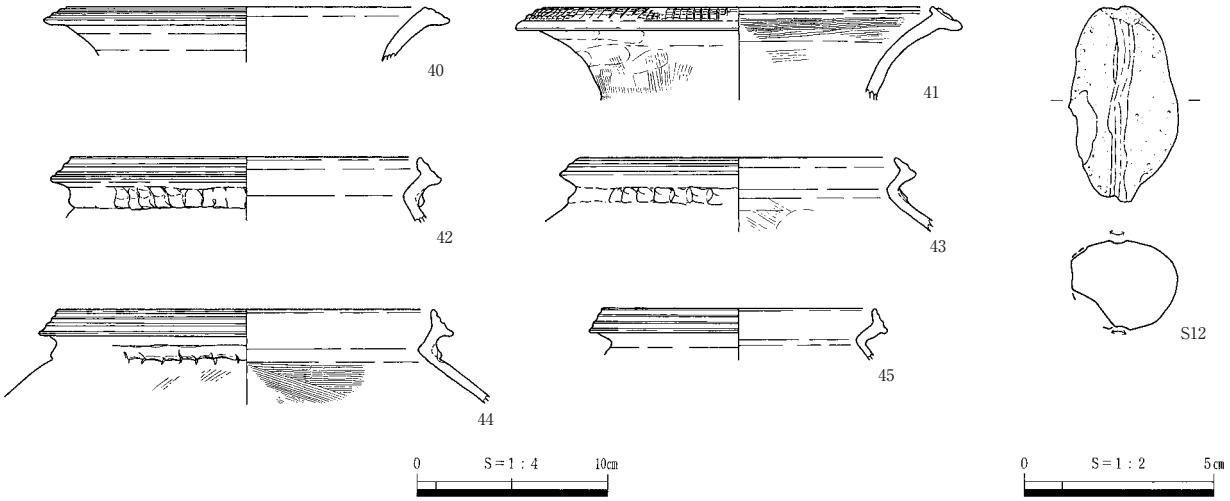


1 暗褐色土(10YR3/3)
2 暗褐色土(10YR3/3) 5mm以下の炭化物・黄褐色粒多含
3 暗褐色土(10YR3/3) 2よりややわらかく明るい
4 暗褐色土(10YR3/4) 1mm程度の炭化物含
5 褐色土(10YR4/4) 1mm程度の炭化物・地山ブロック含。しまりあり
6 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山ブロック含
7 にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまりあり
8 暗褐色土(10YR3/4) 1mm程度の炭化物含
9 黒褐色土(10YR3/2) 1mm程度の炭化物多含
10 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山ブロック多含
11 褐色土(10YR4/4) しまりあり
12 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 地山ブロック含。しまり強い
13 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 1cm程度の炭化物含。12よりやや暗い
14 褐色土(10YR4/6) しまりあり
15 褐色土(10YR4/6) 粘性・しまりあり
16 暗褐色土(10YR3/4) ややしまりあり。粘性あり
17 褐色土(7.5YR4/4) 1cm程度の炭化物・地山ブロック含。しまり強い
18 褐色土(10YR4/6) 地山ブロック含。やや砂質がかる。しまり強い
19 暗褐色土(10YR3/4) 1mm程度の地山粒含。粘性・しまりあり
20 暗褐色土(10YR3/4) 5mm程度の炭化物多含。1mm程度の地山粒含。粘性・しまりあり
21 暗褐色土(10YR3/4) 20に似る
22 褐色土(7.5YR4/4) 地山ブロック含。やや砂質がかる。しまり強い
23 褐色土(10YR4/4) 2mm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり
24 黒褐色土(10YR2/3) しまり弱い
25 黄褐色土(10YR5/8) 粘性・しまりあり
26 褐色土(10YR4/6) 2mm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり
27 褐色土(7.5YR4/4) 1cm程度の炭化物含。しまり強い

第21図　SI22

出土遺物を第22図に示した。42、S12は埋土上層の２層出土。それ以外は埋土中層から下層の出土である。40と41は広口壺で、41の口縁端部にはキザミが加えられている。甕は口縁端部がかなり拡張されている。頸部に施された貼付突帯を見ると、42･43は退化しており、44はかなり形骸化している。S12は砲弾形の小型礫の長軸に沿って紐かけ溝を巡らせた石錘。

口縁端部の拡張が大きいことや、貼付突帯の状況など、埋土下層出土遺物の特徴から、本遺構は弥生時代中期後葉(Ⅳ－2からⅣ－3)に位置づけられる。　(湯村)



第22図　SI22出土遺物

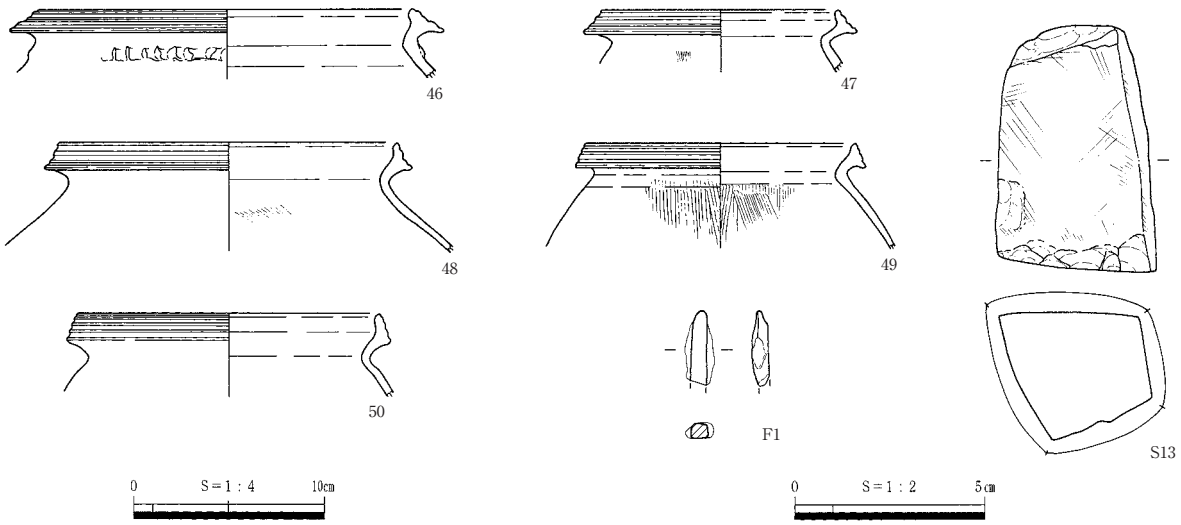
SI23（第23・24図、PL.6・7・46・66・70）

J23グリッド、西尾根から北西に向かって下がる標高61.5m付近の緩斜面地に位置する。南にSI25、南西にはSI31が近接する。

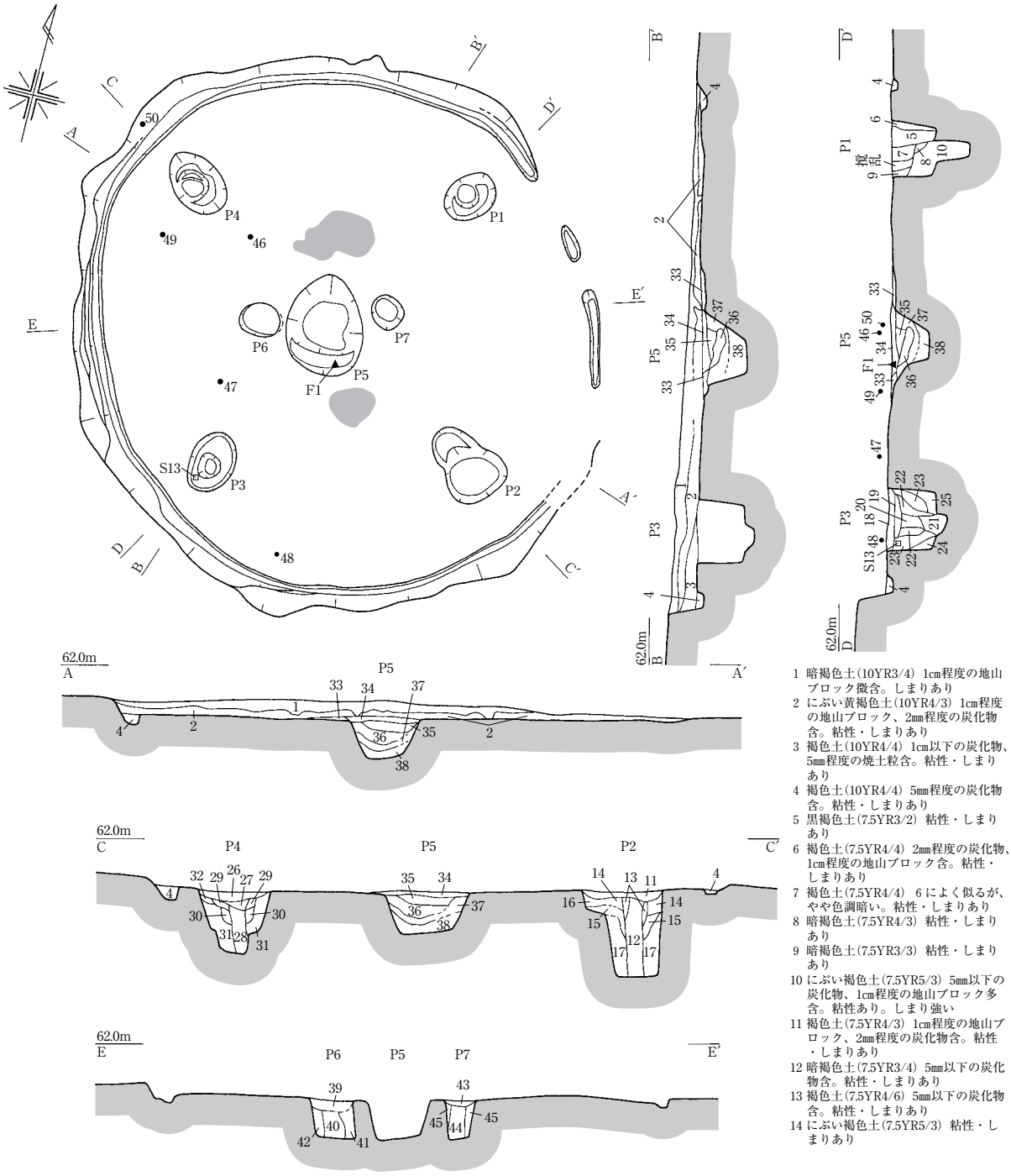
西側の壁の一部は流失していたが、平面形は直径5.1mの円形に復元できる。床面積は19.6㎡、残存部での最大の深さは24cmである。

床面では、壁溝１条、ピット７基、被熱面２ヶ所を確認した。貼床は認められない。

壁溝は、本来は全周していたものと考える。幅6～14cm、断面は逆台形で、床面からの深さ約6～12cmである。主柱穴はP1～P4で、壁から約70cm内側に位置する。柱配置から中央ピットP5を囲む４本柱が並ぶ建物であったと考える。主柱間距離は、P1－P2間から時計回りに2.7m、2.5m、2.6m、2.6mである。中央ピットP5を挟むように柱穴P6とP7が並ぶ。主柱穴に比べ若干浅い。両者間の距離は1.2mである。柱痕跡から推定される柱の直径は10～14cmである。中央ピットP5の規模は長軸96cm、短軸72cm、深さ40cm、平面楕円形で、断面は逆台形状である。P5の36、37層は炭化物を多く含み、36



第23図　SI23出土遺物



1 暗褐色土(10YR3/4) 1cm程度の地山ブロック微含。しまりあり
2 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 1cm程度の地山ブロック、2mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
3 褐色土(10YR4/4) 1cm以下の炭化物、5mm程度の焼土粒含。粘性・しまりあり
4 褐色土(10YR4/4) 5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
5 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性・しまりあり
6 褐色土(7.5YR4/4) 2mm程度の炭化物、1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
7 褐色土(7.5YR4/4) 6によく似るが、やや色調暗い。粘性・しまりあり
8 暗褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
9 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性・しまりあり
10 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 5mm以下の炭化物、1cm程度の地山ブロック多含。粘性あり。しまり強い
11 褐色土(7.5YR4/3) 1cm程度の地山ブロック、2mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
12 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm以下の炭化物含。粘性・しまりあり
13 褐色土(7.5YR4/6) 5mm以下の炭化物含。粘性・しまりあり
14 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 粘性・しまりあり
15 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
16 褐色土(7.5YR4/4) 1cm程度の地山ブロック、2mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
17 褐色土(7.5YR4/3) 2mm程度の炭化物含。しまり強い
18 褐色土(7.5YR4/3) 2cm程度の地山ブロック、2mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりあり
19 褐色土(7.5YR4/6) 18によく似るが、やや明るめ
20 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性・しまりあり
21 暗褐色土(7.5YR3/3) 1cm程度の炭化物を含む。粘性あり。しまりなし
22 暗褐色土(7.5YR3/3) 5mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりあり
23 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 粘性・しまりあり
24 明褐色土(7.5YR5/6) 粘性・しまりあり
25 明褐色土(7.5YR5/6) 24よりやや色調暗い。粘性・しまりあり
26 褐色土(7.5YR4/6) 2mm程度の炭化物、1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
27 暗褐色土(7.5YR3/4) 1cm程度の炭化物、2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
28 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の地山粒含。粘性あり。しまりない
29 褐色土(7.5YR4/3) 2mm程度の炭化物、1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
30 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 粘性・しまりあり
31 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 30に似るが、3cm程度の地山ブロック多含。2mm程度の炭化物含
32 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 30に似るが、5mm程度の炭化物含。しまりが強い
33 明褐色土(7.5YR5/6) 1cm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり
34 褐色土(7.5YR4/6) 1cm以下の炭化物多含。粘性・しまりあり
35 褐色土(7.5YR4/3) 2mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりあり
36 暗褐色土(7.5YR3/4) 1mm程度の炭化物、2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
37 暗褐色土(7.5YR3/3) 5mm程度の炭化物・焼土粒多含。粘性・しまりあり
38 黒褐色土(7.5YR3/2) 5mm程度の炭化物多含。粘性あり。やわらかい
39 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の炭化物、5mm以下の地山粒を含。粘性・しまりあり
40 褐色土(7.5YR4/4) 1mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
41 暗褐色土(7.5YR3/4) 1mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
42 暗褐色土(7.5YR3/4) 41に類似するが、やや色調が暗く、やわらかい
43 暗褐色土(7.5YR3/4) 1mm程度の炭化物・地山粒多含。粘性・しまりあり
44 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
45 暗褐色土(7.5YR3/3) 1mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり

0　S＝1：60　2m

第24図　SI23

層中には焼土粒も顕著である。被熱面はP5北側と南側にある。

埋土は、壁際や床に褐色土や黄褐色土が堆積し、最後に暗褐色土が全体を覆う。自然堆積による埋没と考える。

図化した遺物は土器46～50、鉄器F1、石器S13である。土器は甕である。いずれも、口縁部外面に３～４条の凹線をもち、頸部内面にヘラケズリは認められないことから、弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）に比定される。46は頸部に貼付突帯をもつ。鉄器F1は中央ピットP5からの出土で、断面長方形状の棒状鉄器である。S13はP3から出土の砥石で、４面全てに使用痕がある。

遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）と考える。　（長尾）

SI25（第25・26図、PL.6・7・43・46・64・66・70）

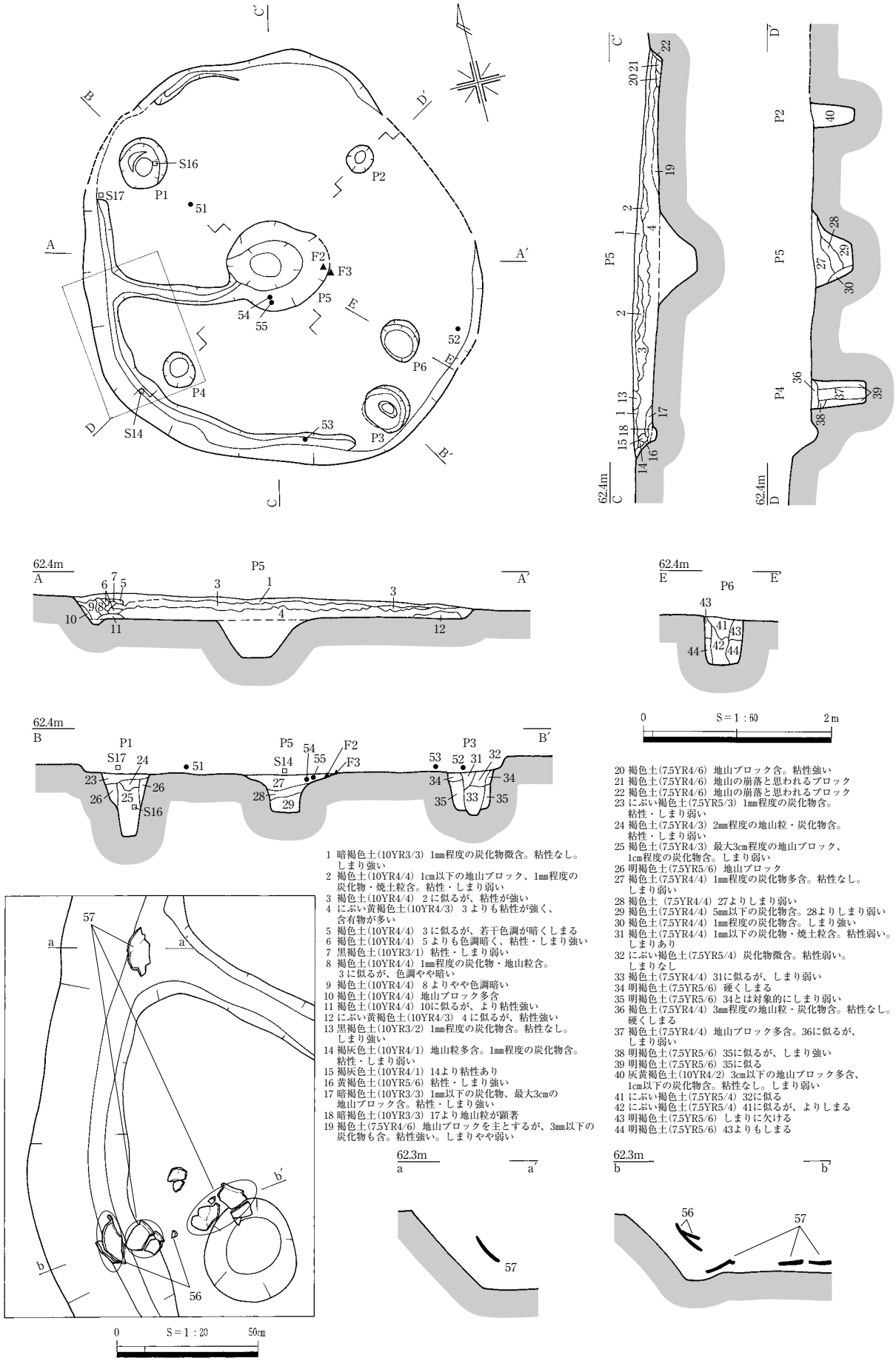
J24グリッド、西側尾根から東に向かって下がる標高62m付近の緩斜面地に位置する。北西側をSI28に切られ、北東側は木根によって壁の一部が失われている。北にSI23、西にはSI31が近接する。平面形は長軸4.4m、短軸4.3mの隅丸方形であるが、東壁面では平面の形状がわずかに東側へ突出している。床面積は14㎡、深さは最大25㎝である。

床面からは、壁溝１条、床溝１条、ピット６基を検出した。被熱面や貼床は認められない。

壁溝は住居の西側にのみ認められC字状を呈す。幅10㎝、断面はU字形、床面からの深さ約5㎝である。壁溝からは東に向かって幅約15㎝の床溝が１条延び、P1－P4間のほぼ中間を通って中央ピットP5に連結する。主柱穴と考えられるのはP1～P4及びP6で、P1、P2、P4、P6は壁際から約50㎝内側、P3は30㎝内側に位置する。柱配置から、中央ピットP5を囲むように４本柱が並んでいたと考える。P3とP6は、位置が近接し、深さなど類似する点から建て替えを想定するものであるが、両者の前後関係は明確でない。主柱間距離は、P3が壁寄りにあるためにP2－P3間の距離は長くなっている。P1－P2間が2.3m、P2－P3間が2.7m、P3－P4間が2.3m、P4－P1間が2.2m、P2－P6間が2.0m、P6－P4間が2.4mである。柱痕跡から推定される柱の直径は10～20㎝である。中央ピットP5の規模は長軸1.1m、短軸95㎝、深さ40㎝、平面楕円形、断面は逆台形状である。床の被熱面や貼床は検出していない。

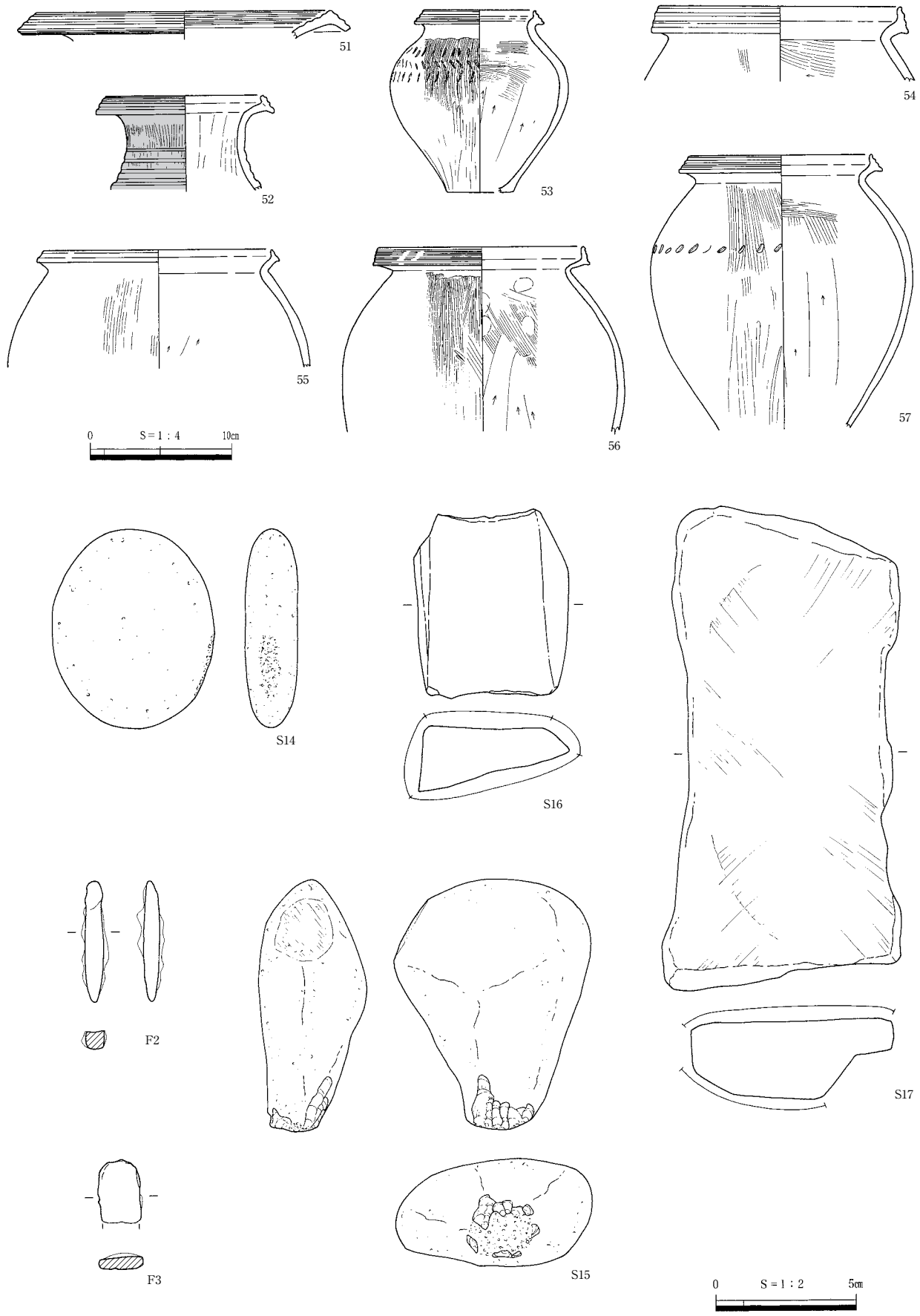
埋土は、下から順に黄褐色土層、褐色土層がほぼ水平に堆積し、壁の崩落土と考えられる21、22層や地山ブロックを含む土が壁際に流れ込むように堆積した後に暗褐色土層が全体を覆う。これらの状況から本住居は自然堆積によって埋没したものと考える。

図化した遺物には土器、石器、鉄器があり、床面から埋土下層の出土である。51・52は壺である。51は広口壺。52は外面赤彩の長頸壺で頸部に４条の凹線が施されている。53は床面直上出土の小型の壺。内面は底部から体部下半2/3までヘラケズリにより調整される。外面の体部上半には連続する刺突が３段巡る。これらの刺突は１段ごとに向きを変えて施されている。54～57は甕である。このうち、56・57は、住居南東部では壁際から床面にかけて出土しており、比較的大ぶりな破片で検出した。いずれも内面の調整は体部下半から2/3までヘラケズリが及び、口縁外面には３～４条の凹線が施されている。これらの特徴は、弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）に位置づけられる。出土石器のうち、S14・S15は敲石で、S15は磨石としても利用されている。S16・17は砥石である。鉄器は中央ピット上層から棒状鉄器F2と板状鉄器F3が出土している。遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）と考える。　（長尾）



1 暗褐色土(10YR3/3) 1mm程度の炭化物微含。粘性なし。しまり強い
2 褐色土(10YR4/4) 1cm以下の地山ブロック、1mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性・しまり弱い
3 褐色土(10YR4/4) 2に似るが、粘性が強い
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3よりも粘性が強く、含有物が多い
5 褐色土(10YR4/4) 3に似るが、若干色調が暗くしまる
6 褐色土(10YR4/4) 5よりも色調暗く、粘性・しまり強い
7 黒褐色土(10YR3/1) 粘性・しまり弱い
8 褐色土(10YR4/4) 1mm程度の炭化物・地山粒含。3に似るが、色調やや暗い
9 褐色土(10YR4/4) 8よりやや色調暗い
10 褐色土(10YR4/4) 地山ブロック多含
11 褐色土(10YR4/4) 10に似るが、より粘性強い
12 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 4に似るが、粘性強い
13 黒褐色土(10YR3/2) 1mm程度の炭化物含。粘性なし。しまり強い
14 褐灰色土(10YR4/1) 地山粒多含。1mm程度の炭化物含。粘性・しまり弱い
15 褐灰色土(10YR4/1) 14より粘性あり
16 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまり強い
17 暗褐色土(10YR3/3) 1mm以下の炭化物、最大3cmの地山ブロック含。粘性・しまり強い
18 暗褐色土(10YR3/3) 17より地山粒が顕著
19 褐色土(7.5YR4/6) 地山ブロックを主とするが、3mm以下の炭化物も含。粘性強い。しまりやや弱い
20 褐色土(7.5YR4/6) 地山ブロック含。粘性強い
21 褐色土(7.5YR4/6) 地山の崩落と思われるブロック
22 褐色土(7.5YR4/6) 地山の崩落と思われるブロック
23 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 1mm程度の炭化物含。粘性・しまり弱い
24 褐色土(7.5YR4/3) 2mm程度の地山粒・炭化物含。粘性・しまり弱い
25 褐色土(7.5YR4/3) 最大3cm程度の地山ブロック、1cm程度の炭化物含。しまり弱い
26 明褐色土(7.5YR5/6) 地山ブロック
27 褐色土(7.5YR4/4) 1mm程度の炭化物多含。粘性なし。しまり弱い
28 褐色土 (7.5YR4/4) 27よりしまり弱い
29 褐色土(7.5YR4/4) 5mm以下の炭化物含。28よりしまり弱い
30 褐色土(7.5YR4/4) 1mm程度の炭化物含。しまり強い
31 褐色土(7.5YR4/4) 1mm以下の炭化物・焼土粒含。粘性弱い。しまりあり
32 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 炭化物微含。粘性弱い。しまりなし
33 褐色土(7.5YR4/4) 31に似るが、しまり弱い
34 明褐色土(7.5YR5/6) 硬くしまる
35 明褐色土(7.5YR5/6) 34とは対象的にしまり弱い
36 褐色土(7.5YR4/4) 3mm程度の地山粒・炭化物含。粘性なし。硬くしまる
37 褐色土(7.5YR4/4) 地山ブロック多含。36に似るが、しまり弱い
38 明褐色土(7.5YR5/6) 35に似るが、しまり強い
39 明褐色土(7.5YR5/6) 35に似る
40 灰黄褐色土(10YR4/2) 3cm以下の地山ブロック多含、1cm以下の炭化物含。粘性なし。しまり弱い
41 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 32に似る
42 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 41に似るが、よりしまる
43 明褐色土(7.5YR5/6) しまりに欠ける
44 明褐色土(7.5YR5/6) 43よりもしまる

第25図　SI25



第26図　SI25出土遺物

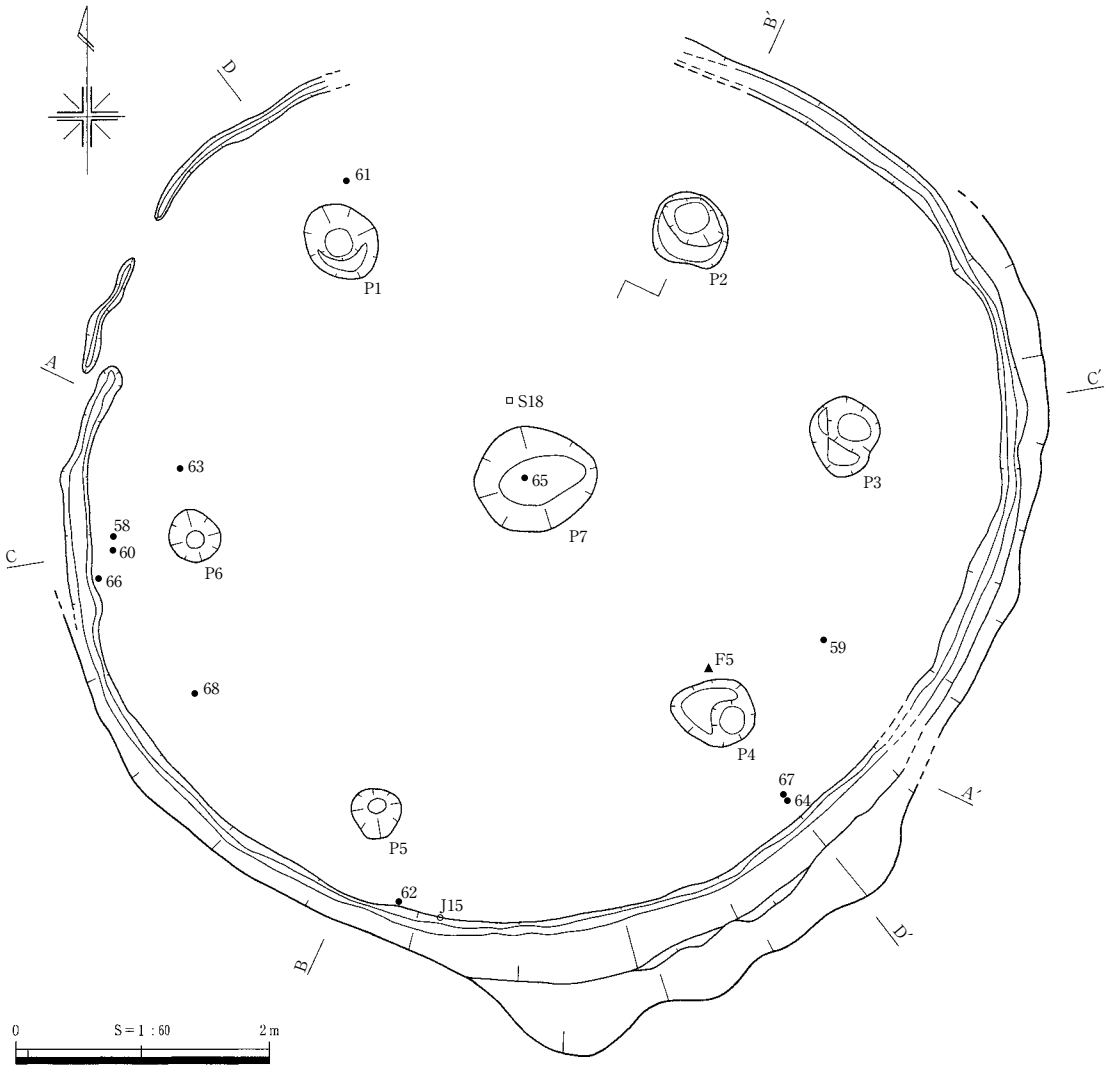
SI26（第27～29図、PL.8・44・47・63・64・66・67・70）

F27グリッド、標高62～62.7mの東尾根緩斜面に位置する。

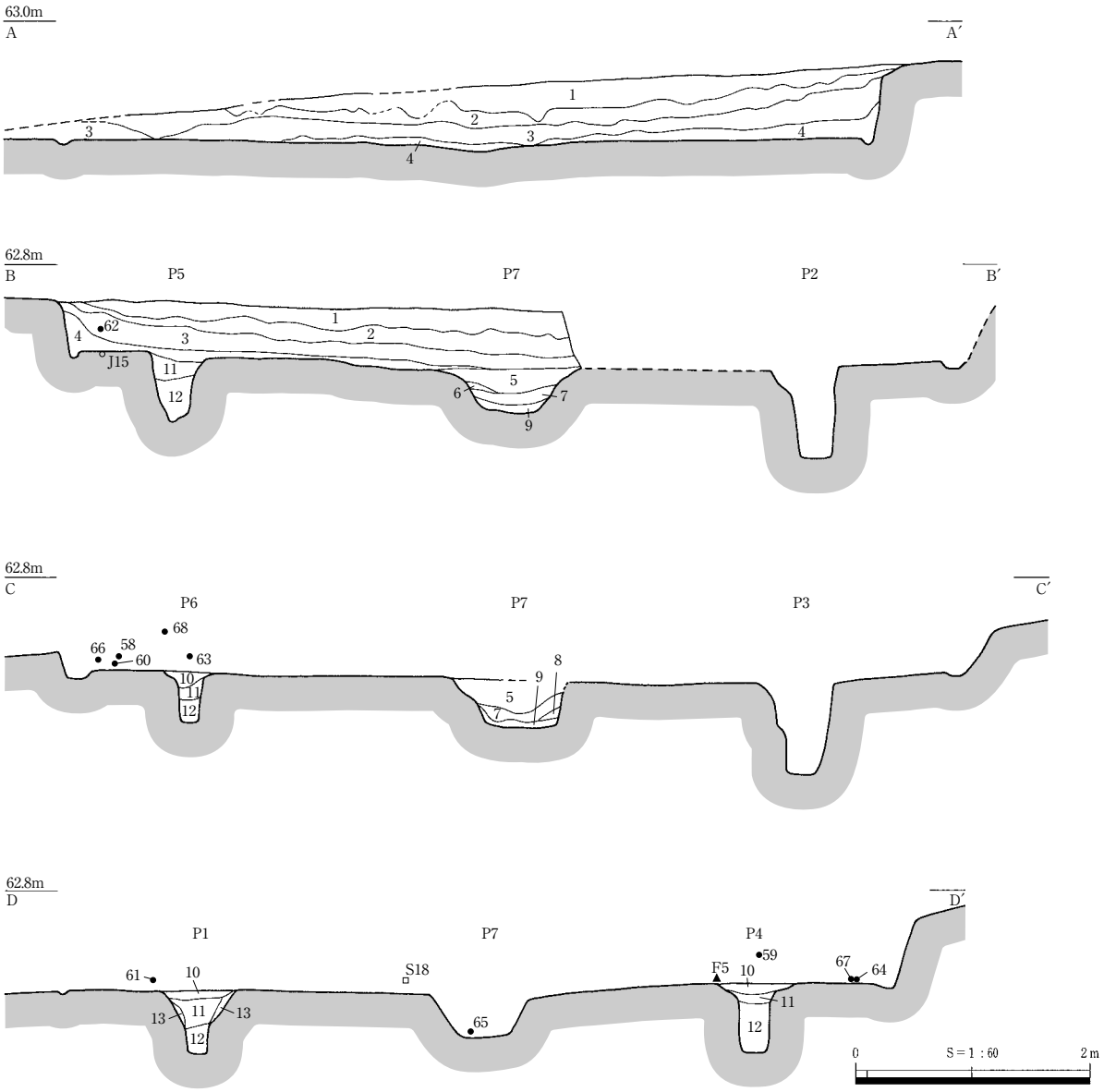
本遺構は、平成17年度調査において、SI2として報告したものである。その際、ひとつの住居跡として捉え、遺構内での建て替えの可能性を示唆したが、本年度の調査において竪穴住居が２棟切りあうことが判明した。切り合い関係から、新しいものをSI26、古いものをSI38とし調査をおこなった。

平面形は円形を呈し、長軸7.9m、短軸7.4m、深さは南東側で最大70cmを測る。床面積は44.3㎡である。壁溝は断面U字形で幅10～20cm、深さは最大6～10cmを測るが全周せず、住居北西側で途切れる。主柱穴はP1～P6の６本柱である。P1－P2間から時計回りの順に2.7m、2.1m、2.5m、2.9m、2.6m、2.6mを測る。P1はSI38に伴う被熱面を切っており、SI26が新しいことの根拠となっている。埋土は大きく４層に分けられ、地形の傾斜に沿うように南東から北西に向けて堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。基本層序13層を床面としているが、西側の一部で基本層序８層相当層を床面とする。

遺物は１、２層で多く認められ、埋土下層から床面かけての遺物は少なかった。65は、P7の最下層



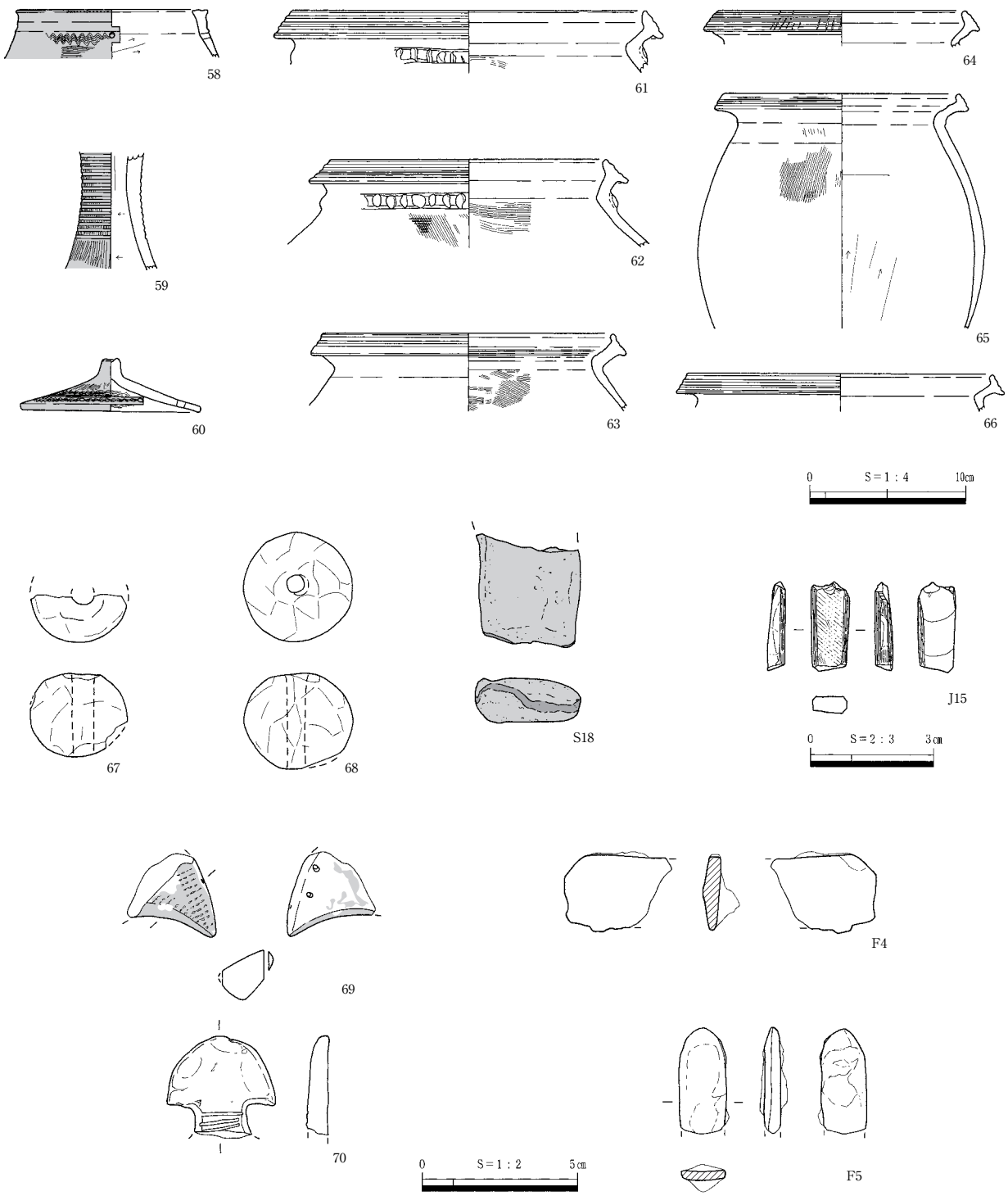
第27図　SI26（1）



1 暗褐色土(10YR3/3) 1cm以下の炭化物、5mm程度の焼土粒多含。粘性・しまり弱い
2 褐色土(10YR4/4) 1に似るがしまり強い
3 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック多含。2cm以下の炭化物、5mm程度の焼土粒含。粘性・しまりあり
4 褐色土(10YR4/6) 2cm以下の地山ブロック、1cm以下の炭化物多含。粘性・しまりあり
5 暗褐色土(10YR3/4) 5mm程度の炭化物、5mm以下の地山粒少含
6 暗褐色土(10YR3/3) 粘性・しまり弱い
7 暗褐色土(10YR3/4) 2cm程度の地山ブロック少含。粘性・しまりあり
8 暗褐色土(10YR3/4) 1cm以下の炭化物微含。粘性弱い。しまりあり
9 暗褐色土(10YR3/3) 1cm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり
10 褐色土(10YR4/6) 2cm以下の地山ブロック、1cm以下の炭化物多含。粘性・しまりあり
11 暗褐色土(10YR3/4) 2cm以下の地山ブロック多含。5mm程度の炭化物少含
12 暗褐色土(10YR3/4) 11に似るが若干しまりが弱い
13 褐色土(7.5YR4/6) 粘性・しまりあり

第28図　SI26(2)

(９層)で出土した甕で、墳丘墓のP3掘り方埋土中から出土した土器と接合した。58～60は２～３層出土の赤彩された土器である。67は床面で出土した。69・70は分銅形土製品で、南西側の埋土中から出土した。本遺跡から出土した分銅形土製品はSI26のほか、近接する３区SI1、SI4をはじめ東尾根西斜面から谷にかけて出土しており、東西両尾根の性格の違いの一端を示していると思われ興味深い。J15は擦り切り溝が残る緑色凝灰岩製の管玉素材で、南側壁溝埋土から出土した。F5はヤリガンナ、F4は板状鉄器片である。以上の出土遺物から、本遺構は弥生時代中期後葉(Ⅳ－2からⅣ－3)に位置づけられる。　(岩垣)

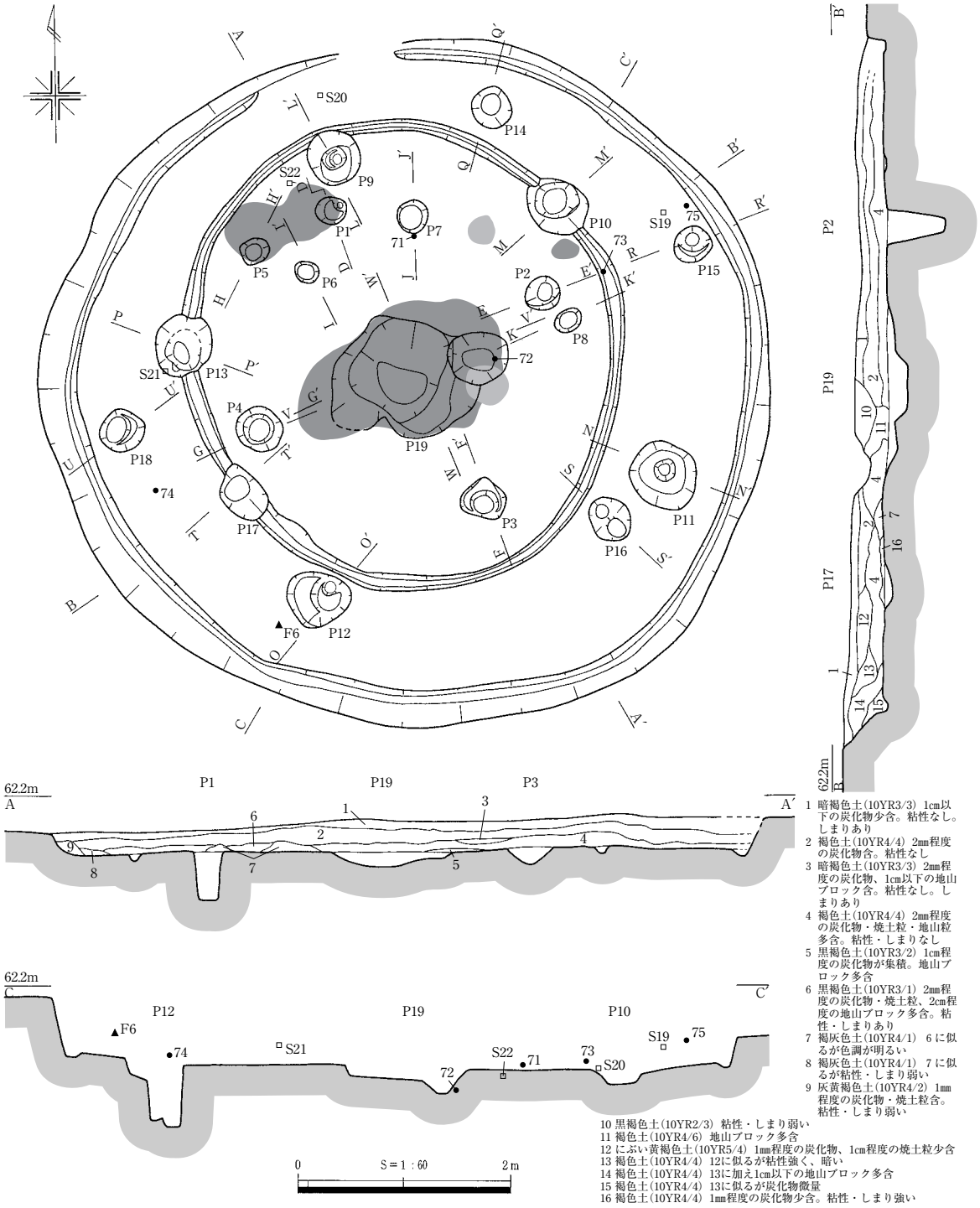


第29図　SI26出土遺物

SI28（第30～32図、PL.9・44・64・66・70）

J23からJ24グリッドに位置する。ここは標高62m前後を測る西尾根北側の平坦面にあたり、弥生時代の住居跡が密集している。本遺構もSI25とSI31を切っている。

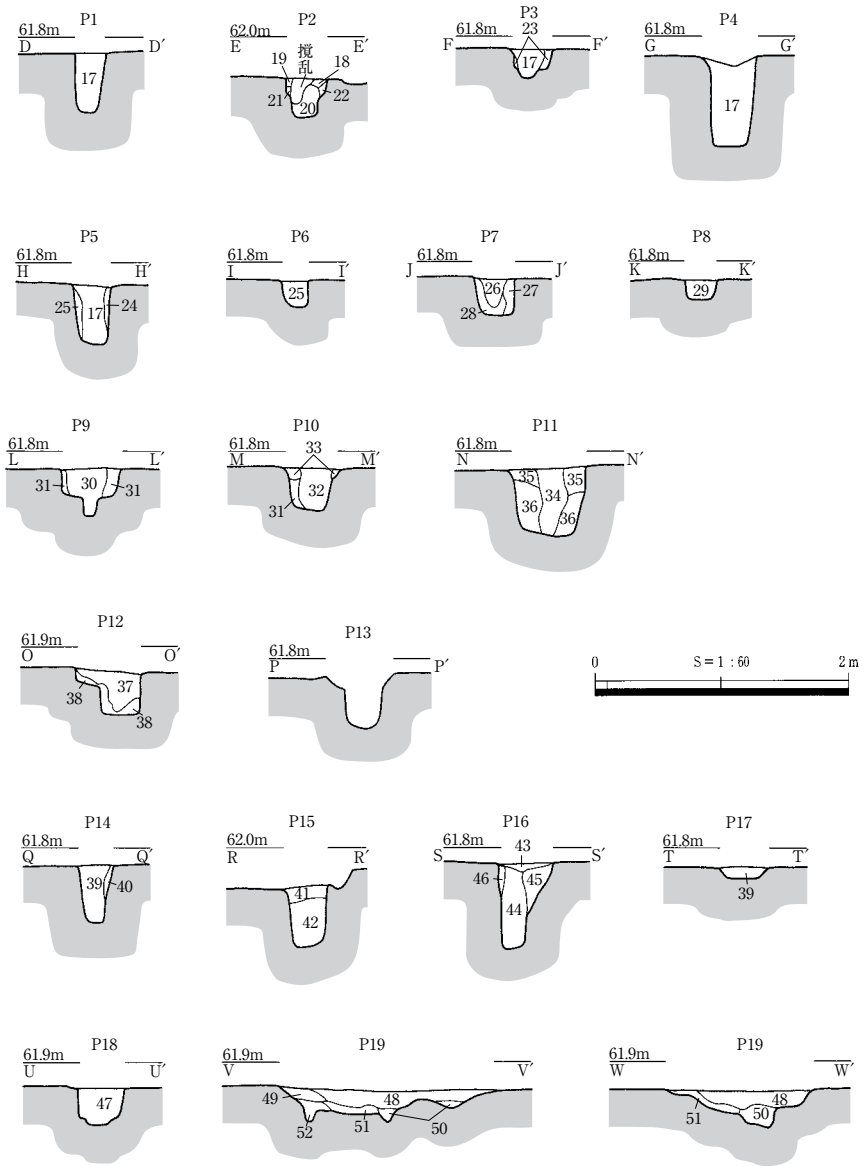
床面精査の段階で２条に巡る壁溝を検出し検討を行ったところ、中央ピットを共有していることから建て替えが行われたと判断した。加えて内側に巡る壁溝を主柱穴としてよいピットが切っていたことから、拡張されたものと判断した。以下、建て替え前をSI28a、建て替え後をSI28bとして記述する。



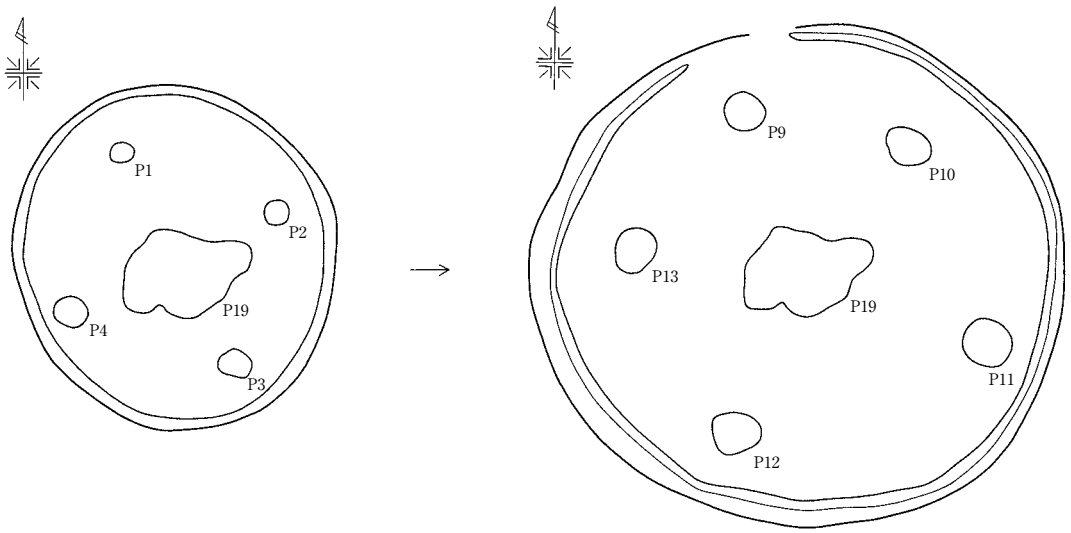
第30図　SI28(1)

SI28a　検出した壁溝の規模で、長軸4.5m、短軸4.2mのほぼ正円形である。床面積は14.3㎡である。

壁溝は幅10～18㎝、深さ6～8㎝を測る。主柱穴は規模や位置関係からP1～P4の４本柱と考えられる。いずれも建て替えに伴い抜き取られたためか、柱痕跡は認められなかった。主柱間距離はP1－P2間から時計回りに2.2m、2.2m、2.4m、2.3mである。中央ピットP19は長軸1.8m、短軸1.36m、深さ30㎝を測り皿形の掘り込みとなっている。SI28aの中央ピットとしては大きく、建て替え後に掘り直された可能性がある。埋土にはおおむね炭化物が認められたが、底面の51層は炭化物の集積といってよく、炭化材と思われる小片も含まれていた。床面には２ヶ所の小規模な被熱面が確認されたが、どの

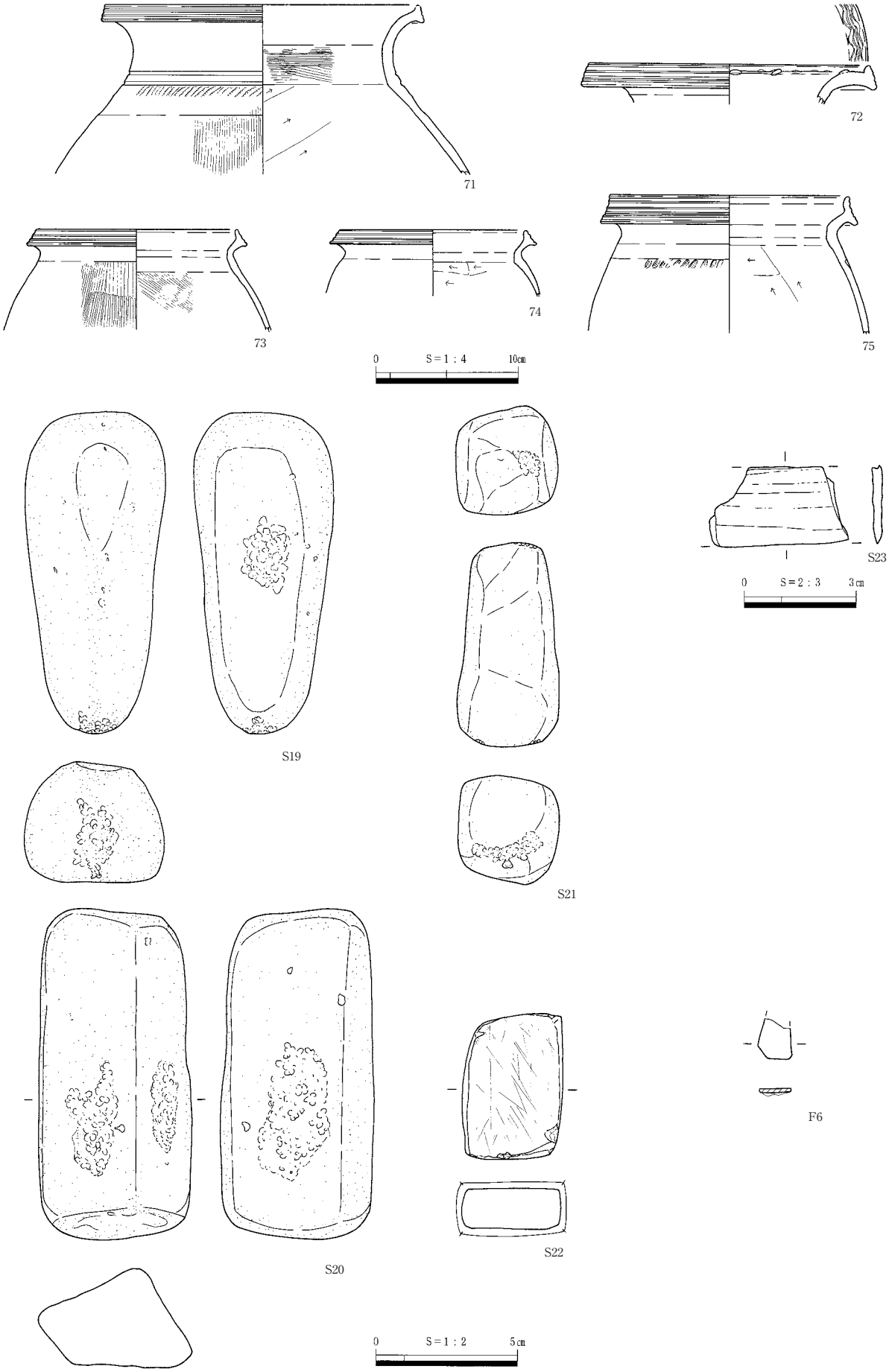


17 褐色土(7.5YR4/6) 5mm以下の炭化物・地山粒含。粘性・しまりあり
18 褐色土(10YR4/6) 含有物なし。しまり強い
19 褐色土(7.5YR4/6) 5mm程度の地山ブロック含
20 褐色土(7.5YR4/6) 地山ブロック多含。しまり強い
21 褐色土(7.5YR4/6) 微細な炭化物含。粘性強い
22 明褐色土(7.5YR5/6) 含有物なし
23 明褐色土(7.5YR5/6) 粘性あり。しまり強い
24 灰褐色土(7.5YR4/2) 3mm以下の炭化物少含。粘性あり。しまり弱い
25 褐色土(10YR4/6) 1cm以下の地山ブロック含
26 褐色土(10YR4/4) 含有物なし
27 褐色土(7.5YR4/6) 含有物なし。粘性弱い
28 褐色土(7.5YR4/6) 27に似るがしまり弱い
29 褐色土(7.5YR4/6) 微細な炭化物含。しまり強い
30 褐色土(10YR4/6) 2mm以下の炭化物少含
31 褐色土(7.5YR4/6) 含有物なし。粘性弱い
32 褐色土(10YR4/4) 地山ブロック多含。下半部に2mm以下の炭化物少含
33 褐色土(10YR4/4) 1mm程度の炭化物少含。粘性弱い。しまり強い
34 褐色土(7.5YR4/6) 2mm程度の炭化物含。粘性あり。しまり強い
35 褐色土(7.5YR4/6) 1mm以下の炭化物、5mm程度の地山粒含
36 褐色土(7.5YR4/6) 35に似るが粘性が強い
37 褐色土(10YR4/4) 2mm以下の炭化物含。粘性あり。しまり強い
38 褐色土(7.5YR4/6) 微細な炭化物含。粘性あり。しまり強い
39 褐色土(7.5YR4/6) 5mm以下の炭化物・地山粒含。粘性あり。しまり強い
40 明褐色土(7.5YR5/6) 粘性あり。しまり強い
41 褐色土(10YR4/6) 5mm以下の炭化物・焼土粒少含。砂質がかる
42 褐色土(10YR4/6) 地山ブロック多含。しまり強い
43 褐色土(10YR4/6) 含有物なし。粘性あり
44 褐色土(10YR4/4) 2mm程度の炭化物多含。しまり弱い
45 褐色土(7.5YR4/6) 1mm程度の炭化物少含。しまり強い
46 明褐色土(7.5YR5/8) 含有物なし。粘性あり
47 褐色土(7.5YR4/6) 1mm程度の炭化物少含。しまり強い
48 褐色土(10YR4/6) 3mm程度の炭化物、5mm程度の地山粒含。粘性あり。しまり強い
49 褐色土(10YR4/4) 5mm程度の地山粒少含。しまり弱い
50 暗褐色土(10YR3/4) 3mm以下の炭化物含。粘性あり。しまり強い
51 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物の集積。炭化材含
52 褐色土(7.5YR4/6) 含有物なし。しまり強い



SI28変遷模式図

第31図　SI28(2)



第32図　SI28出土遺物

段階のものかは不明である。

SI28b　長軸6.8m、短軸6.7mのほぼ正円形である。深さは南西壁面で最大50cmを測り、床面積は32.8㎡である。壁溝は壁に接して掘られており、北側で途切れているが、ほぼ全周する。溝底面の幅は最大で10cm、深さは5cm程度である。主柱穴はP9～P13の５本柱で、P11とP12を除きSI28aの壁溝を切っている。またP9～P11では柱痕跡と裏込め土が認識できた。主柱間距離はP9－P10間から時計回りに2.1m、2.7m、3.4m、2.6m、2.4mである。床面で確認された炭化物の集積範囲のうち北西に位置するものは、SI28aに伴うP1とP5を覆っていたため、建て替え後に残されたものと思われる。

埋土はいくつかに細分されるものの、住居全体を覆うのは１、２、４層である。いずれも住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物は埋土中から床面にかけて出土している。71はあまり広くない口縁端部に３条の凹線文が施された壺である。頸部には２条の凹線文と連続する刺突文を巡らし、内面頸部直下にケズリが及ぶ。ほぼ床面から出土。72は広口壺。口縁部内面を波状文と円形浮文で飾る。中央ピット埋土中から出土した。73～75は上下に拡張され内傾する口縁端部に凹線文が施される甕。74と75は内面のケズリが頸部直下に及ぶ。

S19～21は棒状の亜角礫を用いた敲石。先端部あるいは器体中央付近に敲打痕を残す。S22は砥石、S23は片岩と思われる石材の石鋸である。S20、S22が床面の出土。F6は板状の鉄器である。

中央ピットから出土した72は弥生時代中期後葉に遡るものだが、床面に近いレベルから出土した71をSI28の時期を示すものと考え、弥生時代後期初頭（Ⅴ－1）と位置づける。SI28は４本柱の住居SI28aから、ひとまわり大きな５本柱の住居SI28bへと建て替えられているが、中央ピットを共有しており、両者に時間差はほとんどないと思われる。（湯村）

SI29（第92図、PL.29）

J23からJ24グリッド、西尾根から東に向かって下がる標高62m付近の斜面地に位置する。古墳時代前期中葉のSI24に切られ、その大部分が失われている。弥生時代中期後葉の貯蔵穴SK115と近接する。

本遺構では壁溝やピットなどは確認されておらず、時期を推測できる遺物も出土していないが、残存部分から推定される平面形および規模から弥生時代の竪穴住居跡として報告する。

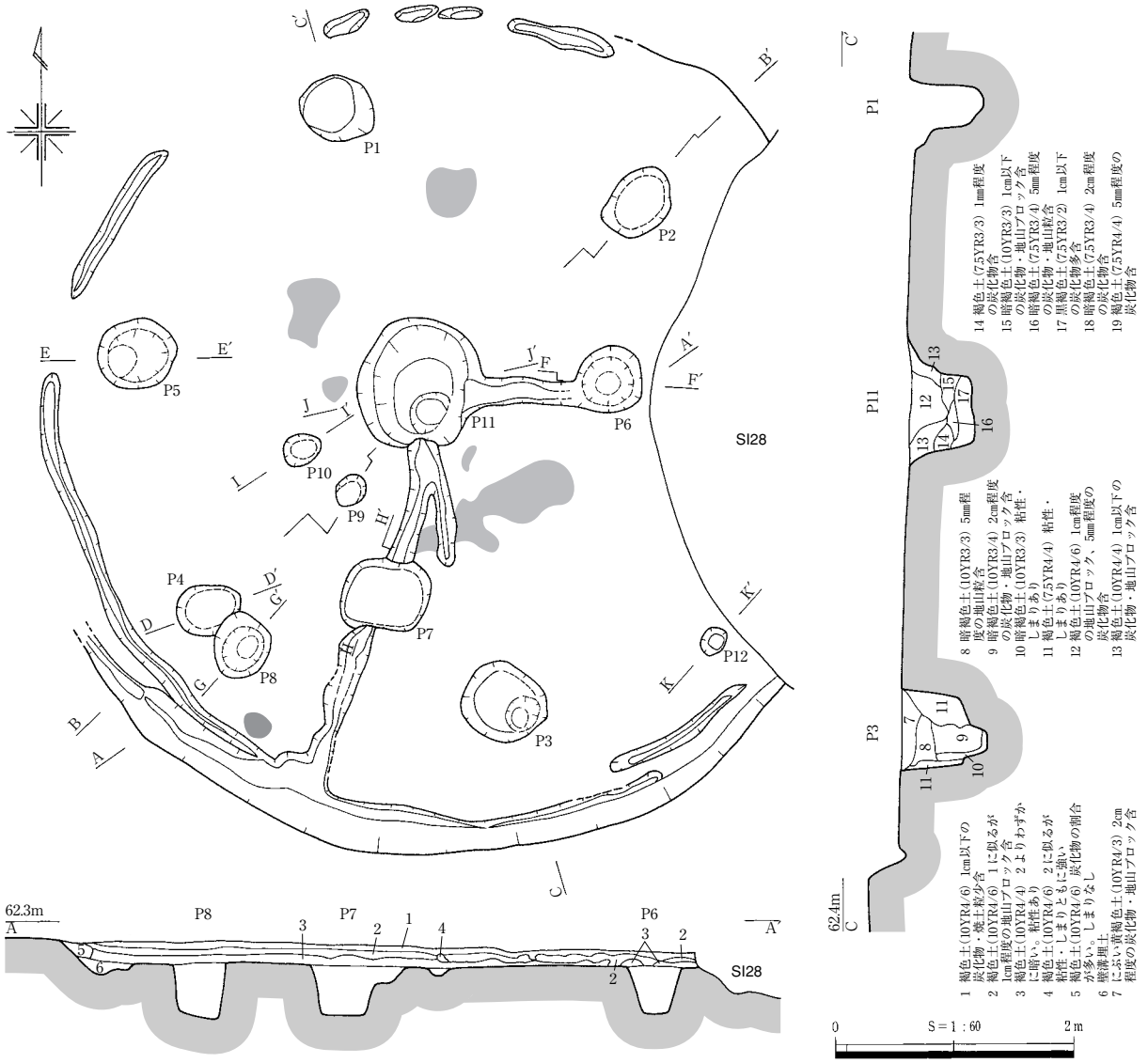
推定される平面形は長軸3.8m程度の隅丸方形である。残存部分の深さは約80cmである。

埋土は褐色土と灰褐色土の２層に大きく分かれ、いずれも締まった土質である。遺物はほとんど出土しておらず、短期間に埋没した可能性が高い。（長尾）

SI31（第33・34図、PL.10・44・66）

K23からK24グリッドに位置し、SI28に東壁を切られる住居跡である。北側から西側に向かう緩斜面に立地するため、北壁から西壁にかけては流失しており、この部分は壁溝を検出したにすぎない。残りのよかった南壁で深さ25cm程である。住居の規模は径7m程度の円形と推定され、床面積は38.6㎡程度と考えられる。

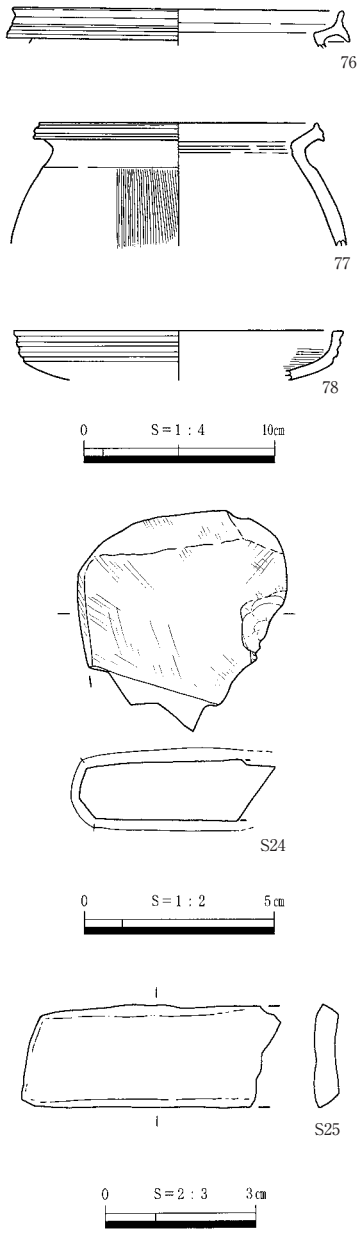
壁溝は幅15cm、深さ5cm程度で、流失している箇所は痕跡的に検出したのみだが、本来は全周していたものと思われる。主柱穴はP1～P5を確認したが、SI28に切られる部分にもう１本あったものと


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
SI28
62.3m
62.4m
S＝1：60
0
2m
1 褐色土(10YR4/6) 1cm以下の炭化物・焼土粒少含
2 褐色土(10YR4/6) 1に似るが1cm程度の地山ブロック含
3 褐色土(10YR4/4) 2よりわずかに暗い、粘性あり
4 褐色土(10YR4/6) 2に似るが粘性・しまりともに強い
5 褐色土(10YR4/6) 炭化物の割合が多い。しまりなし
6 壁焼土
7 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2cm程度の炭化物・地山ブロック含
8 暗褐色土(10YR3/3) 5mm程度の地山粒含
9 暗褐色土(10YR3/4) 2cm程度の炭化物・地山ブロック含
10 暗褐色土(10YR3/3) 粘性・しまりあり
11 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
12 褐色土(10YR4/6) 1cm程度の地山ブロック、5mm程度の炭化物含
13 褐色土(10YR4/4) 1cm以下の炭化物・地山ブロック含
14 褐色土(7.5YR3/3) 1mm程度の炭化物含
15 暗褐色土(10YR3/3) 1cm以下の炭化物・地山ブロック含
16 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の炭化物・地山粒含
17 黒褐色土(7.5YR3/2) 1cm以下の炭化物多含
18 暗褐色土(7.5YR3/4) 2cm程度の炭化物含
19 褐色土(7.5YR4/4) 5mm程度の炭化物含
20 黒褐色土(10YR3/2) 5mm程度の炭化物、1cm程度の地山ブロック多含
21 暗褐色土(10YR3/3) 粘性・しまりあり
22 褐色土(7.5YR4/4) 3cm程度の地山ブロック含
23 褐色土(7.5YR4/4) 2mm程度の炭化物含
24 褐色土(7.5YR4/6) 粘性・しまりあり
25 褐色土(7.5YR4/4) 22に似るがやや柔らかい
26 褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
27 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性・しまりあり
28 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 2mm程度の炭化物含
29 褐色土(10YR4/4) 粘性・しまりあり
30 褐色土(10YR4/6) 粘性・しまりあり
31 暗褐色土(10YR3/4) 2cm程度の地山ブロック含
32 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
33 暗褐色土(10YR3/4) 2mm程度の炭化物、1cm程度の地山ブロック含
34 暗褐色土(10YR3/3) 2mm程度の炭化物多含
35 黒褐色土(10YR3/2) 1cm以下の炭化物多含。地山ブロック含
36 暗褐色土(10YR3/3) 粘性・しまりあり
37 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性弱い。しまりあり
38 褐色土(7.5YR4/4) 2cm程度の地山ブロック含
39 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性・しまりあり
40 褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
41 暗褐色土(10YR3/3) 2mm程度の炭化物含
42 暗褐色土(10YR3/4) 1cm程度の地山ブロック含
43 褐色土(7.5YR4/6) 粘性・しまりあり
44 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
45 暗褐色土(10YR3/4) 2mm程度の炭化物、5mm程度の地山粒含
46 黒褐色土(10YR3/2) 5mm程度の炭化物含
47 暗褐色土(10YR3/3) 粘性あり。しまり弱い
48 褐色土(7.5YR4/6) 粘性弱い。しまりあり
49 褐色土(7.5YR4/4) 2cm程度の地山ブロック含
50 褐色土(10YR4/4) 粘性・しまりあり
51 褐色土(7.5YR4/3) 50より暗い
52 褐色土(7.5YR4/3) 51より暗い
53 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
54 暗褐色土(7.5YR3/4) 2mm程度の炭化物含
55 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
56 褐色土(7.5YR4/3) 55より粘性強い
57 暗褐色土(10YR3/3) 1mm程度の炭化物含

第33図　SI31

思われ、本来は６本柱であったと想定される。断面を確認できなかったP1を除き、いずれも柱痕跡が明瞭であった。主柱間距離はP1－P2間から時計回りに2.8m、2.8m、2.3m、2.8mである。この住居跡を調査した際、柱穴の底面付近の地山が軟らかく、また黒色の細粒物が含まれており、これを炭化物と思い掘り進めたため、柱穴底面を掘りすぎる結果となった。現地で再検討を行い、柱痕跡が認められるまでが柱穴底面と確認し、平面図では底面を破線で示している。P6、P8にも柱痕跡が認められ、壁溝が南東及び南西部分で２重に巡ることもあり、建て替えの可能性も考えられる。中央ピットP11は径1.1m、深さ60cmを測る。埋土のすべてに炭化物が含まれるが、とくに最下層では顕著であった。中央ピットからP6及び南西壁に向かって、幅20cm、深さ最大で10cm程度の床溝が延びている。また中央ピットの南西に近接して、長軸30cm、短軸20cm程度の小ピットP9、P10がある。小型ではあるが深さは50cm程あり、柱痕跡も見られる。補助的な機能を持つものか。中央ピット周辺には不整形な範囲に被熱面が残されている。

遺物は甕76・77、高坏78、砥石S24、石鋸S25を図示した。いずれも埋土中の出土である。土器のうち新相を示す76は、上下に拡張された口縁端部に多条化した凹線文を施している。これに加え本遺構が弥生時代後期初頭のSI28に切られていることから、SI31は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）の住居跡と考えられる。（湯村）



第34図　SI31出土遺物

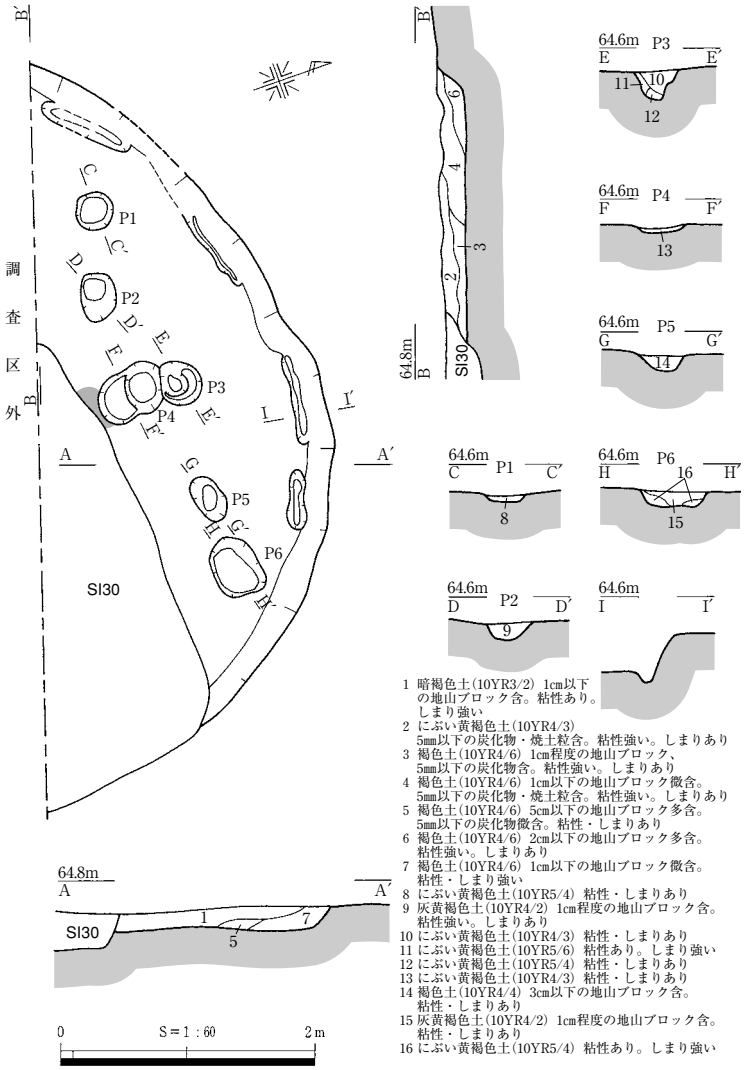
SI33（第35図、PL.12）

M32グリッド、標高64.6mの西尾根平坦部に位置し、奈良時代の竪穴住居跡SI30に切られる。今回の調査では遺構全体の約1/3を調査し、南側2/3については調査区外へと続く。

遺構の規模は、径6.6m前後で、円形を呈すると推定される。壁溝は断面U字形で幅10cm程度、深さは最大10cmを測り断続的に巡る。床面からは、６基のピットを確認した。いずれも浅く補助柱穴と考えられる。P3はP4に切られている。東側はSI30に切られており、その範囲では柱穴等の存在は確認できない。埋土は６層に分けられ、壁際から徐々に堆積しており、住居廃絶後の自然堆積と考えられる。遺物が出土していないため時期は不明であるが、遺構の特徴から弥生時代の竪穴住居跡と考えられる。（岩垣）

SI35（第36～38図、PL.10・45・65・66・68）

I27杭を中心にした、谷部西側斜面部から谷底に近い標高61m付近に位置する。約15m北にはSI37がある。



第35図　SI33

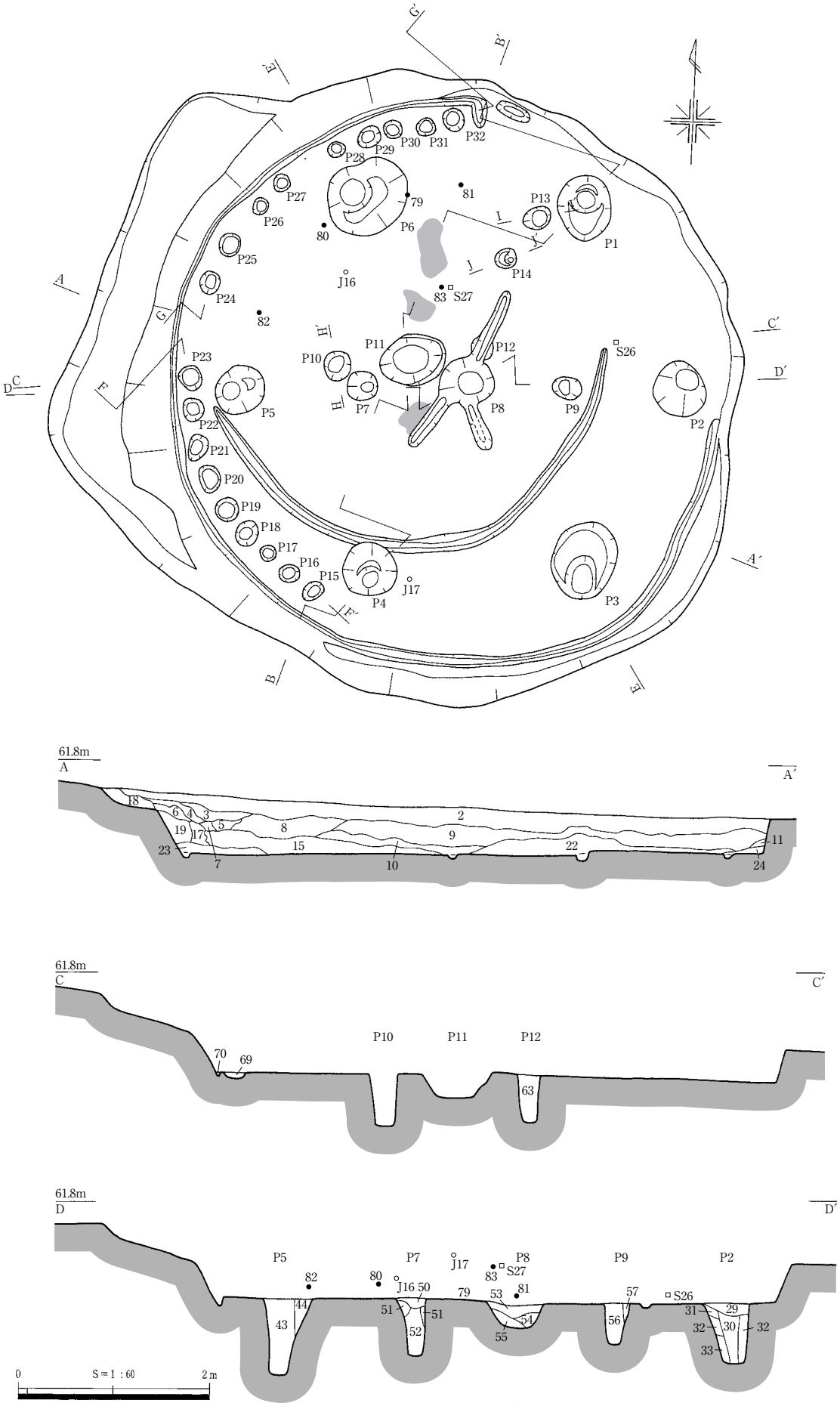
本遺構は、埋土掘り下げ後に確認した２条の壁溝や主柱穴の位置などから、建て替えを伴う竪穴住居跡と判断した。建て替え前をSI35a、建て替え後をSI35bとし、以下時期の古い順に述べる。なお、P14は性格不明のピットで、建て替え前後のどちらの住居に伴うものか判断できなかった。

SI35a　壁が遺存せず本来の規模は不明であるが、壁溝やピットの位置から推定される平面形は直径約4.8mの円形で、床面積は推定16.1㎡である。

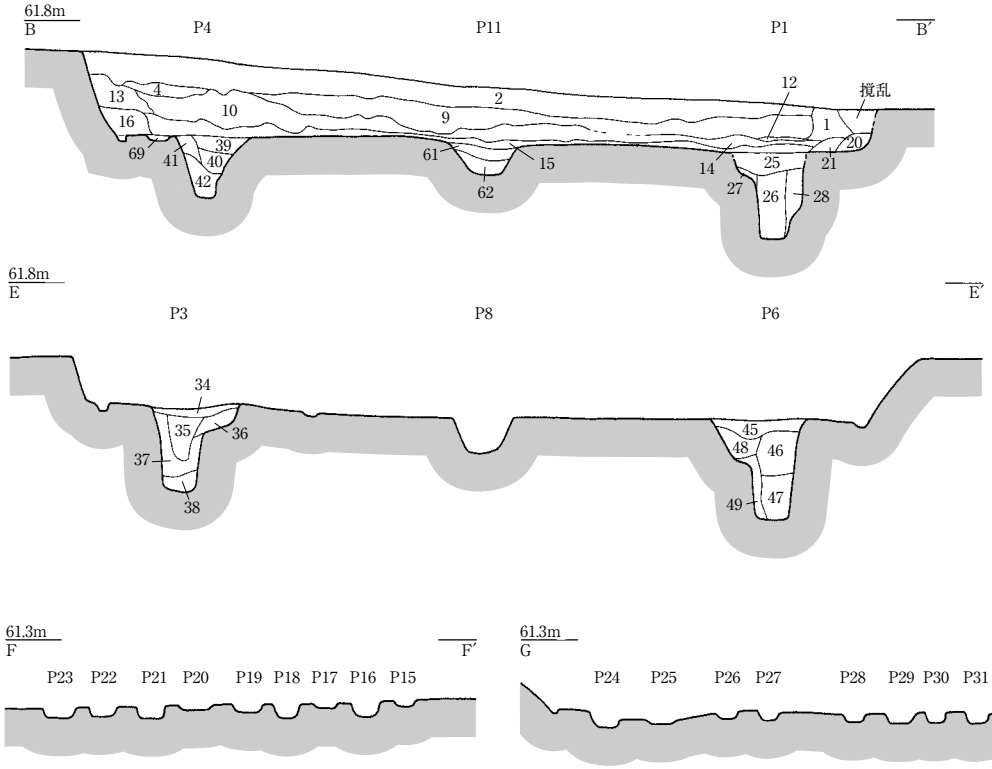
壁溝は、住居の北側が途切れる半円状である。北西側の壁溝は建て替え前後で共有していた可能性もある。幅10～15cm、断面はU字形､床面からの深さ約4cmである。主柱穴はP10及びP12で、中央ピットP11を挟むように並ぶ２本柱の建物と考える。P10の柱痕跡から推定される柱の直径は10cmで、P10－P12の柱間距離は1.6mである。中央ピットP11の規模は長軸70cm、短軸54cm、深さ22cm、平面楕円形、断面は逆台形状である。床の被熱面は検出していない。

SI35b　平面形は直径約6.3mの円形で、床面積は29.1㎡、深さは最大70cmである。西側の壁上部は浅いテラス状を呈す。住居東側は谷の堆積土10層を床面としている。床面には壁溝１条、床溝３条、ピット30基、被熱面３ヶ所を検出した。貼床は認められない。壁溝は住居北東側で途切れる。幅5～15cm、断面はU字形、床面からの深さ約3cmである。壁際に並ぶ主柱穴はP1～P6の６本で、壁際から約40～70cm内側に位置する。柱間距離は、P1－P2間から時計回りに2.2m、2.4m、2.2m、2.5m、2.5m、2.5mを測る。中央ピットP8を挟むようにP7とP9が並ぶ配置はSI35aと共通するが、柱間距離は2.1mで、床の拡張に伴って距離が長くなっている。柱痕跡から推定される柱の直径は10～22cmである。中央ピットP8の規模は長軸54cm、短軸50cm、深さ20cm、平面円形、断面は逆台形状である。P8には３条の床溝が伴う。溝は幅約10cm、床面からの深さ5cmである。これらの床溝は、壁溝や他のピットに連結することはなく、北東に80cm、南東に50cm、南西に60cm延びて収束する。

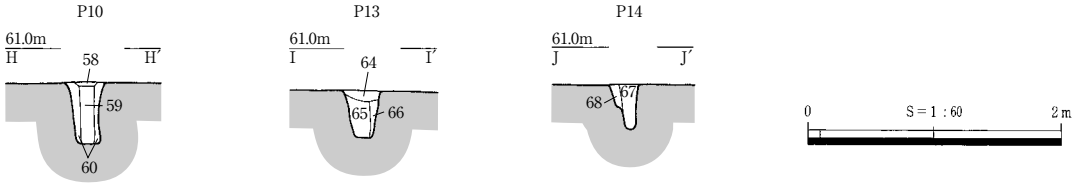
その他、本住居では、西壁際で壁溝の曲線に沿って連続する18基のピットを検出した。直径16～26


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
S26
S27
J16
J17
61.8m
A
A′
C
C′
D
D′
S＝1：60
0
2m

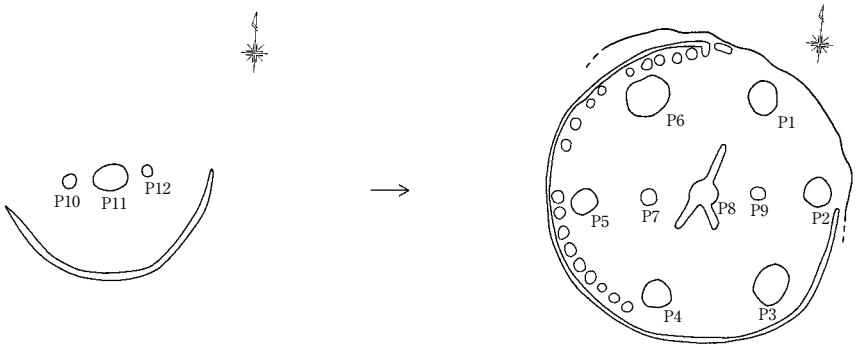
第36図　SI35（1）



1 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 5mm以下の炭化物・焼土粒含。粘性・しまり弱い
2 暗褐色土(10YR3/3) 5mm以下の炭化物・焼土粒含。粘性なし。しまり弱い
3 暗褐色土(10YR3/3) 3mm程度の炭化物含。粘性なし。しまりあり
4 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 5mm以下の炭化物・焼土粒含。しまり強い
5 黒褐色土(10YR3/2) 粘性・しまりなし
6 褐色土(10YR4/4) 5mm以下の炭化物含。粘性なし。しまり弱い
7 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3mm程度の地山粒含。粘性・しまり弱い
8 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 5mm程度の炭化物・焼土粒多含。粘性・しまりなし
9 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 5mm以下の炭化物・焼土粒多含。粘性・しまり弱い
10 褐色土(10YR4/4) 1cm以下の地山ブロック、5mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性弱い。しまりあり
11 暗褐色土(10YR3/3) 5mm以下の炭化物含。粘性・しまりなし
12 褐色土(10YR5/6) 地山ブロックを顕著に含む。粘性強い。しまりあり
13 褐色土(10YR4/4) 10に似るが、含有物が少ない。しまり弱い
14 褐色土(10YR4/4) 5mm以下の地山粒を多含。1cm以下の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりなし
15 褐色土(10YR4/4) 地山粒・炭化物・焼土粒含。粘性あり。しまり弱い
16 褐色土(10YR4/4) 15に似るが、含有物が多い。粘性・しまりなし
17 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 3mm程度の地山粒含。炭化物・焼土粒微含。粘性・しまりなし

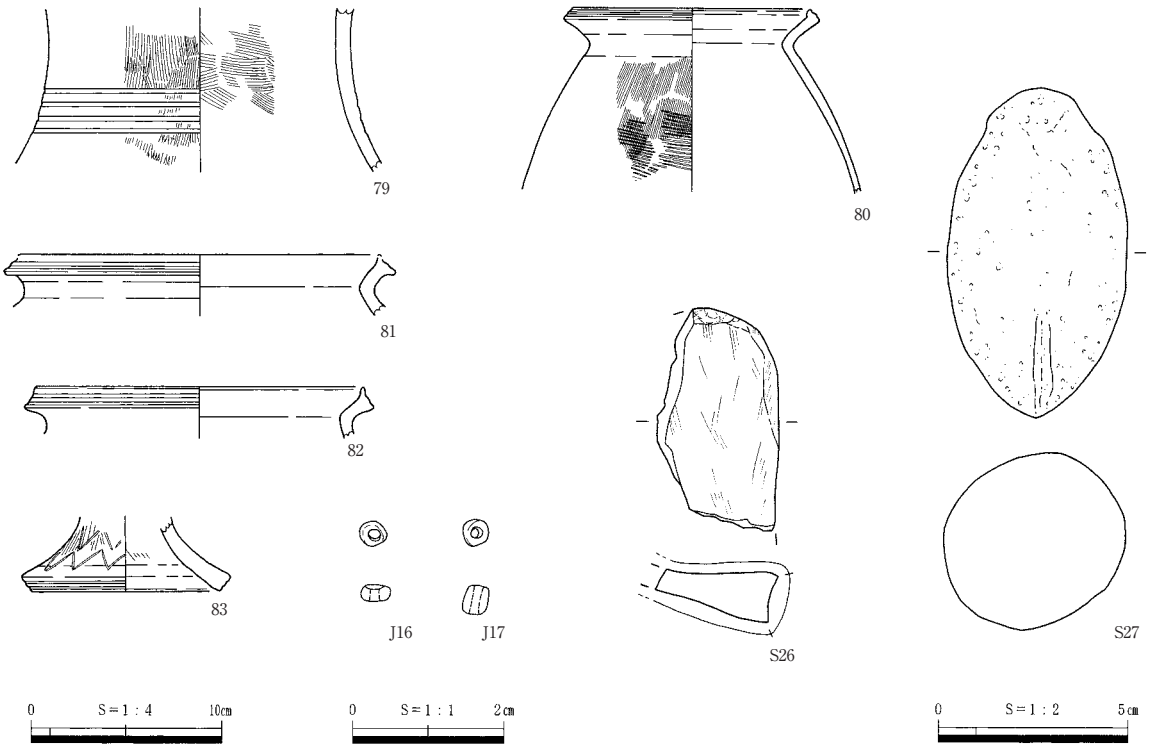


18 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 1cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりあり
19 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 焼土粒を中心に地山ブロック含。粘性・しまり弱い
20 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 地山ブロック含。粘性・しまり弱い
21 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘性・しまり強い
22 暗褐色土(10YR3/3) 1cm以下の炭化物・焼土粒多含。粘性・しまりなし
23 褐色土(10YR4/4) 1cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりあり
24 暗褐色土(10YR3/3) 5mm以下の炭化物、1cm以下の焼土粒含
25 褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
26 黒褐色土(7.5YR3/1) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
27 暗褐色土(7.5YR3/3) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
28 褐色土(7.5YR3/3) 27に似るが、含有物なし
29 褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
30 黒褐色土(7.5YR3/2) 1cm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり
31 暗褐色土(7.5YR3/3) 1cm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
32 褐色土(7.5YR3/4) 粘性・しまりあり
33 黒褐色土(7.5YR2/2) 2cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
34 褐色土(7.5YR4/3) 3cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
35 暗褐色土(7.5YR3/4) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
36 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
37 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性・しまりあり
38 黒褐色土(7.5YR3/2) 37に似るが、地山ブロック多含
39 褐色土(7.5YR4/3) 2mm程度の地山粒含。粘性・しまりあり
40 暗褐色土(7.5YR3/3) 2mm程度の地山粒含。粘性・しまりあり
41 暗褐色土(7.5YR3/3) 2mm程度の地山粒・炭化物含。粘性・しまりあり
42 黒褐色土(7.5YR3/1) 3cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
43 黒褐色土(7.5YR3/2) 1cm程度の地山ブロック、2mm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり
44 暗褐色土(7.5YR3/3) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
45 褐色土(7.5YR4/3) 1cm程度の地山ブロック・炭化物含。粘性・しまりあり
46 暗褐色土(7.5YR3/4) 5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
47 黒色土(7.5YR2/1) 1cm程度の地山ブロック含。粘性あり。しまりやや弱い
48 黒褐色土(7.5YR3/2) 1cm程度の地山ブロック・炭化物含。粘性・しまりあり
49 黒褐色土(7.5YR3/2) 2cm程度の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
50 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性・しまりあり
51 暗褐色土(7.5YR3/3) 2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
52 黒褐色土(7.5YR3/2) 5mm程度の炭化物含。粘性あり。しまり弱い
53 褐色土(7.5YR4/3) 1cm程度の地山ブロック、5mm程度の炭化物含。粘性弱い。しまり強い
54 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性・しまりあり
55 褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
56 暗褐色土(7.5YR3/3) 2mm程度の地山粒・炭化物含。粘性・しまりあり
57 暗褐色土(7.5YR3/4) 粘性・しまりあり
58 褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
59 黒褐色土(7.5YR3/1) 1cm程度の地山ブロック含。しまり弱い
60 褐色土(7.5YR4/6) 2mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
61 暗褐色土(7.5YR4/4) 5mm程度の炭化物・焼土粒含。粘性・しまりあり
62 黒褐色土(7.5YR3/1) 61をブロック状に含む。粘性・しまりあり
63 暗褐色土(7.5YR3/3) 粘性・しまりあり
64 褐色土(7.5YR4/3) 2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
65 暗褐色土(7.5YR3/3) 5mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
66 褐色土(7.5YR4/3) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
67 暗褐色土(7.5YR3/3) 2mm程度の地山粒多含。粘性・しまりあり
68 暗褐色土(7.5YR3/4) 2mm程度の地山粒含。粘性・しまりあり
69 暗褐色土(7.5YR3/3) 1cm程度の炭化物多含。粘性・しまりあり
70 暗褐色土(7.5YR3/3) 1cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり



SI35変遷模式図

第37図　SI35(2)



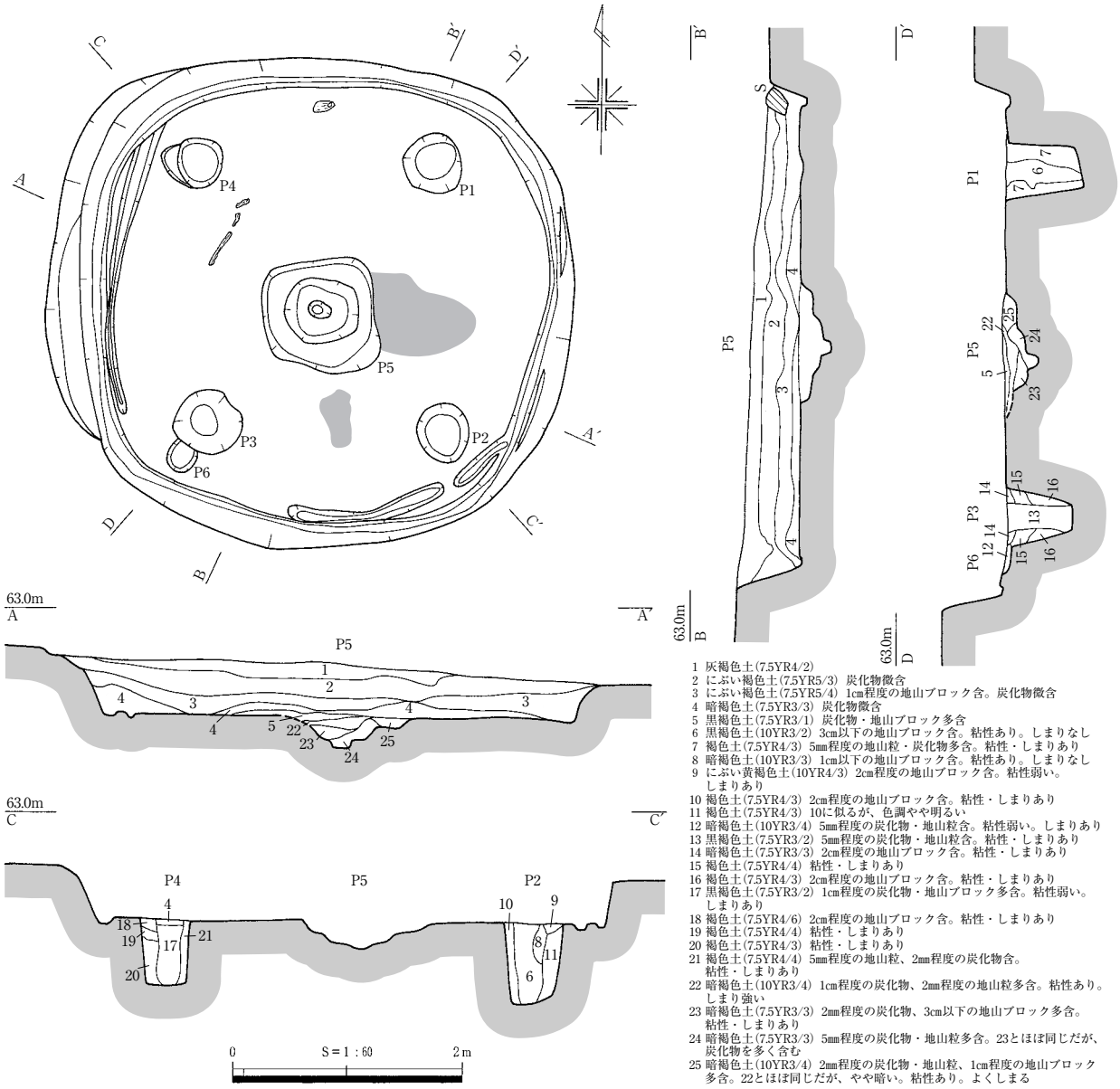
第38図　SI35出土遺物

cm、深さ平均約6cmの小ピットである。小ピット群は、南西側P15～P23、西側P24～P27、北西側P28～P32の３つに分かれて並んでおり、P23－P24間は1.0m、P27－P28間は70cm離れている。南から順に配置をみると、P4からP5あたりの壁際にはP15～P23が並ぶ。ピット間の距離は30～40cmである。P5からP6の間に並ぶP24～P27間の距離は、45、50、32cmを測る。P28～P32は、P6から住居北側の壁溝の収束部付近まで連続し、ピット間の距離は25～35cmである。これらの小ピットの性格については不明であるが、本遺構同様に小ピットが並ぶ竪穴住居跡の例として、SI37が挙げられる。両者はいずれも弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）の竪穴住居跡で、谷部斜面地に立地する点、小ピットが標高の高い側（西側）の壁際のみに認められる点なども類似する(註)。

埋土の堆積状況は、褐色土層、黄褐色土層などで下層が埋まった後、暗褐色土層が全体を覆っている。地形的に高い西側から流れ込むような様相も見られ、自然堆積により埋没したものと考える。

遺物には土器、石器、ガラス小玉があり、床面から埋土上層の出土である。79は長頸壺の頸部で、４条の凹線が施されている。80～82は甕である。80は口縁上端部をわずかに拡張し、81、82は上下に拡張後、凹線を施している。83は壺または高坏の脚部と考えられ、端部に面をもたせ凹線を巡らせている。これらの土器は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）に位置づけられる。出土石器のうち、S26は砥石、S27は石錘である。ガラス小玉２点は埋土中層から上層の出土である。J16は直径4mm、厚さ2mm、孔径1mm、色調はやや濃い青色である。J17は直径3.5mm、厚さ4mm、孔径約1.2mm、色調はやや濃い緑色。以上の遺物の特徴から、本遺構の廃絶時期は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）と考える。　（長尾）

（註）　このほかに、竪穴住居床面の壁際に小ピットが並ぶ例として、琴浦町笠見第3遺跡SI132（弥生時代後期前葉）、米子市青木遺跡F地区SI20（弥生時代後期後葉）、米子市・大山町妻木晩田遺跡妻木山地区第40竪穴住居跡（弥生時代後期後葉）などがある。



1 灰褐色土(7.5YR4/2)
2 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 炭化物微含
3 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 1cm程度の地山ブロック含。炭化物微含
4 暗褐色土(7.5YR3/3) 炭化物微含
5 黒褐色土(7.5YR3/1) 炭化物・地山ブロック多含
6 黒褐色土(10YR3/2) 3cm以下の地山ブロック含。粘性あり。しまりなし
7 褐色土(7.5YR4/3) 5mm程度の地山粒・炭化物多含。粘性・しまりあり
8 暗褐色土(10YR3/3) 1cm以下の地山ブロック含。粘性あり。しまりなし
9 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2cm程度の地山ブロック含。粘性弱い。しまりあり
10 褐色土(7.5YR4/3) 2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
11 褐色土(7.5YR4/3) 10に似るが、色調やや明るい
12 暗褐色土(10YR3/4) 5mm程度の炭化物・地山粒含。粘性弱い。しまりあり
13 黒褐色土(7.5YR3/2) 5mm程度の炭化物・地山粒含。粘性・しまりあり
14 暗褐色土(7.5YR3/3) 2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
15 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
16 褐色土(7.5YR4/3) 2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
17 黒褐色土(7.5YR3/2) 1cm程度の炭化物・地山ブロック多含。粘性弱い。しまりあり
18 褐色土(7.5YR4/6) 2cm程度の地山ブロック含。粘性・しまりあり
19 褐色土(7.5YR4/4) 粘性・しまりあり
20 褐色土(7.5YR4/3) 粘性・しまりあり
21 褐色土(7.5YR4/4) 5mm程度の地山粒、2mm程度の炭化物含。粘性・しまりあり
22 暗褐色土(10YR3/4) 1cm程度の炭化物、2mm程度の地山粒多含。粘性あり。しまり強い
23 暗褐色土(7.5YR3/3) 2mm程度の炭化物、3cm以下の地山ブロック多含。粘性・しまりあり
24 暗褐色土(7.5YR3/3) 5mm程度の炭化物・地山粒多含。23とほぼ同じだが、炭化物を多く含む
25 暗褐色土(10YR3/4) 2mm程度の炭化物・地山粒、1cm程度の地山ブロック多含。22とほぼ同じだが、やや暗い。粘性あり。よくしまる

第39図　SI36

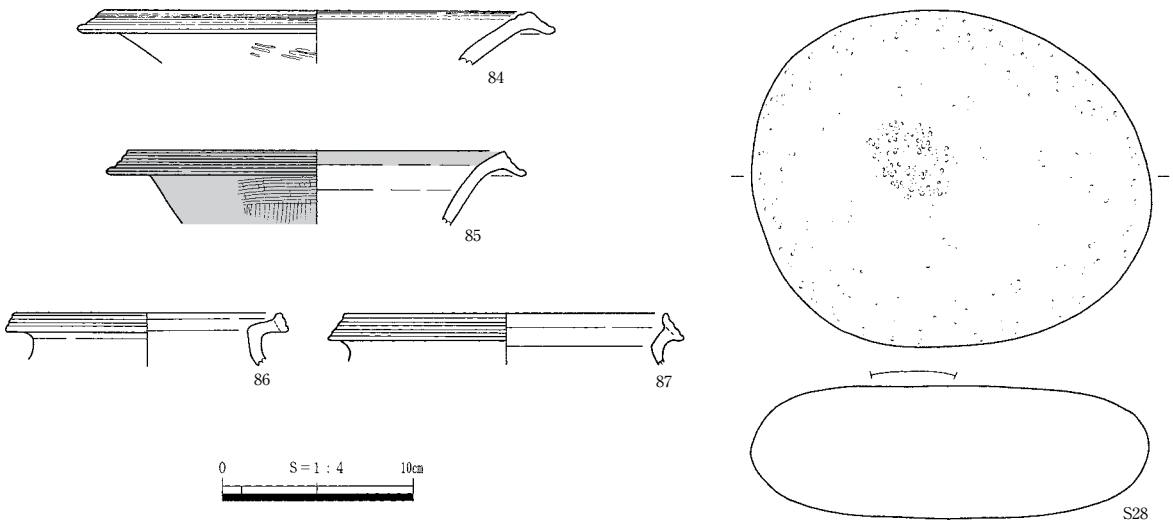
SI36（第39～41図、PL.12・45・64～66）

J26からJ27グリッド、西尾根東側斜面部が標高62m前後を境に、谷に向かい傾斜が変換するあたりに位置する。

長軸4.6m、短軸4.3mの隅丸方形を呈する。深さは南壁で最大55cmを測り、最も浅い北壁で30cm残っていた。床面積は13.2㎡である。

壁溝は壁に接して全周し、溝底面の幅は6cm程度、深さは5cm程度である。南側と西側で一部２重に巡るが、主柱穴のあり方から建て替えに伴うものではないと考えられる。主柱穴はP1～P4の４本柱で、いずれも径40cm以上、深さも60cm程度としっかりしており、柱痕跡も明瞭である。

主柱間距離はP1－P2間から時計回りに2.4m、2.1m、2.3m、2.1mである。中央ピットはP5で、検出面では1m四方の方形状を呈し、底面に向かって深さ28cmの段掘りとなる。埋土は全体的に炭化物等の含有物が多い。P5に近接して２ヶ所の被熱面が認められた。P4とP5の間と北壁付近に炭化材とおぼしきものが床面から出土した。いずれも遺存状態は悪い。P4、P5間のものは長さ70cm、径7cm程

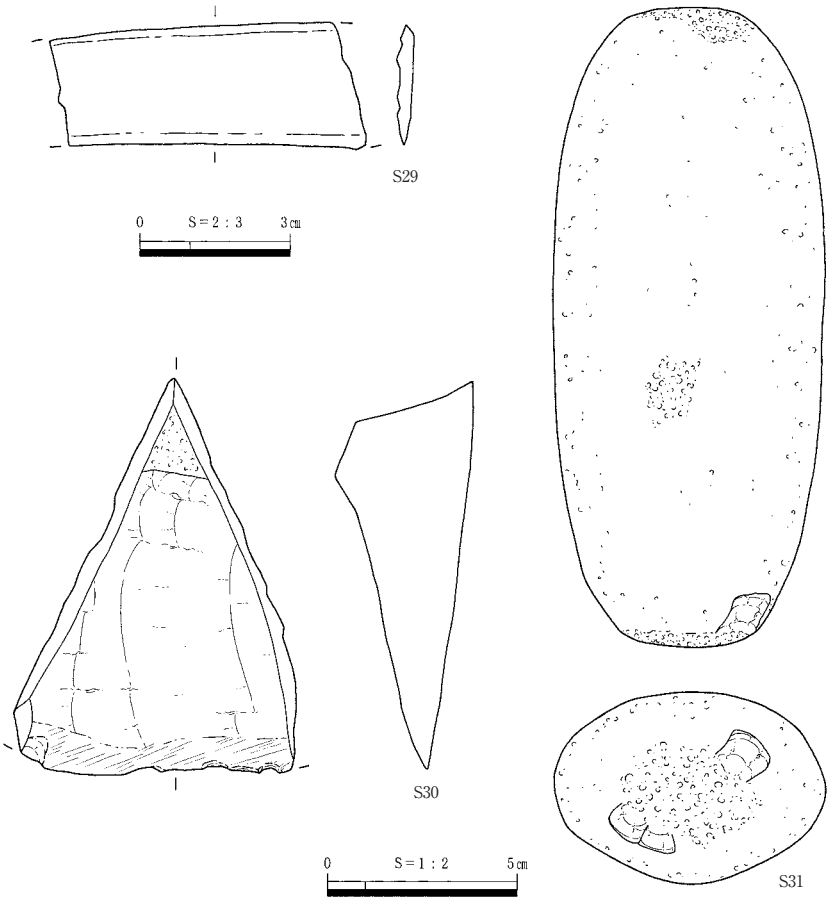


第40図　SI36出土遺物(1)

度の棒状であった。

住居を埋める埋土は大きく４層に分けられる。このうち底面を埋める４層は住居中心付近で土手状に盛り上がっており不自然である。人為的に埋められたものか。それより上は住居廃絶後の自然堆積と思われる。

遺物は埋土中から出土しており、床面のものは認められなかった。84は広口壺の口縁部で、外面に整形段階のタタキ痕跡を残している。埋土下層の３層出土。85も広口壺。外面と口縁部内面に赤彩を施す。86は頸部のあり方からすると壺であろう。87は口縁端部を上下に拡張し３条の凹線文を施す甕。S28は大型で扁平な円礫の一面に敲打痕を残す。台石として使われたものであろう。S29は石鋸、S30は大型石庖丁の破片。板状に分割した石材の一端に刃部を設けている。S31は敲石で、棒状礫の両端と器体中央付近に敲打痕を残す。S30とともに埋土下層の３層から出土した。



第41図　SI36出土遺物(2)

SI36は時期を決める決定的な遺物に欠けるきらいがあるが、弥生時代中期後葉(Ⅳ－2からⅣ－3)の住居跡と思われる。（湯村）

SI37（第42・43図、PL.11・45・47・66・70）

I25杭を中心とした、標高60～61ｍの谷に向かう斜面地に築かれている。東側に接して段状遺構SS7があるが、SI37の主柱穴がSS7埋土を切っていたため、SI37が新しいと判断した。

谷に臨む東側の壁と床面がかなり流失しており、全体の規模は明らかにできないが、壁の残っている南北方向で見ると径9.7ｍの大型住居が復元できる。床面積は推定で53.7㎡となる。斜面上方にあたる西側壁面の深さは75㎝を測り、西側から南側にかけてテラス状の平坦面が認められる。

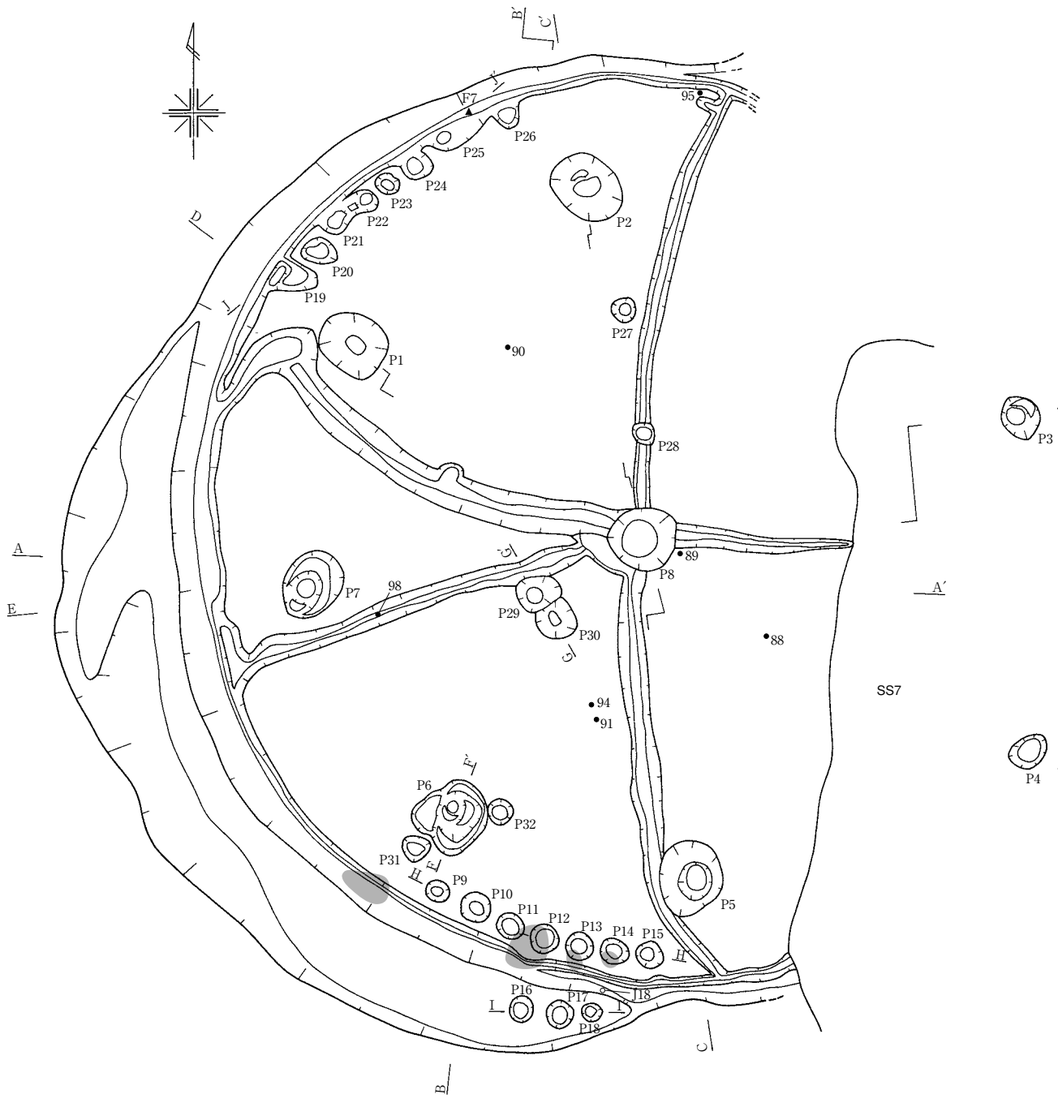
壁溝はほとんどの部分が壁に接して設けられており、溝底面の幅はおおむね5㎝程度で、場所によっては20㎝近いところもある。深さは6㎝前後で、断面形状はＵ字あるいは逆台形となる。主柱穴はP1～P7の７本柱と想定しているが、P2－P3間の距離が長いため、ここにもう１本あった可能性も否定できない。主柱間距離はP1－P2間から時計回りに2.8ｍ、4.8ｍ、3.3ｍ、3.5ｍ、2.5ｍ、2.6ｍ、2.4ｍである。P3とP4はSS7の埋土を掘り込んでいる。P4とP6を除いて柱痕跡を確認した。中央ピットP8は長軸66㎝、短軸64㎝、深さ64㎝で、円筒形の掘り込みである。埋土中には2㎝あるいは5㎝以下と、少し大きめの炭化物を密に含んでいる。中央ピットから南北及び東に１本ずつ、西に２本の床溝が延びている。幅は15～30㎝、深さは6～10㎝程度と一定ではない。

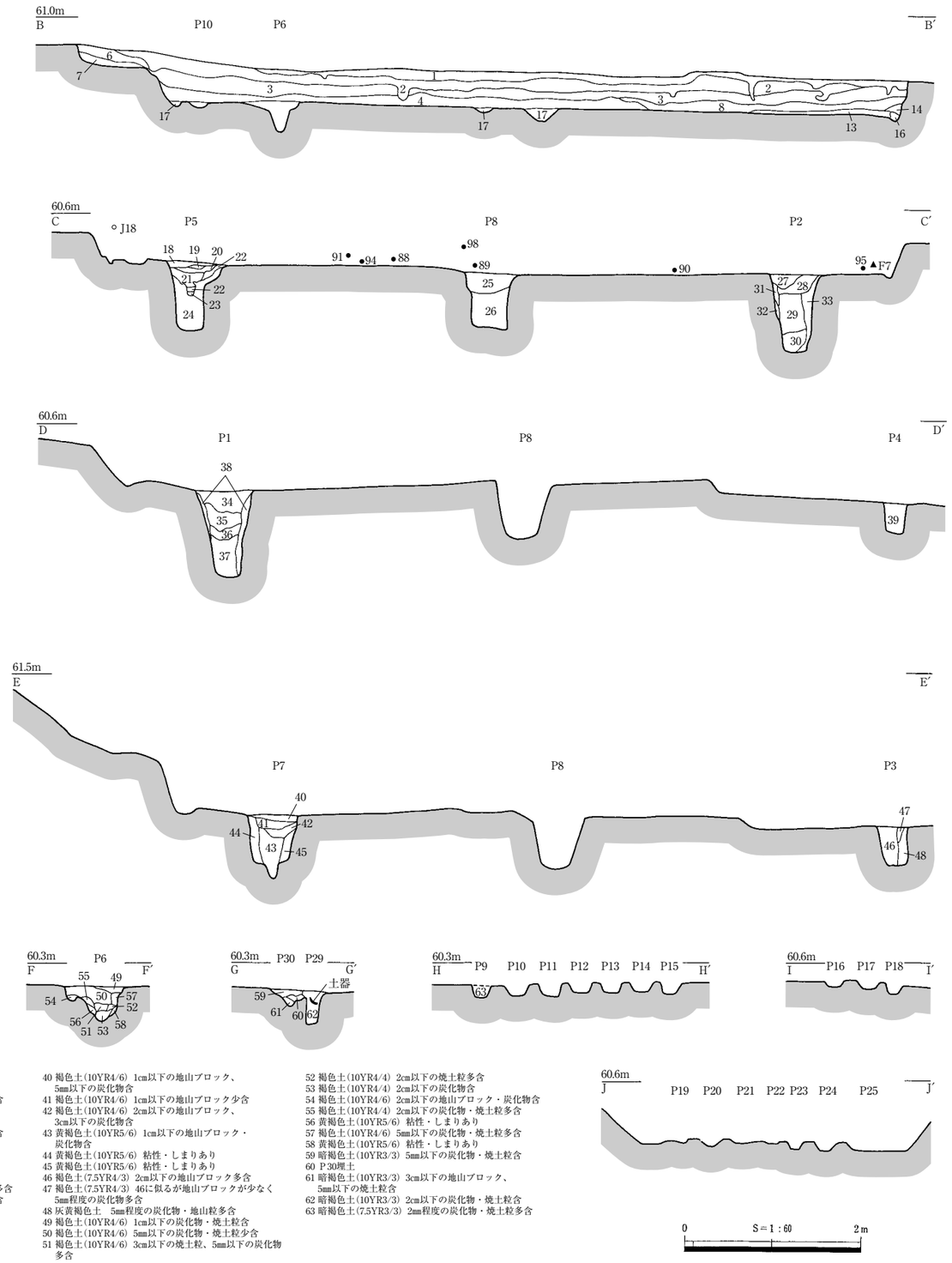
この住居跡の特徴として、壁際に並ぶ小規模なピットの存在が挙げられる。南西壁付近のP9～P15、南壁テラス上のP16～P18、北西壁付近のP19～P26がそれである。いずれも径が30㎝程度、深さは10～15㎝程度と小規模で、一列に並ぶのが特徴である。埋土は分層できず、2㎜程度の炭化物や焼土粒を多く含む暗褐色土であった。住居の東側部分にもこうした小ピットが並んでいたかどうかは、流失しているため確かめようもないが、同じようなピットをもつSI35でも西壁付近にのみ確認されており、本住居も同様なあり方をしていたのではなかろうか。管見の限りではこのような類例はあまりなく、どういう機能を有していたかは不明である。

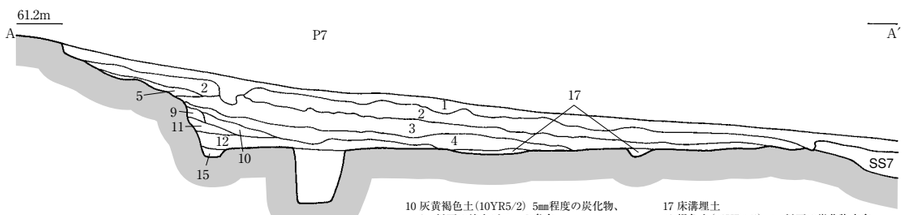
住居を覆う埋土を見ると、斜面上方の壁際から埋没し、その後斜面の傾斜に沿って１～４層が堆積している。住居廃絶後の自然堆積と考えられる。

遺物は埋土中から床面にかけてかなり出土した。斜面に築かれていることから、上方からの流れ込みもかなりあるものと思われる。図示したものは埋土下層から床面で出土したものである。88、89は広口壺の口縁部。90は広口壺または長頸壺の頸部から肩部。頸部には凹線文を施した後、刺突文を加えている。90は床面から出土。91は内面のヘラケズリが肩のあたりまで上がっている。92～96は拡張された口縁端部に凹線文を施す甕。94の口縁端部はあまり拡張されないが、頸部内面の屈曲は強い。残念ながら頸部以下の調整は不明である。床面からわずかに浮いて出土。95は北壁壁溝上面の出土。97はわずかに内傾しながら立ち上がる口縁部外面に５条の凹線文を施した高坏。98は脚付壺か高坏の脚裾部。外面は赤彩される。F7はヤリガンナか。J18は緑色凝灰岩を多方向から打ち欠いたもので、管玉製作に伴うものであろう。擦り切り溝は見られないが一部に研磨痕を残す。さらに打ち欠いて管玉素材を作り出そうというものか。西壁テラス部分の埋土上層から出土しており、上方からの流れ込みの可能性がある。

91のように弥生時代中期後葉でも新相(Ⅳ－3)を示すものがあるが、床面からやや浮いた位置で出

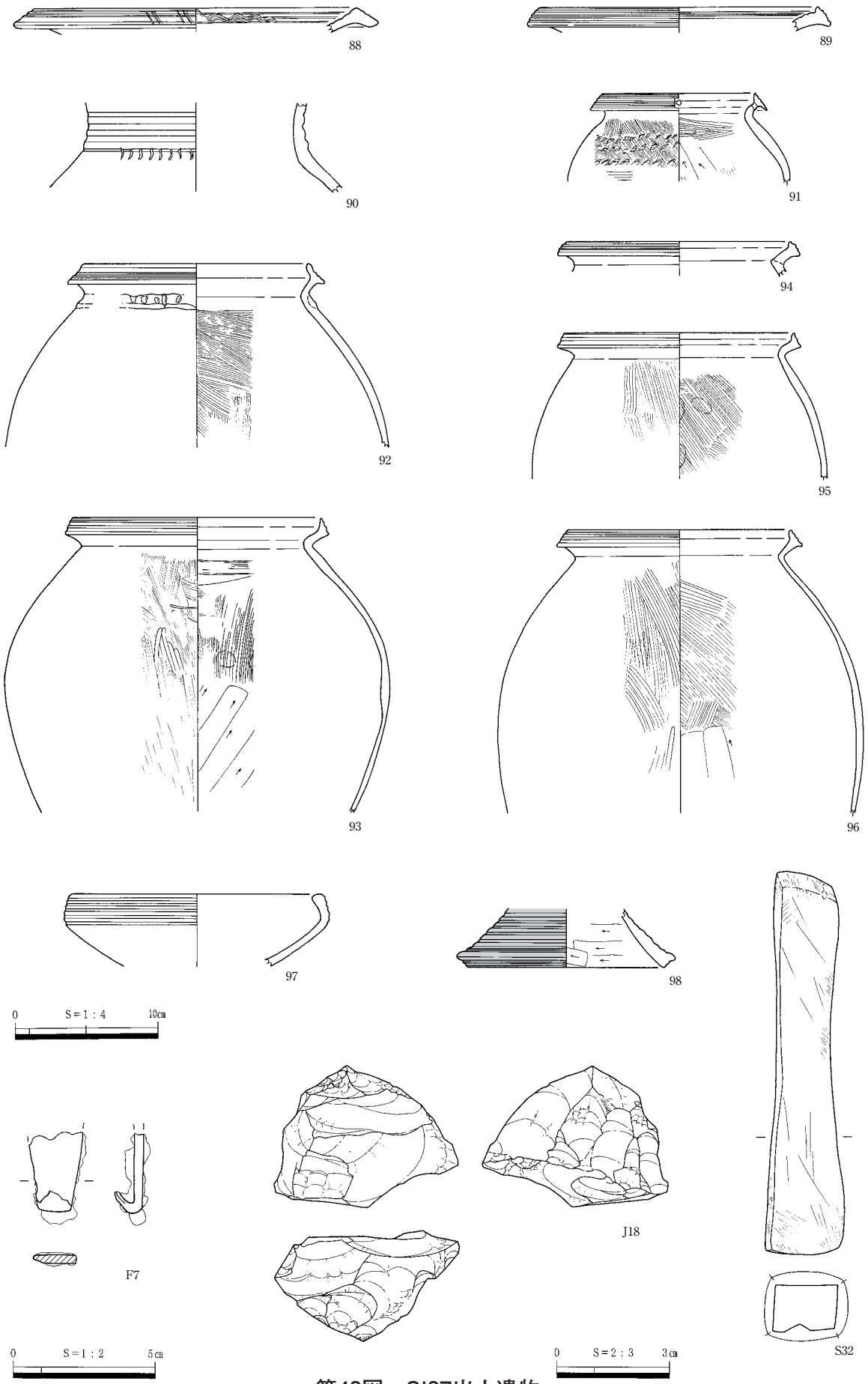




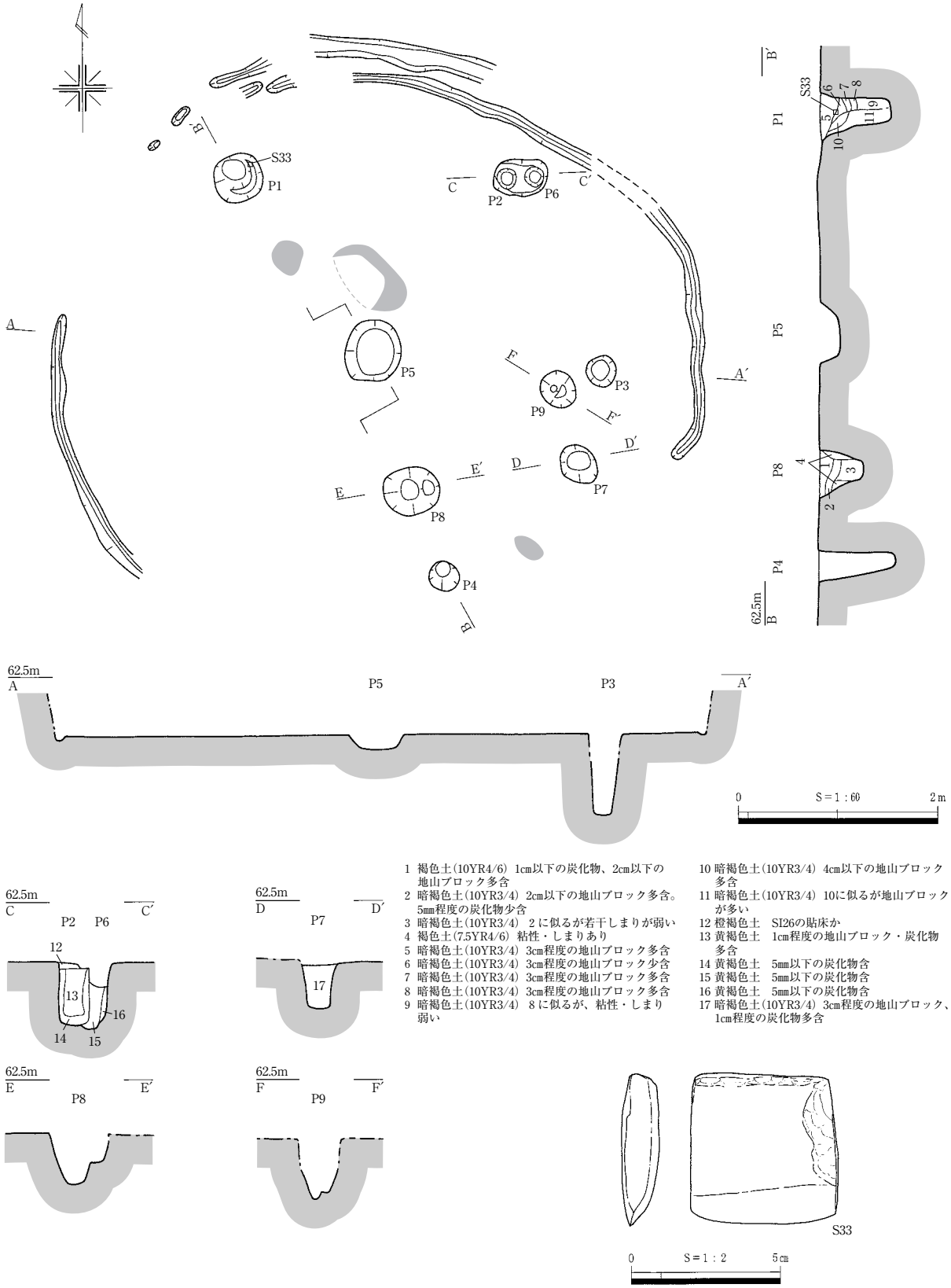


1 黒褐色土(10YR3/1) 粘性・しまりなし
2 褐色土(10YR4/4) 5mm以下の炭化物、1cm以下の焼土粒含
3 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2に加え1cm以下の地山ブロック含
4 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の炭化物・焼土粒・地山ブロック多含
5 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 2mm程度の炭化物含
6 褐色土(10YR4/4) 1cm以下の炭化物・焼土粒・地山ブロック少含
7 灰黄褐色土(10YR5/2) 1cm以下の炭化物少含
8 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 3に加え2cm程度の地山ブロック含
9 暗褐色土(10YR3/3) 1cm以下の炭化物・焼土粒・地山ブロック含
10 灰黄褐色土(10YR5/2) 5mm程度の炭化物、3cm以下の地山ブロック多含
11 灰黄褐色土(10YR4/2) 1cm以下の炭化物・地山ブロック含
12 灰黄褐色土(10YR4/2) 11に似るが地山ブロック少ない
13 黄褐色土(10YR5/6) 5mm程度の炭化物・地山粒多含
14 黄褐色土(10YR5/6) 13に似るがしまり弱い
15 灰黄褐色土(10YR4/2) 壁溝埋土
16 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 壁溝埋土
17 床溝埋土
18 褐色土(10YR4/6) 5mm以下の炭化物少含
19 褐色土(10YR4/4) 2cm以下の炭化物多含
20 褐色土(10YR4/4) 5mm以下の炭化物少含
21 褐色土(10YR4/4) 3cm以下の炭化物多含
22 黄褐色土(10YR5/6) 粘性強い。しまり弱い
23 褐色土(10YR4/4) 3cm以下の炭化物、1cm以下の焼土粒含
24 P 5理土
25 暗褐色土(10YR3/3) 2cm以下の炭化物・焼土粒多含
26 暗褐色土(10YR3/3) 5cm以下の炭化物、2cm以下の地山ブロック多含
27 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック含
28 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物含
29 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の地山ブロック含
30 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
31 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
32 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
33 褐色土(10YR4/6) 5mm以下の炭化物少含
34 褐色土(10YR4/4) 2cm以下の地山ブロック多含
35 褐色土(10YR4/6) 2cm以下の地山ブロック含
36 褐色土(10YR4/6) 4cm以下の炭化物多含
37 黄褐色土(10YR5/6) 粘性強い。しまり弱い
38 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
39 褐色土(7.5YR4/3) 2cm以下の地山ブロック、5mm程度の炭化物多含
40 褐色土(10YR4/6) 1cm以下の地山ブロック、5mm以下の炭化物含
41 褐色土(10YR4/6) 1cm以下の地山ブロック少含
42 褐色土(10YR4/6) 2cm以下の地山ブロック、3cm以下の炭化物含
43 黄褐色土(10YR5/6) 1cm以下の地山ブロック・炭化物含
44 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
45 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
46 褐色土(7.5YR4/3) 2cm以下の地山ブロック多含
47 褐色土(7.5YR4/3) 46に似るが地山ブロックが少なく5mm程度の炭化物多含
48 灰黄褐色土 5mm程度の炭化物・地山粒多含
49 褐色土(10YR4/6) 1cm以下の炭化物・焼土粒含
50 褐色土(10YR4/6) 5mm以下の炭化物・焼土粒少含
51 褐色土(10YR4/6) 3cm以下の焼土粒、5mm以下の炭化物多含
52 褐色土(10YR4/4) 2cm以下の焼土粒多含
53 褐色土(10YR4/4) 2cm以下の炭化物含
54 褐色土(10YR4/6) 2cm以下の地山ブロック・炭化物含
55 褐色土(10YR4/4) 2cm以下の炭化物・焼土粒多含
56 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
57 褐色土(10YR4/6) 5mm以下の炭化物・焼土粒多含
58 黄褐色土(10YR5/6) 粘性・しまりあり
59 暗褐色土(10YR3/3) 5mm以下の炭化物・焼土粒含
60 P 30理土
61 暗褐色土(10YR3/3) 3cm以下の地山ブロック、5mm以下の焼土粒含
62 暗褐色土(10YR3/3) 2cm以下の炭化物・焼土粒含
63 暗褐色土(7.5YR3/3) 2mm程度の炭化物・焼土粒多含

第42図　SI37



第43図　SI37出土遺物



第44図　SI38および出土遺物

土しており、本遺構の時期を直接示すものとはいいにくい。土器全体の様相からSI37は弥生時代中期後葉でもⅣ－2からⅣ－3のものとしておきたい。（湯村）

SI38（第44図、PL.8・67）

G27グリッドに位置し、SI26に切られる住居跡である。東尾根の西側斜面部が谷に向かい傾斜を強める、標高62mあたりの斜面に位置する。

平成17年度に３区を調査した際に、SI2とした住居跡とともに本遺構に伴う壁溝の一部を検出していたが、当時はSI2の建て替えに伴うものと考えていた。今回の調査で続きを探したところ、SI2（今回の調査でSI26と名称変更）とは平面的にかなりずれることが確認され、主柱穴等の検討も行い、別の住居が切り合ったものと判断できた。

遺存状態は悪く、壁は未検出で、壁溝の一部と主柱穴４基、中央ピット、その他のピット４基を検出したにすぎない。北東部と南西部の壁溝間を結んで推定される径は6.6mである。住居の形状は円形または隅丸方形か。推定される床面積は30.3㎡である。

壁溝は幅15㎝、深さ5㎝程度で、北側では２重に巡るため建て替えの可能性もある。主柱穴はP1～P4を確認したが、中央ピットとの位置関係などから、本来は６本柱であった可能性が高い。P2とP3は３区SI2の報告の中で、それぞれP10、P4としていたものである。柱痕跡はP2においてのみ確認した。主柱間距離はP1－P2間から時計回りに2.8m、2.2m、2.6mである。中央ピットP5は長軸64㎝、短軸57㎝、深さ20㎝の皿状の掘り込みである。床面には３ヶ所の被熱面があり、そのうち中央ピットの北に近接するものは、SI26の主柱穴P1に切られており、本遺構がSI26より古いという根拠となっている。

SI38と切り合い関係を持つ住居の床面積は、SI26が推定で44.3㎡、3区SI1が推定で31.3㎡と、ともに大型住居である。墳丘墓に近接していることもあり、墳墓祭祀との関連が考えられる。

出土遺物についてはSI26に属するものとの区別がつきにくく、ここではP1埋土から出土した扁平片刃石斧S33を示したのみである。

３区の報告の中で示したSI2出土遺物と、今回のSI26出土遺物を見ても極端に時期が異なるものはなく、いずれも弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）のものであるため、SI38も同じ時期のものとして捉えておきたい。（湯村）

(3)段状遺構

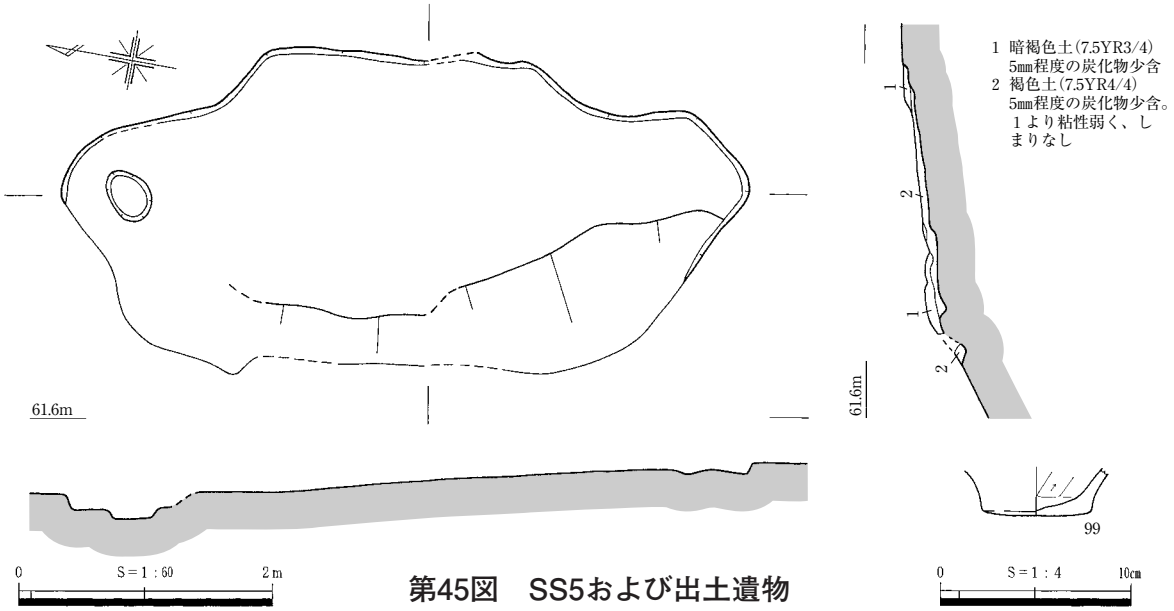
SS5（第45図、PL.13・53）

５区AC29からAC30グリッドに位置する。住居や墳丘墓などがある４区とは谷を隔てた位置関係にあり、斜面の勾配がきつくなる手前の標高61m付近の傾斜変換点に築かれている。

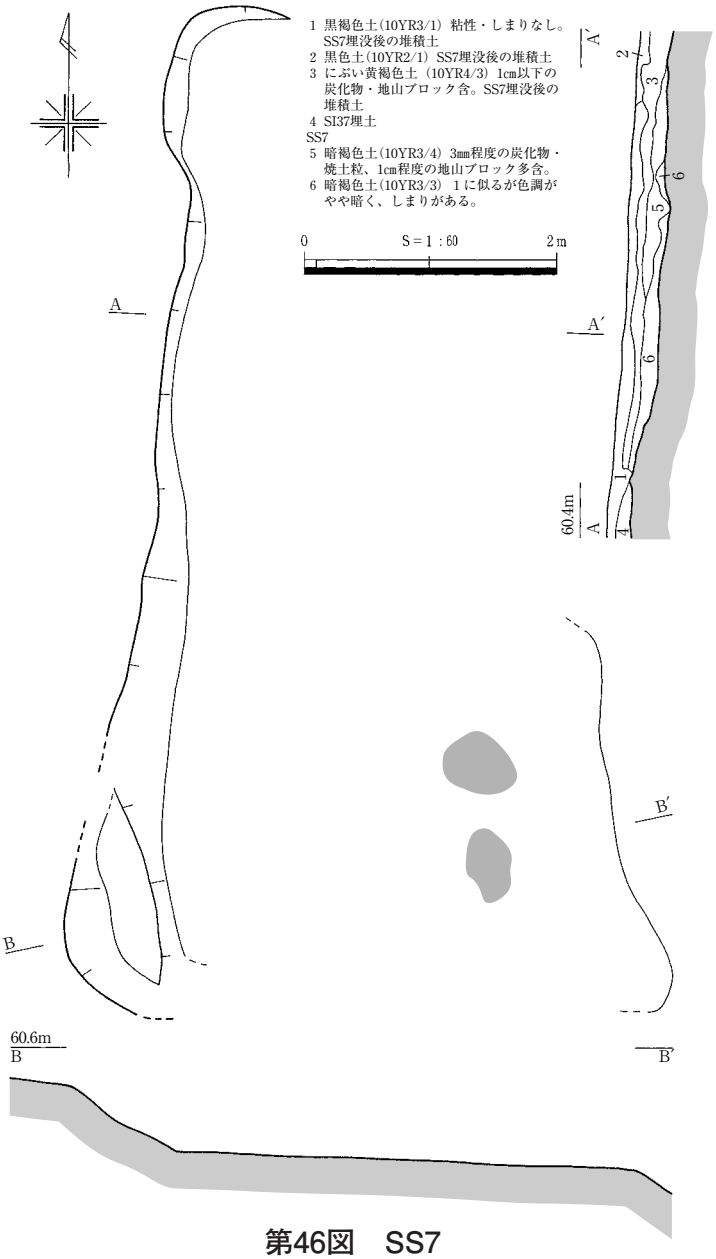
平面形態は不整形な長楕円形で、長軸5.5m、短軸2.6mを測る。遺存状態は悪く、壁は最大でも10㎝程度しか残っていない。

底面は割合平坦に設けられている。南壁の一部が斜面の下方に延びていたことと、西端部分に痕跡的な立ち上がりが認められたため、傾斜の強まったところにも遺構は続いていると判断した。北側の壁に近い位置に長軸45㎝、短軸30㎝、深さ7㎝のピットが検出された。

遺物はほとんど出土していない。99は壺または甕の底部である。平底から立ち上がり、体部下半にかけて開いている。内面は上方向へのヘラケズリ調整である。このような特徴は、弥生時代中期後葉から後期初頭にかけての土器に見られる。この１点をもって遺構の時期を特定するのは困難だが、近接するSK74や４区の遺構の多くが弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）に属するので、SS5も同時期の



第45図　SS5および出土遺物



第46図　SS7

可能性が高いと考えている。　（湯村）

SS7（第46・47図、PL.13・53）

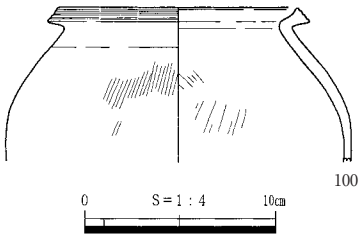
H25グリッド、４区西尾根の東側斜面というより、ほとんど谷の底に近い位置に築かれている。

西に隣接するSI37の主柱穴を探している際に検出した遺構で、SS7の埋土を切ってSI37の主柱穴が掘られていたため、両者の前後関係が確認できた。東側部分は谷の遺物包含層の掘り下げを並行して行っていたため確認し切れていないところもある。

歪な長方形をしており、長軸8m、短軸4.8mの規模を有する。深さは南西隅で最大52cmを測る。底面にピットは認められなかったが、南東隅に２ヶ所の被熱面があった。埋土の堆積状況は自然堆積を示している。

遺物は少なく、埋土中から出土した100を示した。口縁端部に３条の凹線文を施した弥生時代中期後葉の甕である。本遺構を切っているSI37が弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）に位置づけられるため、SS7はそれ以前という

ことになるが、100が口縁端部の拡張が大きくないとはいえ、凹線文が多条化していることと体部の張りが強いことが新相を示していると考え、SI37と同時期（Ⅳ－2からⅣ－3）の遺構と理解したい。（湯村）



第47図　SS7出土遺物

SS8（第48図、PL.13・53）

G26グリッド、東尾根西斜面の標高61m付近に位置する。平成17年度調査報告ではSS1としたものであり、今回の調査でその続きを検出した。

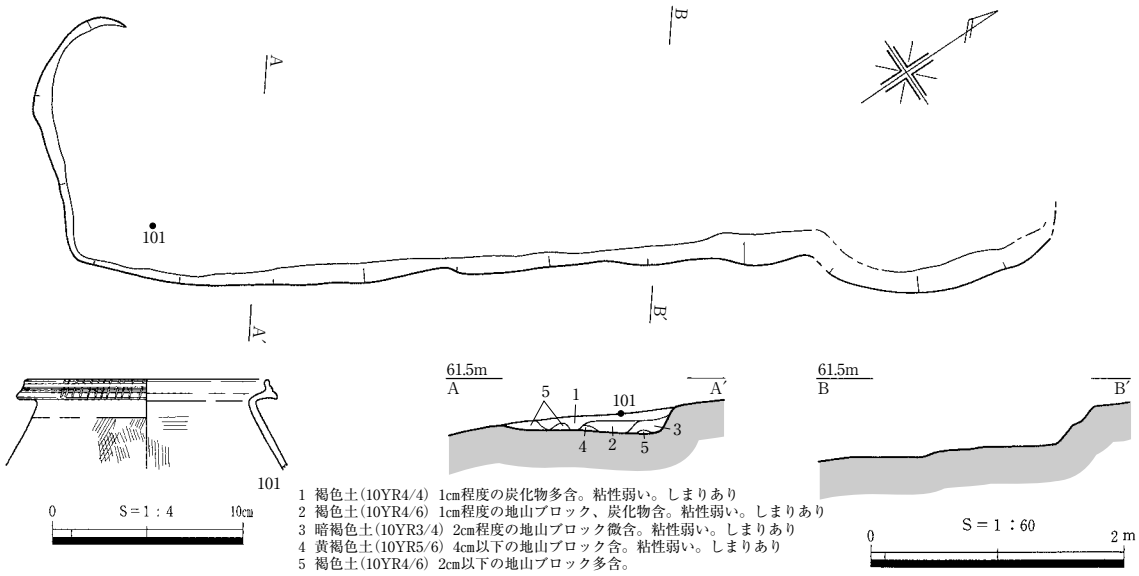
全体の規模は、幅8m、奥行き2mを測り、深さは最大で20cm程度と浅い。壁が直線的に延びる段状遺構である。遺物は１層から数点の土器片が出土した。101は、口縁部にキザミを有する甕である。平成17年度調査出土遺物と今回の出土遺物から、弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）に位置づけられる。（岩垣）

SS9（第49図、PL.14）

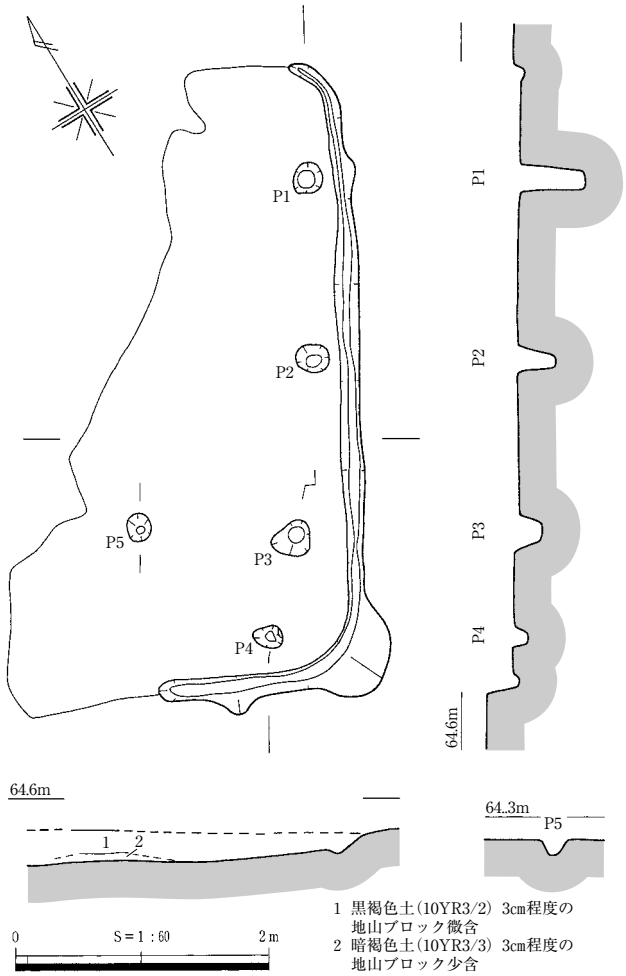
H30からH31グリッド、標高64m付近の浅い谷頭を臨む東尾根西側斜面部に位置する。長軸5m、短軸2.8m、深さは最大で20cm程である。北側から西側にかけて不整形となっているが、ここは谷の傾斜方向であるため流失している可能性がある。

東壁から南壁にかけて幅20cm、深さ6cm程度の壁溝が確認された。この壁溝に沿うようにして径20～30cmのピットP1～P4が並んでいる。さらに西側の底面にも同規模のP5がある。

遺物は埋土中から弥生土器片が出土しているが、図化できるものはない。周辺の遺構と同様に弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）のものと思われる。（湯村）



第48図　SS8および出土遺物



第49図　SS9

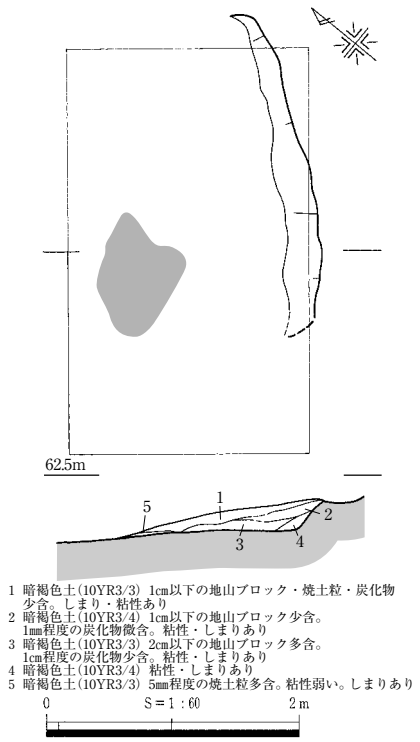
SS10（第52図、PL.14・53）

H24グリッドに位置し、SS7と並ぶようにして検出された。谷の遺物包含層の掘り下げを並行して行っていたため、東側について確認しきれていない。確認した範囲で長軸8.5m、短軸4.1mを測る。本来の形状は不整な長方形であったと思われる。深さは西壁で最大60cmであった。西壁に沿って壁溝が認められた。

幅は20～30cmと広いが深さは10cmに満たない。北側で分岐したようになるが、別のものが２重に巡っていたかどうかは分からない。底面には小ピットP1～P6が掘られていた。また炭化物の集積と被熱面も認められた。埋土の堆積状況からは、廃絶後自然に埋没した様子が窺える。

埋土中から出土した107を図化した。口縁端部を上方に拡張し３条の凹線文を施している。体部の内面調整は不明である。

SS10は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）の遺構と思われる。　（湯村）



第50図　SS11

SS11（第50・51図、PL.14・47・53）

G28グリッド、東尾根西斜面の標高62m付近に位置し、遺構の南端はSD1に切られている。

遺物包含層を掘り下げ中に、土器がまとまって出土したため精査したところ、掘り込みを伴うことを確認し、形状などから段状遺構とした。規模は、幅2.6m、奥行き1.5mを測り、底面には長軸1m、短軸70cmの範囲で被熱面が存在する。

遺物の多くは南東から北西にかけて堆積する１層から出土しているが、底面付近からも数点出土している。第51図に挙げた遺物は１層出土である。

出土遺物の特徴及び埋土の堆積状況から、本遺構は弥生時代中期後葉（Ⅳ－2からⅣ－3）に位置づけられる。　（岩垣）